

定石通解

第二卷



246-114



天理

天

地通

明治
43. 4. 21
丙寅

定石通解

第貳卷

木堂 犬養 毅題字
五段 岩佐 銈講述
樂石 胡桃 正 見編輯

發行所

棊界新報社

秘

木堂居士題

毅

木

序

「定石通解」の第一巻を發行してより、約一年の日月を經過して、今や第二巻を發行することになつたが、この間、第一巻を購讀せられた方々から、「第二巻は何時頃發行になるか」とか、「まだ第二巻は出ないか」とか、「附手だけでは仕方がないから、早く大桂馬の部を出して呉れ」とか、さも待遠しやうな書面が、毎月幾十通となくやつて來た。けれども、わが社の發行する碁書は、世間の書肆の發行する碁書のやうに、なんでも出して賣れさへすればよいとか、金が儲かりさへすればよいとかいふのとは、聊か趣きが違つてゐて、正しい碁書、分り易い碁書を發行して、碁道の進歩發達をはかりたいといふのが主意であるから、なかなか一夜作りに拵へるといふ譯にゆかない。

世間には、十何版と賣れた碁書もあるやうだが、賣れたから良書とはいへぬ。その内容はと調べて見ると、随分思ひきつた間違ひだらけで、その説き方といひ、文章といひ、殆んどお話しにならぬのがある。然らば、そんな御粗末なものが、なんで大に賣れたかといふと、全く法螺の廣告が當つたのである。言ひかへると、多くの同好者が、法螺の廣告に騙されたのである。しかし、世の中は盲目ばかりでないから、良書の光彩は追ひ追ひに發揮して、悪書の姿は自然に失せて來る。現に、本書の發行を催促して來るほどの人人は、いづれも、他の碁書は見るに堪へぬといふので、い

たく本書を激賞せられてゐる。著者は、巨萬の大金を貰ふよりも、斯る一語を聞く方が嬉しいので、本書の眞價が、漸く識者に認められるやうになつたことは、著者の光榮とし、本懐とするところである。

第一卷には、置碁における「附手」の定石を收めただけであるが、この第二卷には、「大桂馬」の受手に關する、あらゆる定石を始め、「大桂馬掛り」「大大桂馬掛り」「一間高掛り」「二間高掛り」に對する、あらゆる受手の變化を説き盡してあるから、第一卷と併せて、置碁の定石はここに完結を告げた譯である。

圍碁學習の方法や、圍碁上達の道は、勿論いろいろあるけれども、初學者にありては、先づ置碁の定石を覚えるのが、第一の捷徑である。著者は本書によりて、初學者がよく置碁定石の神髓を知り、進んで布石學習の用意を整へ、自由自在に定石を活用して、圍碁全體の意義を覺るべき、基礎を養はれんことを望む者である。

明治四十三年三月

樂石生謹誌

目次

- 大桂馬三三打込みの變化……………一—一五
- 同附切り(白⑤の手にて置石に飛附け、⑤の手にて切る場合)の變化……………一六—二七
- 同上白⑤の手よりの變化……………二八—三〇
- 同白⑤の手を内より置石に附けし變化……………三〇—三一
- 同上白⑤の手にて小桂馬に掛けし場合の變化……………三二—三五
- 同兩附(黒④と双方より大桂馬に受けし時、白⑤とこれに附ける)の場合……………三五
- 同白⑤の手にて外より黒④の石に附けし場合の變化……………三六—三九
- 同上白⑤の手にて上より附けし場合の變化……………四〇—四二
- 同上白⑤の手にて下より附けし場合の變化……………四二—四六
- 同上白⑤の手にて夾み黒④の手にて締りし時白⑤と打込みし場合の變化……………四六—五六
- 同上白⑤の手にて一間に立ちし場合及び⑤の手にて打込みし場合の變化……………五六—五八
- 同上白⑤の手にて二間に立ち⑤の手にて打込みし場合の變化……………五九—六二

○同上黒●の手よりの變化……………	六三
○同上白⑤の手にて小桂馬に掛けし場合……………	六四
○同上黒④の手にて①の白に尖付けし場合の變化……………	六五—六七
○同上黒④の手にて①に付けし場合の變化……………	六八—七〇
○同白③の手にて●の黒の肩に打ち⑤の手にて置石に飛付けし場合の變化……………	七一—七四
○同白③の手にて小桂馬に掛け更に⑤と一間に飛びし場合……………	七五
○同白③の手にて●の黒に帽子に打ちし場合の變化……………	七六—七八
○大桂馬掛り及び大大桂馬掛りに對する黒の受手……………	七九—八〇
○一間高掛りに對する黒の受手……………	八一
○二間高掛りの變化……………	八二—八六

定石通解 第二卷

五段 岩佐 銈講述
樂石 胡桃正見編輯

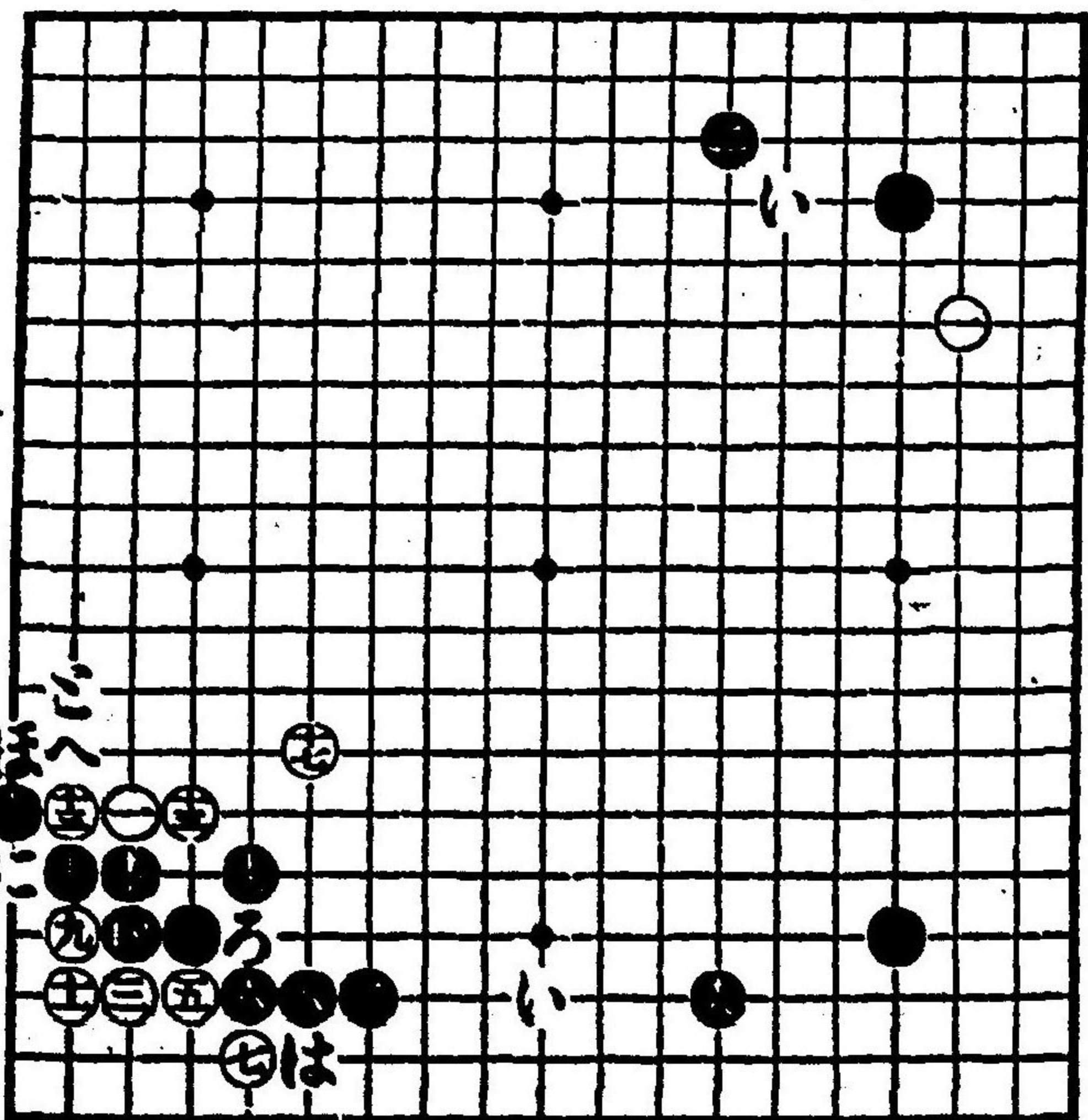
附手の定石は第一卷で終りを告げたから、本卷には、主として「大桂馬」の定石に移らうと思ふ。讀者の多くは、無論大桂馬くらゐは御存じであらうと思ふが、しかし、初めて碁を學ぶ人もあらうから、先づ順序として、これより説かうとする「大桂馬」とは、どんなものであるかといふことから説き出した。

則ち第一圖のやうに、白が①と黒の置石に對して小桂馬に掛つた時、黒が●と打つのが、いはゆる「大桂馬の受手」である。そこでこの大桂馬を以つて、これまで説いて來た附手に比べたらどうかといふに、一寸大桂馬の方が餘程手が廣く、變化が多いやうに思はれるが、さて實際やつて見ると、附手よりは却つて變化が少い。しかし、碁は同形では面白くないから、四五子くらゐの置碁とすれば、一方に附手を打つたら、一方は大桂馬に受けるといふやうにさせて打つ方がよい。けれども、碁の本意味から言へば、附手よりも、大桂馬よりも、「い」と一間に飛ぶのに越した手はない。

さて白が①と掛り、黒が●と大桂馬に受けた時、白は③の手で何處に打つのがよいかといふと、勿論場合によることであるから、一概には言へぬが、第二圖のやうに、「三ノ三」に打込むのが本手である。なぜかといふと、白が掛りでなく他の所に打つたすれば、黒に④の所に絡られて仕舞ふ。黒に●と絡られたとして、白の①の手を考へて見ると、恰度黒が●と大桂馬に打つてあるのに、白が①と掛つて黒に●と絡られたと同じ結果になるからである。それゆゑ、白は黒に絡られぬ中に、③と④の如く「三三」に飛込むので、これが大桂馬に對する打込みの定石である。黒●の手

は、場合により⑤の所に打つこともあるが、最初では、
 圖の如く打つて白を断絶させるのがよい。黒⑥と抑へる
 のは、この場合ではよいけれども、若し「い」の邊に白石
 のある場合には、「ろ」に伸びる方が無事である。僅のこ
 とだけれども、初學の中はこの「場合」といふことを忘れ
 て仕舞ふので、定石を打つて碁に敗けるといふ結果に陥
 るから、くれぐれも忘れてはならぬ。白④は止むを得ぬ
 手で、若し白がこの手で「ろ」に切れば、黒は⑤の所に跳
 ねてゐて、つまり切つた白石を取る事が出来る。既に
 白が④と跳ねた以上は、黒の④は止むを得ぬ手である。
 中には、④の手で「は」に抑へる人もあるが、それは①の
 白のない場合に打つ手で、圖の如き場合には、白は直に
 「ろ」に切り、④の所に跳ねて渡つて仕舞ふから、一向つ
 まらない。手順をかへて説明すると、黒が⑥と跳んだ時、
 白が「ろ」に切つたのに、黒は④の所に下るべきを下らず
 に「は」に抑へ、白に④の所に跳ねさせて渡らせたと同じ
 道理になる。それゆゑ、①と白石のあるのに、「は」に抑
 へる手は、絶対にない筋と覚えておくがよい。白④の手
 は、全體打ちたくない所だけれども、若し打たずに黒か
 ら打たれると、隅の白に活きがないから、止むを得ず打
 つのである。又黒が⑥の手で、④の所に出るのを往々見
 ることがあるけれども、これは大悪手である。黒⑥は肝

(第一圖)



(第二圖)

要の手であるから、忘れてはならぬ。初學の中は、とかく後手のやう思ふと見えて、「ろ」に下りたがるけれども、
 ⑥と跳ねた時、假りに白が「は」に抑へて、黒が「ろ」に跳んだものとすれば、黒は後に「い」に切る手が飛つてゐるが、
 單に「ろ」に下つて、居る後に④に出れば、白は「は」に抑へずに「と」に飛ぶから、黒の悪いことは分るであらう。
 黒④は必要の手で、若し白より覗かれてから、「ろ」に跳ぶことになれば、碁の本形を失つて仕舞ふ。形を失ふとい
 ふのは、眼形を少くして、發展の道が塞がるといふ意味に外ならぬから、形は最も大切である。白が④の手で、若
 し「と」に飛んだならば、黒は④の手で④の所に打つがよい。しかし、圖の如く白が打つたとすれば、黒は⑥と何處
 へ打つたらよいかといふに、これは布石に關係するから確然と示す譯にはゆかぬが、圖の如く左右の隅に白石のあ
 る場合には、その置石より大桂馬に打つのが一番宜しい。

人生而靜、其情難見、感物而動、然後可辨。推之於碁、勝敗可得
 而先驗。法曰、夫持重而廉者多、得輕易而貪者多、喪不爭而自
 保者多、勝務殺而不顧者多、敗因敗而思者其勢進、戰勝而驕
 者其勢退、求己弊不求人之弊者益、攻其敵不知敵之攻己者
 損、目凝一局者其思周、心役他事者其慮散、行遠而應者吉、機
 淺而詐者凶、能自畏敵者強、謂人莫己若者亡、意旁通者高、心
 執一者果、語默有常使敵難量、動靜無度招人所惡。詩云、他人
 有心予忖度之。

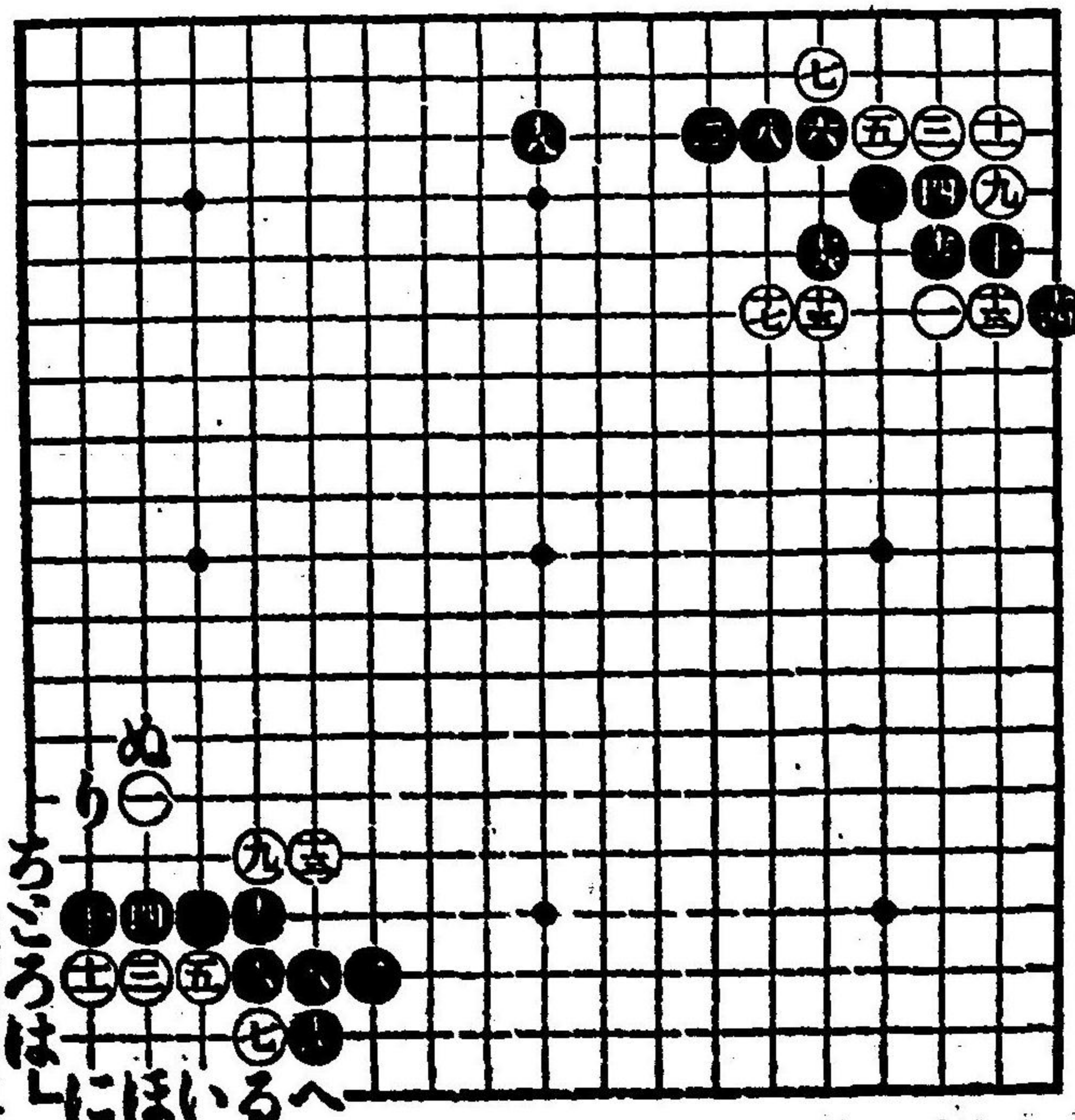
(定石通解の一巻)

第三圖は、前圖白④の手より變化したのであるが、これは、唯變化を試みたといふだけで、餘り好ましい手ではない。しかし、この場合でも、黒⑤の手は必要で、白が⑥と伸びた時は、黒は⑦と圖の如く打つがよい。

第四圖における白④の手は、多く置かせた場合には、黒の應手を試みるために打つけれども、無理である。矢張り、⑤の所に跳ね繼ぎを打つのがよい。黒⑥の手は最も肝要であるから、忘れてはならぬ。初學の中は、とかく白に④と覗かれると、直に⑤の所に繼ぎたがるから、白に⑥の所に跳ね繼ぎを打たれても、又他の手を打たれても面白くないことになる。されば黒は、先づ⑦と下り、白に④に應じさせて、然る後に⑤と繼ぐのが手順である。

白④の手は、元來無理であるから、黒に⑤と抑へられると、隅の白は唯は活きられないことになる。則ち白が⑥に掛繼げば、黒は⑦に跳ね、白は⑧の時⑨に置き、白は⑩に打てば⑪に下つて、隅の白は死となし、又白が⑫に掛繼がすに⑬に跳ねて来れば、黒は⑭に抑へ、白⑮の時⑯に掛繼ぎ、白は⑰の掛繼ぎを打つて活き、これは活き得るけれども、その代り黒は⑱に跳ねられて、大損を招くことになるから、活きたとは言へぬ。ぬくらのものである。されば白は、黒に⑤と抑へられる時、勢ひ⑥に掛繼ぐとも出来ず、⑦に跳ねぐとも

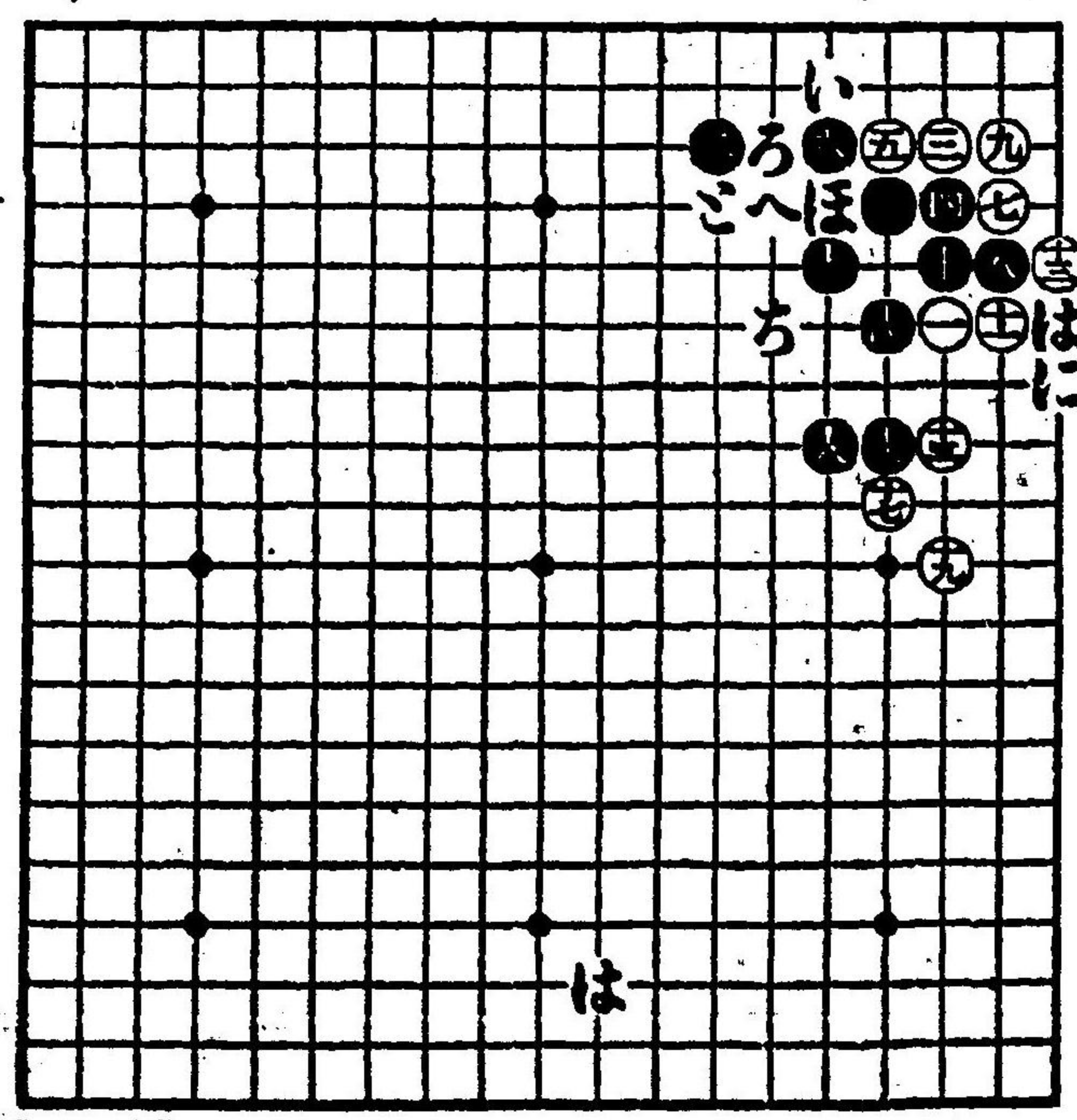
出来ないので、⑥に下らねばならぬが、さすれば、黒は⑦に置き、⑧といふ筋があつて、白は勢でなければ活き



第三圖
出来ないので、⑥に下らねばならぬが、さすれば、黒は⑦に置き、⑧といふ筋があつて、白は勢でなければ活き

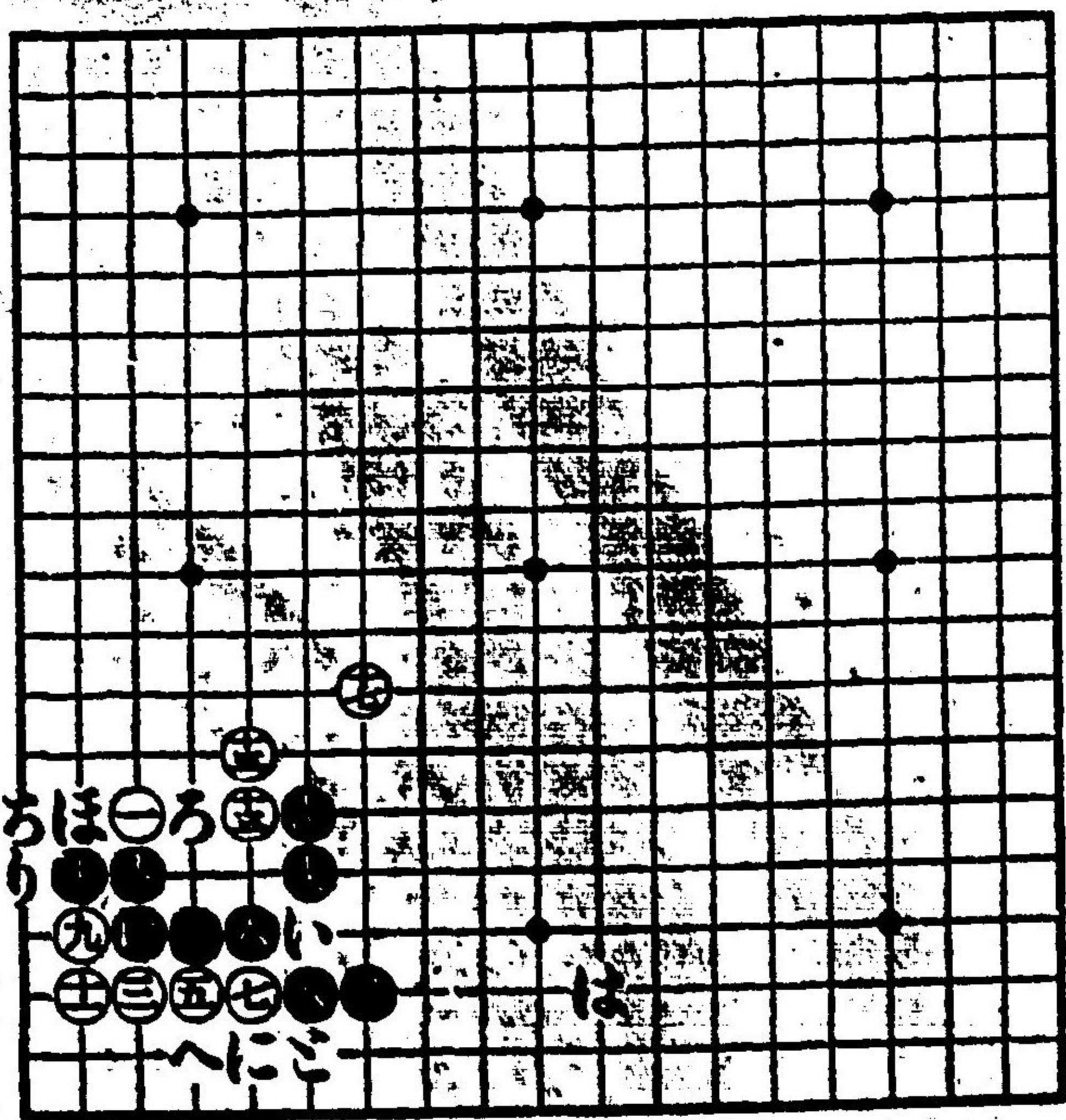
(第三圖)

第五圖は、白④の手よりの變化で、白は⑤の如く跳ねを先きにして、⑥と渡らうと打つたのであるが、この場合には、黒は白に渡らせて⑦と打つのがよい手である。これ白の⑧の跳ねと、黒の⑨の繼ぎとがないからである。若し白に渡らせまいと⑩に跳ねれば、白は⑪に抑へ、黒が⑫の所に繼げば⑬に切るといふ手があつて、混雜を來すから、置碁としては好ましくない。しかし、渡らせまいと⑭に跳ねて、白は⑮に切られた以上は、⑯の所に跳ね、白⑰の時⑱に繼ぎ、白⑲の時⑳に尖るのであるのがよい。これは、切られた時の心得のためであるが、かく打つとしても、矢張り面白くない。先づは圖の如く打つべきものである。



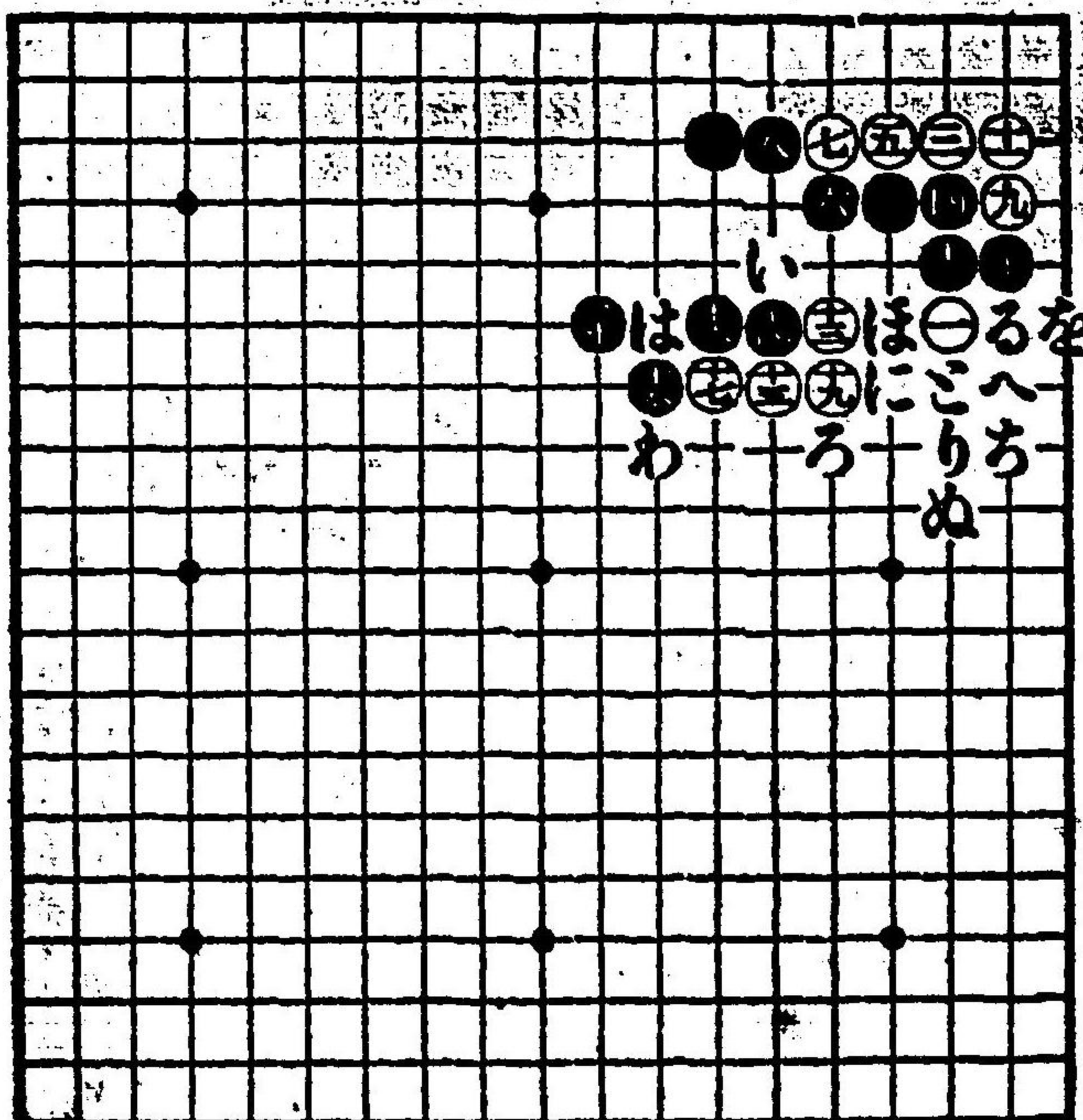
(第五圖)

第六圖は、黒●の手よりの變化であるが、前數圖に示した●の手に比べると、餘程緩い手である。しかし、昔から定石になつてゐるから、一通り説明しておく。黒●の手は善い手で、忘れてはならぬ。昔の碁には、●と抑へずに「い」に引いてあるが、それは緩くて面白くない。既に●の手が緩い上に、又緩い手を打つてはたまらない。白●の時●と附けるのは肝要の手で、●の所に掛懸ぐ人もあるが、これは緩い手である。但し白が●の手で「ろ」に伸びた時は、黒も●の手で●の所に掛懸ぐのが肝要である。初學の中は、とかくこの邊の間違ひが多いから、特に注意しておく、さて黒●の手は、何處へ打つたらいいかといふと、これは他の形勢によつて定まるとだが、「は」に打つてもよし、又は他の大場に打つても差支へはない。又黒は、後に「は」跳ねやうと思ふ場合には、先づ「は」に曲つておくのが必要である。なぜかといふと、「白へ」に抑へ黒●とに繼いだ時、白が「は」に抑へると、黒は「は」に跳ねるべき所だけども、さすれば、白は手放さず括きてゐるから、勢ひ「り」に下つて、先手を取らねばならぬことになる。して見ると、跳ねるのを下つたり損になるからである。



(第六圖)

第七圖は、前圖●の手よりの變化であるが、●の如く白がこの手で跳ねて來れば、黒は●と伸びるのがよい。初學の中は●と伸びるのを危険とでも思ふものか、往往「は」に引くのを見受けるが、さすれば、白に●と伸びられて、いはゆる伸び越される形となるから、非常な損である。黒●は毎毎述べた通り、二目の頭といつて極めて肝要の所であるから、是非跳ねなければならぬ所である。しかし、白が●又は「ろ」に繼いである場合には、●と跳ねる手はないから、「は」に伸びることを忘れてはならぬ。又白が●と打たずに他に轉じた場合には、黒は先づ「は」に跳ね、白「は」に繼げば「へ」に飛出し、白「と」の時「ち」に伸び、白「り」に押せば「ぬ」に跳ねて打つことを忘れてはならぬ。されば、白●の繼ぎは肝要で、白が●又は「ろ」に掛懸いだ以上は、黒も亦●と掛懸いでゐて、黒の方が大に優つてゐる。若し又白が●に繼がずに「る」に抑へて來たならば、黒は「を」に跳ね、白「ち」に飛べば、「わ」に伸びさつて打つがよい。かくなれば、黒は一層よい譯である。要するに、黒は●と附け●と伸びてさへをれば、如何に變じても黒の方が優つてゐるから、くれぐれも●の手で「は」に引いてはならぬ。

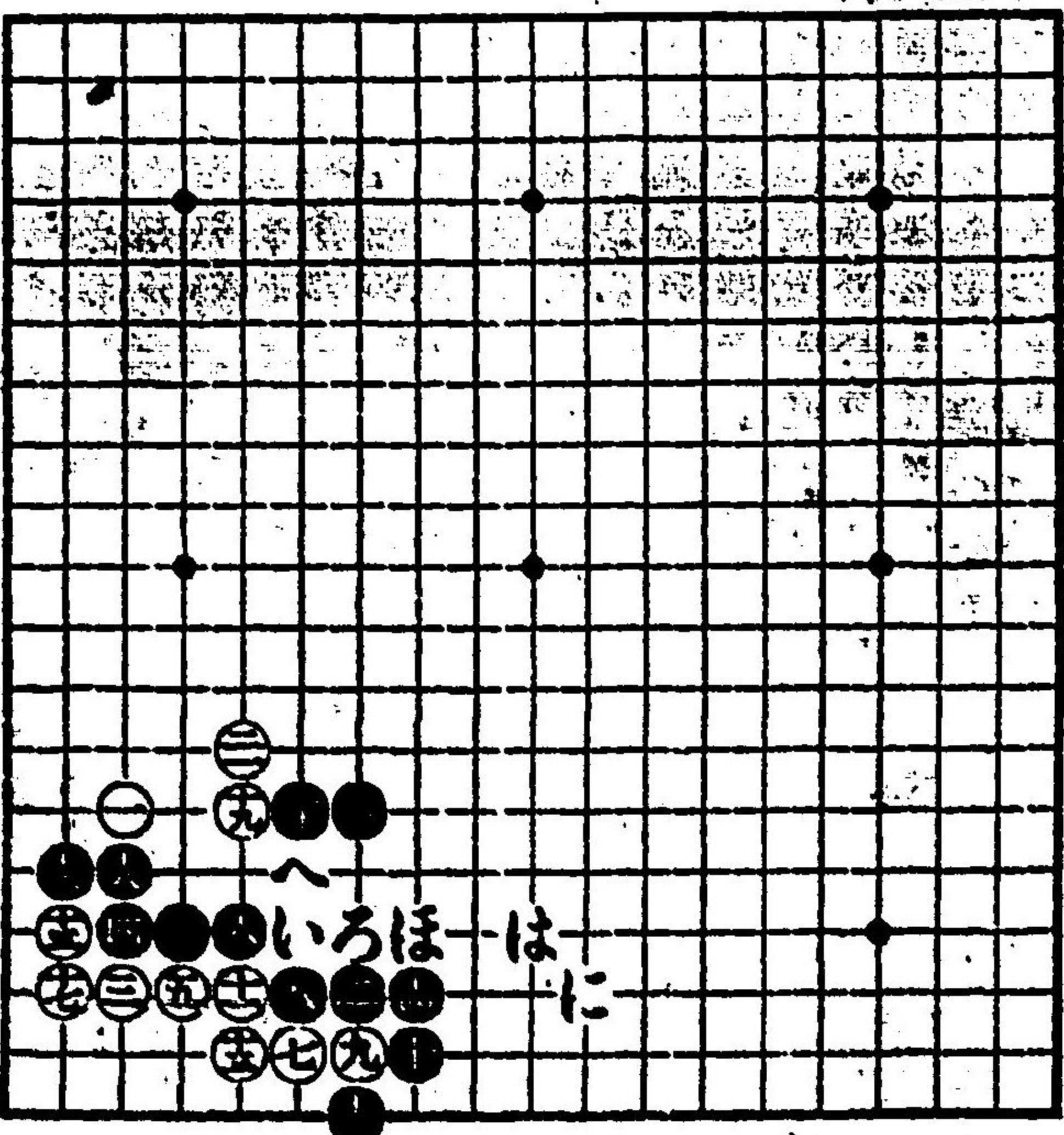


(第七圖)

第八圖は、白(田)の手よりの變化であるが、この場合には、黒は(●)と打つのがよい。(●)の手で(田)の所に抑へるのを往見受けるが、さすれば、白は(●)の所に出で、黒が「は」に抑へた時、(田)と跳ねるの順序を了つて「は」に切るといふ手があるから、置業としては紛れが多くなる。それゆゑ、白が桂馬に飛んだ時は、(田)の如く打つのが確かである。

黒(●)の跳ねは忘れてはならぬ手で、若し(●)の跳ねを先きにするれば、白は(田)の跳ねを先きに打つから、黒が(●)の所に跳ねても、利かない場合がある。又(●)の跳ねは、「は」に「は」の邊に黒石のある場合には、「は」に掛ねる方が働きがある。

又黒(●)は、普通は前圖の如く、「は」に引くべき所だけれども、この場合は、(●)と長く伸びた上に、(●)の曲りさへあつて、少しも恐ろしくない所だから、(田)の如く打つ方が働きがある。



(第八圖)

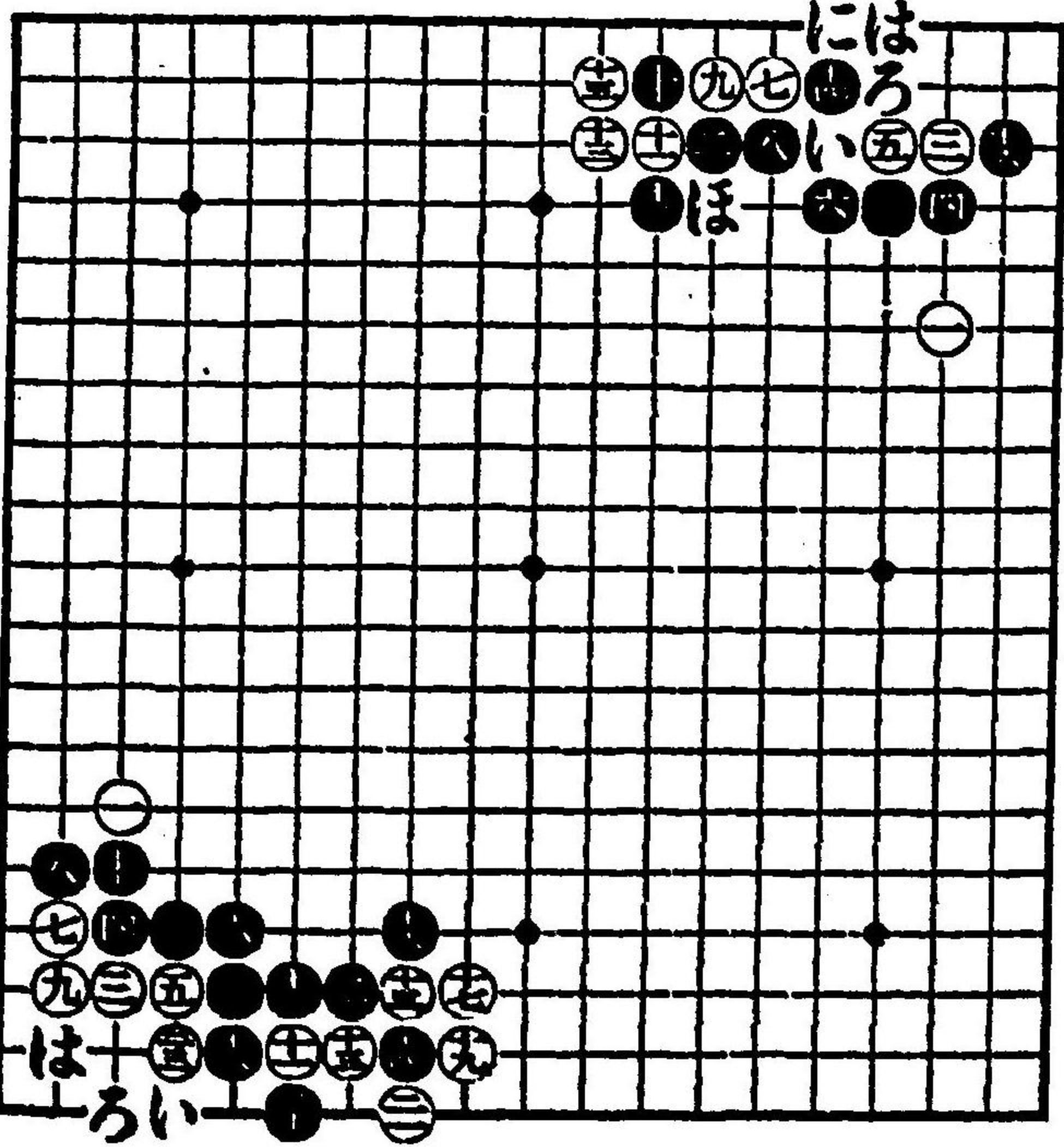
第九圖は、白(田)の手よりの變化で、白は少し損の手であるが、黒が(●)の手で、若し(田)の所に伸びれば、白は「は」に當て込んで、黒に紛れを多くさせるといふ得があるから、打試みたのである。けれども、この場合には、黒は(●)と打つのがよい。これは(●)と打つて、(●)の一子を棄てるつもりで、白の石を重くする手である。黒(●)の跳ねは最もよい手で、この一手のために、白の(田)の二子は活路がなくつて仕舞ふ、即ち白若し「は」に打てば「は」に跳ねるし、「は」に跳ねて来れば「は」に抑へるから、白は施すべき策がない。しかし、白が「は」に切つて来たならば、注意しないとやり損ふことがあるから、氣をつけねばならぬ。

第十圖は、前圖のやうに隅を取られては白が損であるから、先づ(田)の跳ねを先きに打つて、然る後前圖の順序を踏んで(田)と切り、振替つて後に隅をも活きやうといふツルイ策路であるが、餘り宜しくはない。白は矢張り(田)の手で(●)に突當り、先手を取る方がよい。黒(●)の手は、忘れてはならぬ肝要の手である。若し(●)の跳ねを先きにするれば、(田)の二子を棄てられることがある。ナゼならば、假りに(田)の二子を取つたとしてみると、黒の(●)の手はムダになるからである。

又この隅は、後に黒より「は」に跳ね、白「は」に抑ふれば

「は」に置いて劫になるが、黒は白を取る考へでなく、他の大場を二手打つ考へで、白の劫立ては何處でも聞いてや

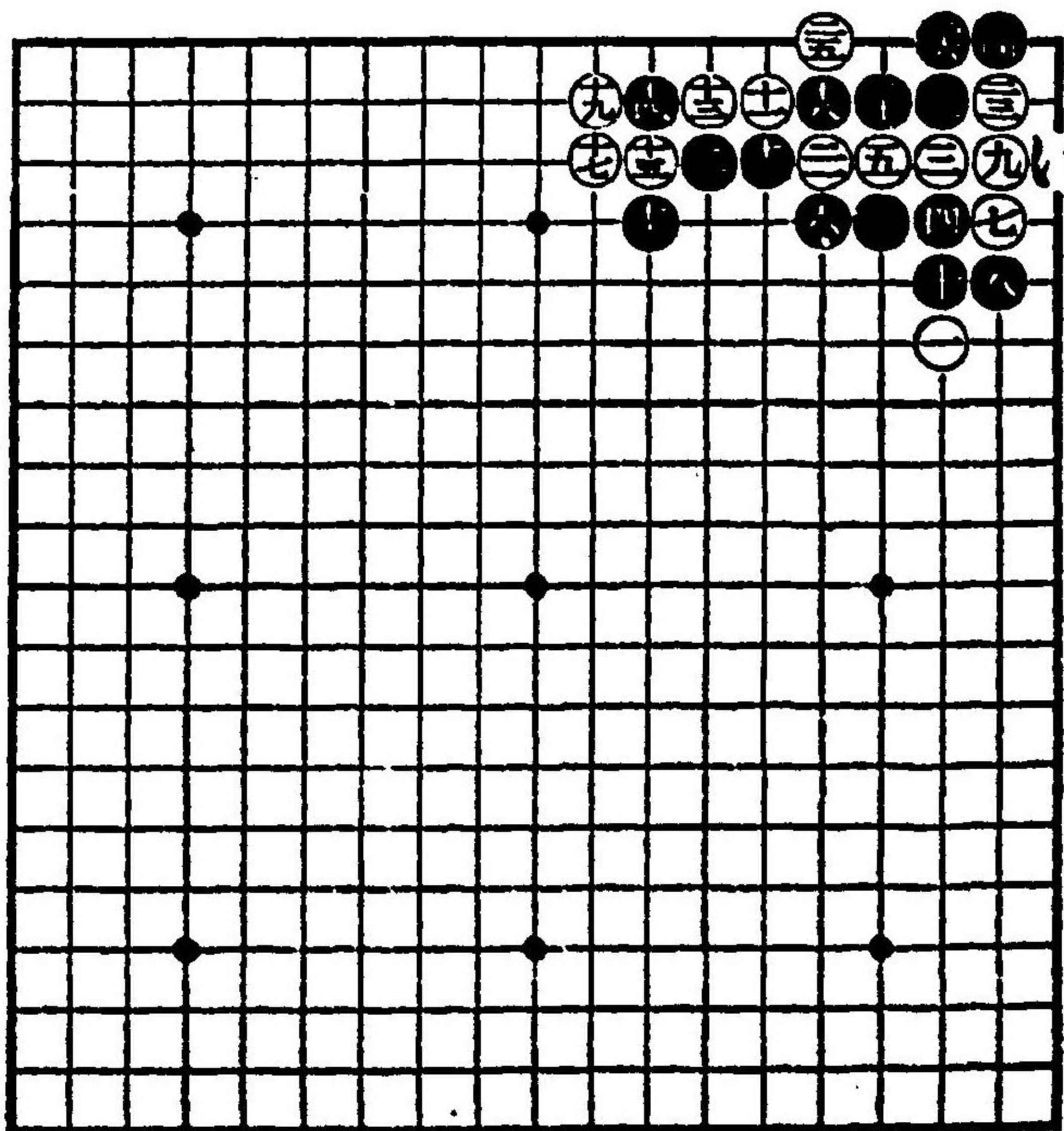
(第九圖)



(第十圖)

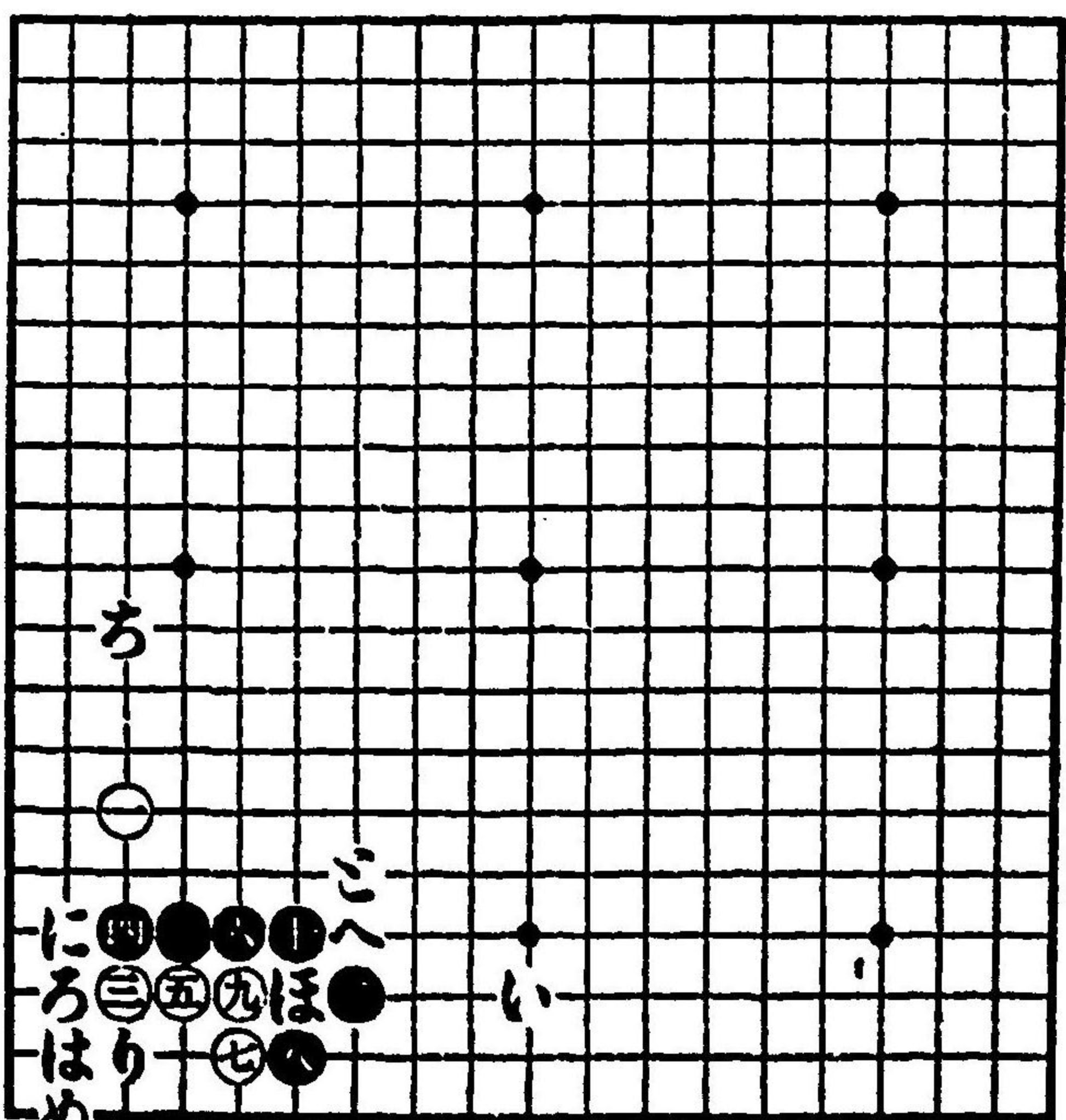
つて、つまり、劫の振替りを打たないのが利益であると心得ておくがよい。

第十一圖は、黒が●の手より變化を打つたもので、これは、黒が隅の白を劫でなくて、只取りにしやうといふ手であるが、白に○と切られては味が悪いから、前圖に比べると大に劣つてゐる。則ち、後に白は「い」に打つて、劫にするといふ筋があるから面白くないのである。しかし、白が「い」に打つて来たならば、黒は他の大場を打つて、この劫には敗ける覺悟で打つがよい。なぜならば、白に「い」と打たれた以上は、黒は一手を費したところで、矢張り劫たるは免れぬからである。それゆゑ、これは古い定石にある圖だが、先づは打たぬ方が宜しい。



(第十一圖)

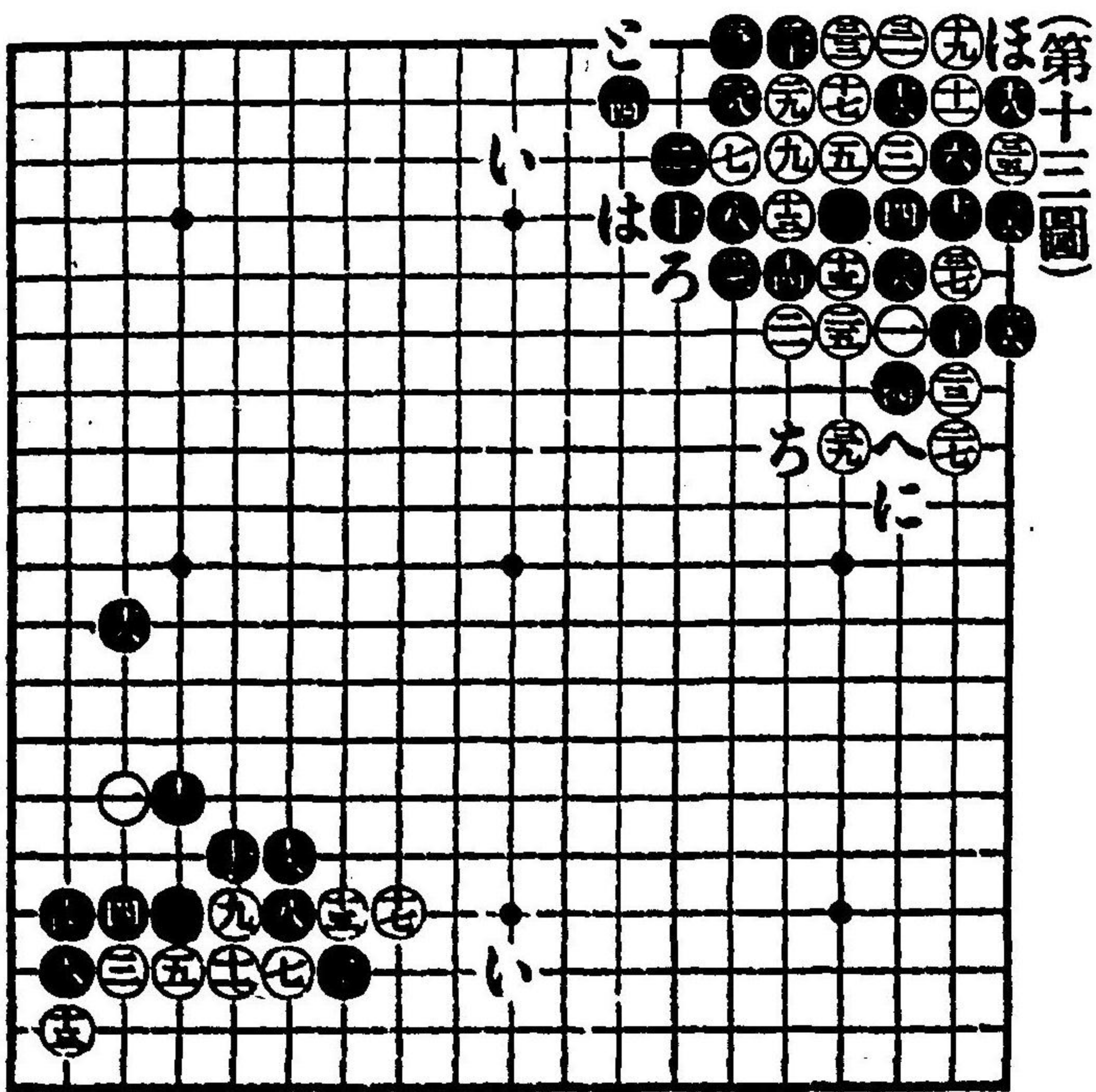
第十二圖は、白○の手よりの變化であるが、白が○とかく尖むのは、「い」の邊に白石のある場合に、黒を迷はさうといふ打方である。けれども、黒は圖の如く打てば少しも差支がない。又「い」に白石のある場合に、白が○と打つて来れば黒は●の手で「ろ」に跳ね、白は「ほ」に抑ふれば「ほ」に離さ、白「ほ」に尖み附くれば●の所に抑へ、白「へ」に切れば「と」に跳ね、先手を取つて「ち」に夾むのもよい。かく打つのは、●の一手を棄てるのだから、如何にも損のやうであるが、後に「り」に切り、白の受方によつては「ぬ」に跳ねるといふ筋があるから、少しも損ではない。これに反して「い」に白石のない場合には、●の手で「ほ」に抑へ、白は「ほ」に跳ね離すととなつて、普通の定石通りになる。初學の中は、とかくこの場合といふを思はずに、何時でも同じ打方をするから非常に損をする事になる。則ち白が○と尖んだ時、●の手で「ほ」に打つ者を往住見受けるが、これは馬鹿手といふものである。



(第十二圖)

第十三圖は、黒②の手よりの變化で、この②の手は、好んで打つべき手ではないが、「ろ」に白石のある場合には打つても宜しい。しかし黒①の手は、「ろ」に白石のある場合には、②の所に打つ方がよい。その時白が若し①の所に切れば、①の一子を棄てるつもりで「ろ」に跳ね「は」に伸ばせて、「ろ」に夾んで打つのである。けれども、前圖に比べると、黒は稍劣つてゐる。

黒②は忘れてはならぬ肝要の手で、この時機を失へば打つ時機がなくなつて仕舞ふ。白④は已むを得ず打つた手であるが、假りにこの手で⑤に一子を取つたとすれば、黒は直に⑥の所に劫に打ち、白「ほ」に取れば⑦の所に附け、白③に跳ねれば⑧に継ぎ、白は⑨に抑へたいけれども、劫が不足だから⑩に一子を打抜くより外はない。さすれば、黒は⑪に跳ねるといふ順になつて、白は隅に地を取つたといふものの、極めて小さいから黒の方が優つて来る。又圖の如くなつた後、白が⑫の手で「へ」に跳ねて、⑬の一子を四丁に取られる場合には、黒は餘り面白くない。それゆゑ、かかる場合には、黒は⑭の手で⑮の所に繼がねばならぬといふことになる。



(第十四圖)

替りとなつて、碁が狭くなるといふ點から見れば、黒の方が善い譯であるが、しかし、かくゴタゴタするのは、黒としては餘り好ましくはない。

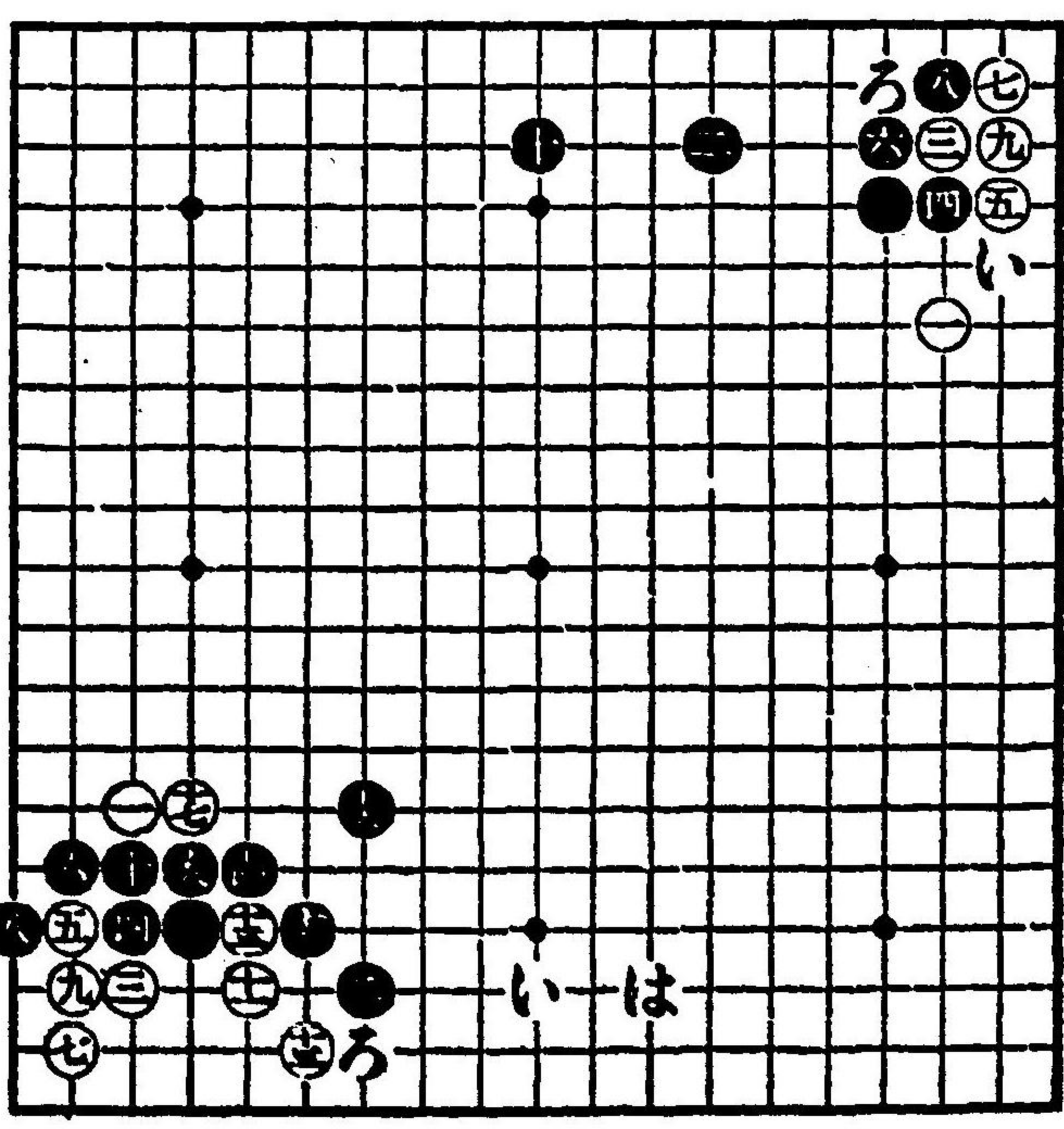
第十四圖は、前圖における白①の手より變化を打つたもので、前圖の如く①の手で②の所に打てば、黒は③の手で④の所に繼ぐから、それを嫌つたのであるが、この場合には、黒は⑤と掛懸いで、⑥の一子を棄て、⑦と打つのがよい。この形は、黒が最も宜しいから、白としては、前二圖のやうに打つて、變化を好むのである。

凡碁有益之而損者。有損之而益者。有侵而利者。有宜右投者。有宜左投者。有先著者。有後著者。有緊辭者。有慢行者。粘子勿前。棄子思後。有始近而終遠者。有始少而終多者。欲強外先攻內。欲實東先擊西。路虛而無眼則先覷。無害於他碁則做劫。饒路則宜疏。受路則勿戰。擇地而侵。無得則進。此皆碁家之幽微也。不可不知。大易曰。非天下之至情孰能與於此。

(碁家集の一事)

第十五圖は、白⑤の手よりの變化で、黒は「ろ」に抑へたいやうな氣がするが、この場合には、●と曲つて打つのがよい。黒④の手は、忘れてならぬ肝要の手で、若しこの手がないと、「ろ」に跳ねられた時黒は後手を取らねばならぬ。しかし、白が⑥の手で⑨と繼いだ場合には、構はずに①と飛ぶのがよい。初學の中は、とかく①の手で「ろ」に繼いだり、又は②の手で「ろ」に下つたりするが、それは一手の損であるから、よくよく心得ておかねばならぬ。圖の如くなれば、黒の形は申分がない。

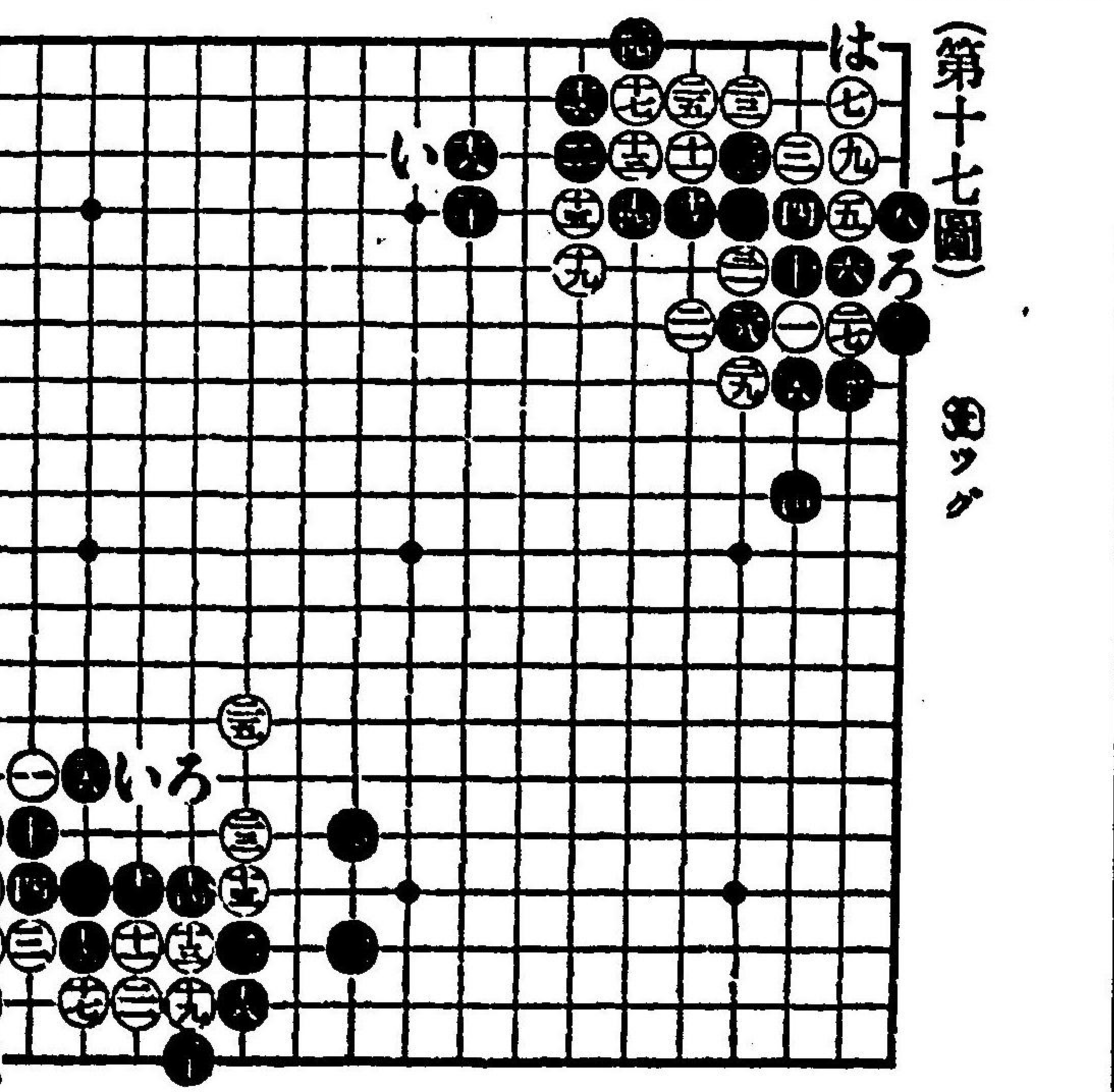
第十六圖は、「ろ」に白石のある場合を想像した打方で、この場合には、黒は●と跳ね出すのがよろしい。既に●と跳出した以上は、●の手は忘れはならぬ。或は劫を恐れて打たぬ人もあるが、それは間違ひである。又黒●●は大に善い手で、かく「ろ」の石と⑤の石とが角突合ひになつてゐる場合には、白は渡つても面白くないから、黒は渡らせる心で圖の如く打つがよい。初學の中は「ろ」に打つて連絡を絶たうとするが、それは面白くない。かかる場合には「は」に夾んで、「ろ」に渡らせるといふ考が必要である。



(第十五圖)

(第十六圖)

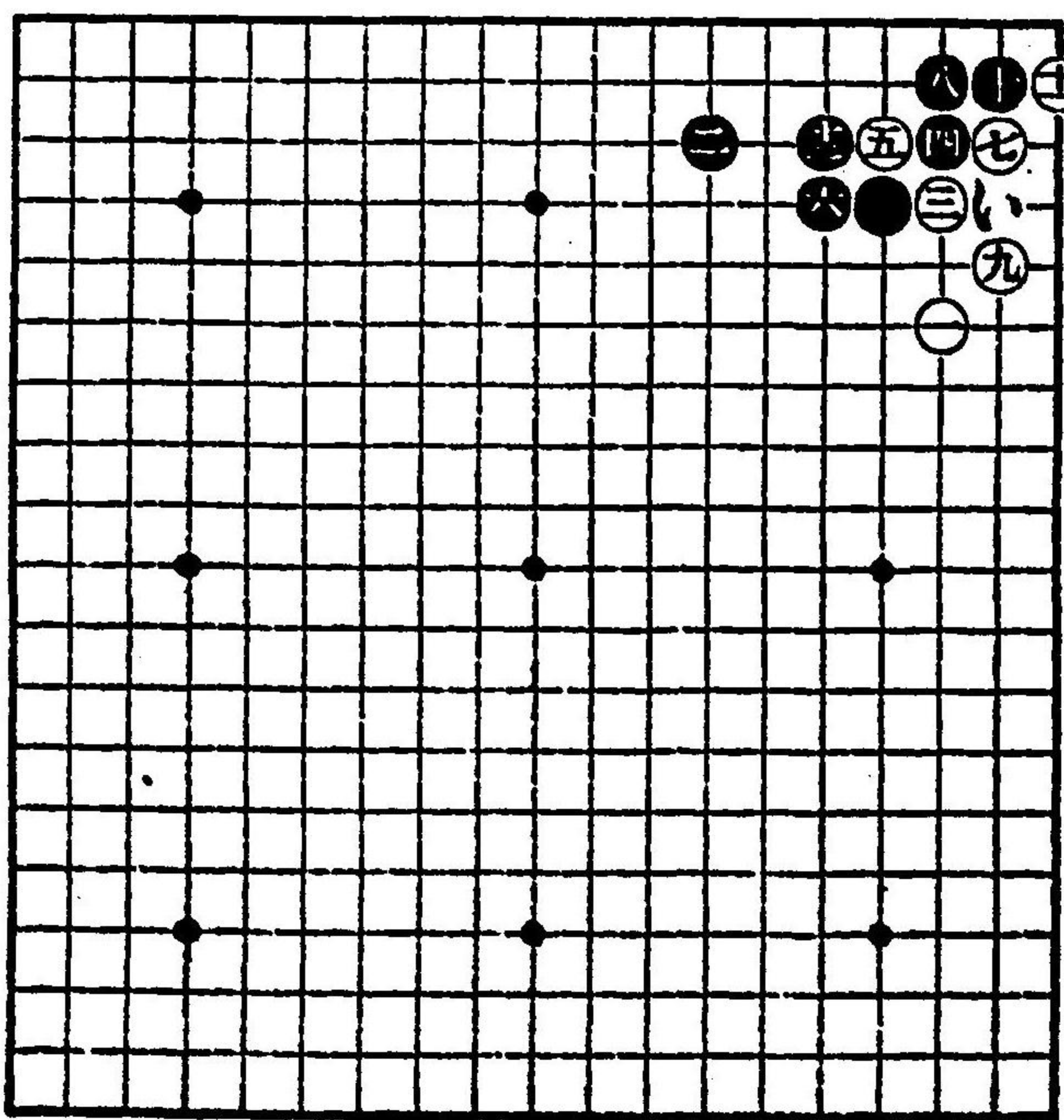
第十七圖も亦、「ろ」に白石のあるものとして、前圖●の手よりの變化であるが、この●手は、「ろ」に白石がある場合にはよいけれども、さもない時は前圖のやうに打つのがよい。唯だ變化を示すといふ迄である。黒●の手は、●の跳ねがあるから善いけれども、さもないと、●と打つた場合に、白は●の所に下り、「ろ」に渡るといふ手があるから、よくよく注意せねばならぬ。白●の繼ぎは、繼がなくとも善いやうに思はれるが、①●の二子を黒に與へるとなれば、「は」に附けられるといふ手があるから、小さいやうで實は小さくないのである。



(第十七圖)

(第十八圖)

第十九圖は、白③の手よりの變化で、附け切りの受手を示したものであるが、全體白が③と附けるのは、最初からこの隅だけで打つ手でなくて、半過ぎに、他の關係上早く治まらうといふ時に打つ手である。然る時は、黒は必ず④と抑ふべきもので、この④所は「三三」の大場であるから、決して忘れてはならぬ。白は、黒に④と抑へられれば、他の手では面白くないから、⑤と切つて變化を試みたのであるが、この時初學の中は、「い」に跳ねたり⑥に抑へたりするので、非常に損害を招くが、⑤と切られた時は、ヂツと⑦に伸びるのが上策である。かく⑧と伸びてよくよく見ると、白は③④と少し無理を打つた形であるから、黒より④と切つたものとして考へると、黒の方がよいことが分る。されば、白は餘儀なくも⑦⑨と打つたもので、白⑩の時⑪と圖の如く一子を抱へてゐて、黒は十分である。



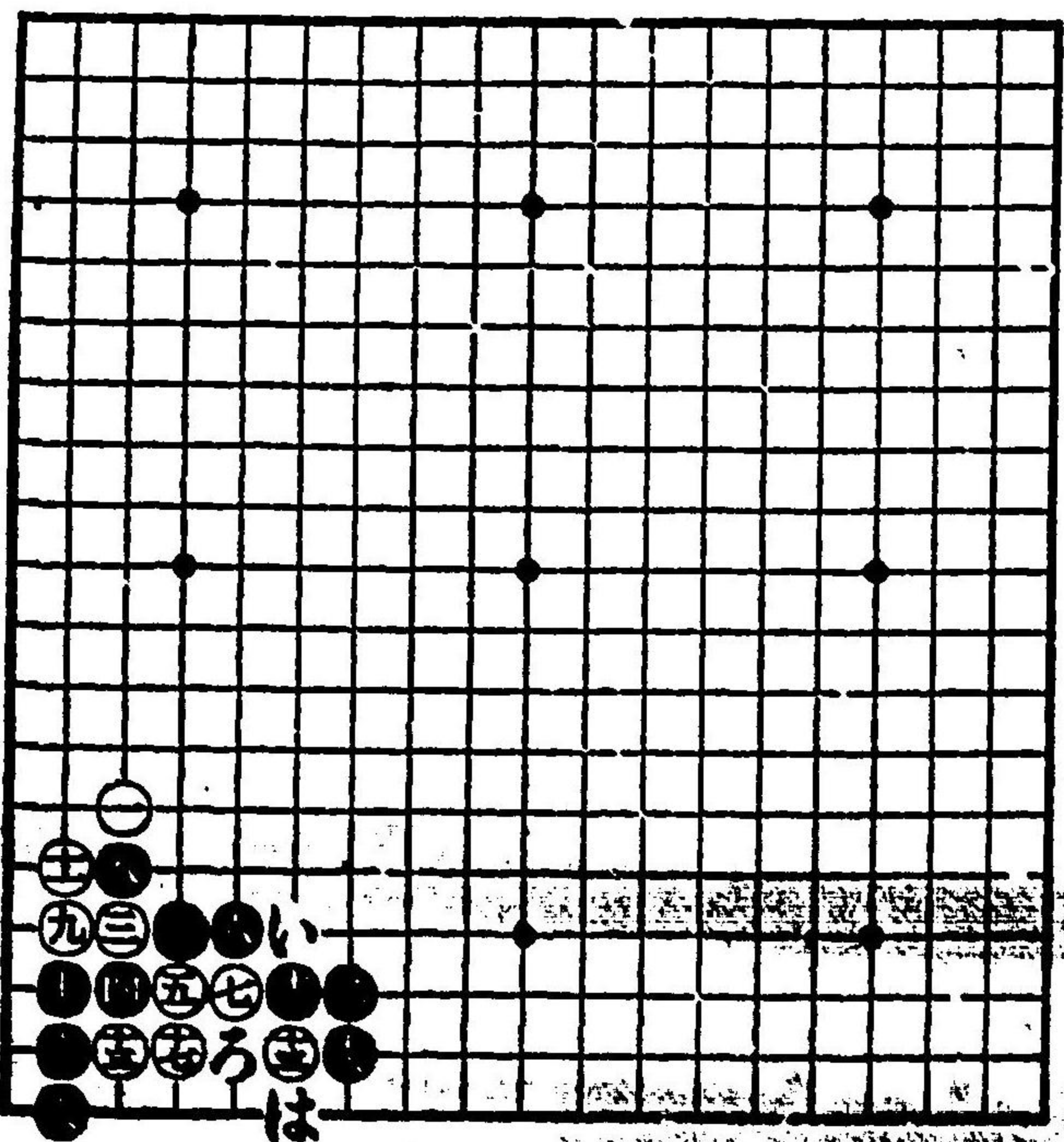
(第十九圖)

第二十圖は、前圖の白⑩の手よりの變化であるが、この⑩の手は全體無理で、白がかく打つのは、黒が直に⑪の所に打つて⑫の所に打つて、振替れば仕合せくらゐのつもりで打つのである。黒⑬は手順といふもので、大によい手である。若し白が⑭の手で「い」に跳ね出したならば、黒は⑮に切つて少しも差支ないし、又白⑯黒⑰と圖の如く打つた以上は、⑱の白は活路がないから、棄てて置くがよい。要するに本圖は、白が逃げやうとはかつた時、黒が逃さじと打つ手段を示したもので、若し白が⑭の手で、「ろ」に繼いだ時は、黒も亦⑰の手で「は」に跳ねることを忘れてはならぬ。

碁をくづす

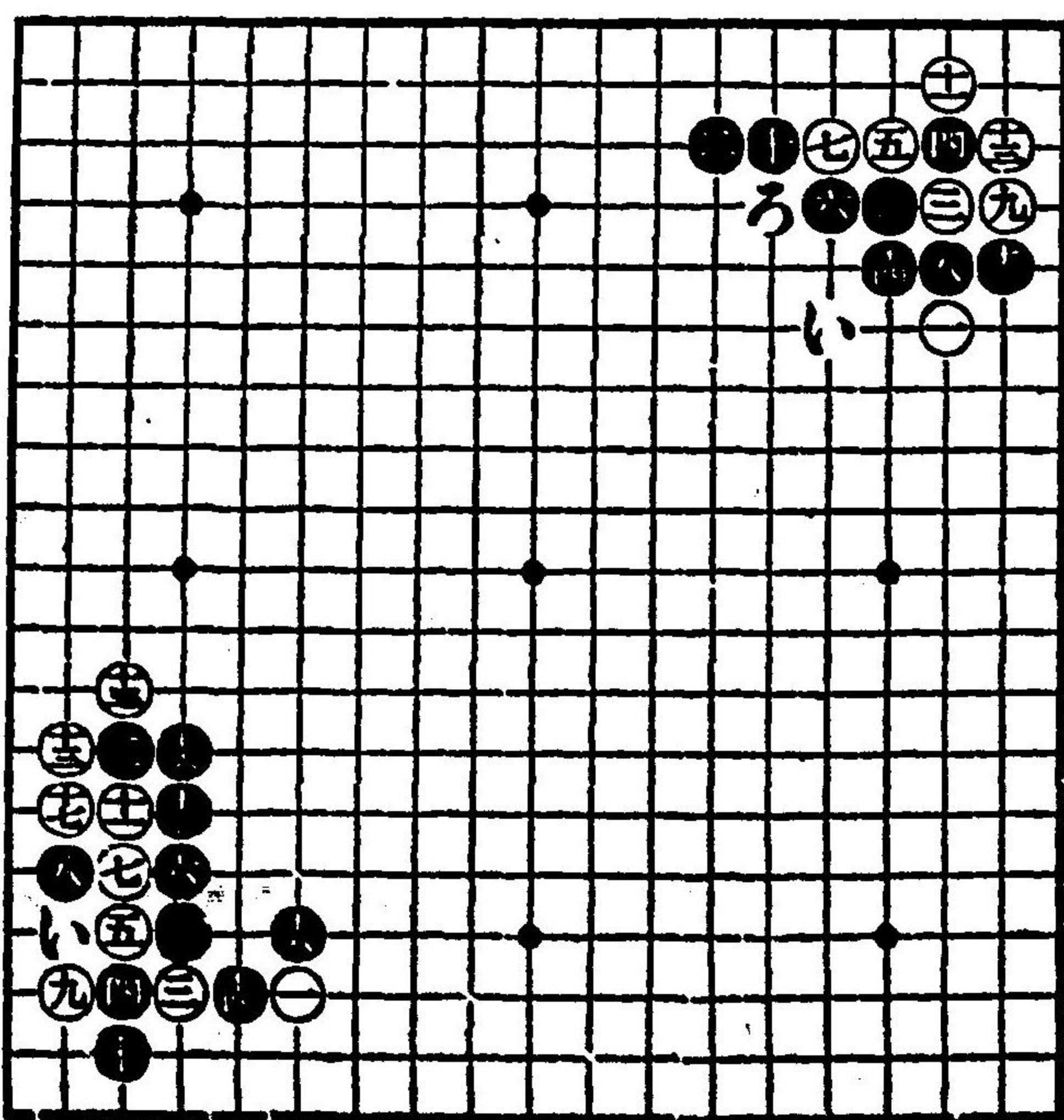
音に若黨

よみがへり



(第二十圖)

第二十一圖は、「ろ」に白石のある場合の打方で、則ち「い」に白石のある時、黒が「い」の手で前黒「ろ」のやうに「ろ」の所に抑へると、白は「ろ」に跳出し、黒「い」に打てば「ろ」の所に切り、二子を與へて「い」の所に繼いで振替る手があるから、
 ①と先きに突當つて、圖の如く變化するのがよろしい。
 第二十二圖は、黒「ろ」の手よりの變化であるが、この「ろ」の手は手筋であるから、場合によつては大に面白くもあ
 るけれども、素りに打つてはならぬ。即ち黒が「ろ」と附けるのは、白を「い」に打たせて「ろ」の所に抑へ、先手を取つて「ろ」の一子を擒にするといふ策である、それゆゑ、白も變化して「ろ」と打つたのである。白の「ろ」及び「い」は善い手で、黒は「ろ」と切つて「い」の一子を取るより外に道がない。しかし、
 ②と跳ねた結果は、黒十分の形である。



(第二十一圖)

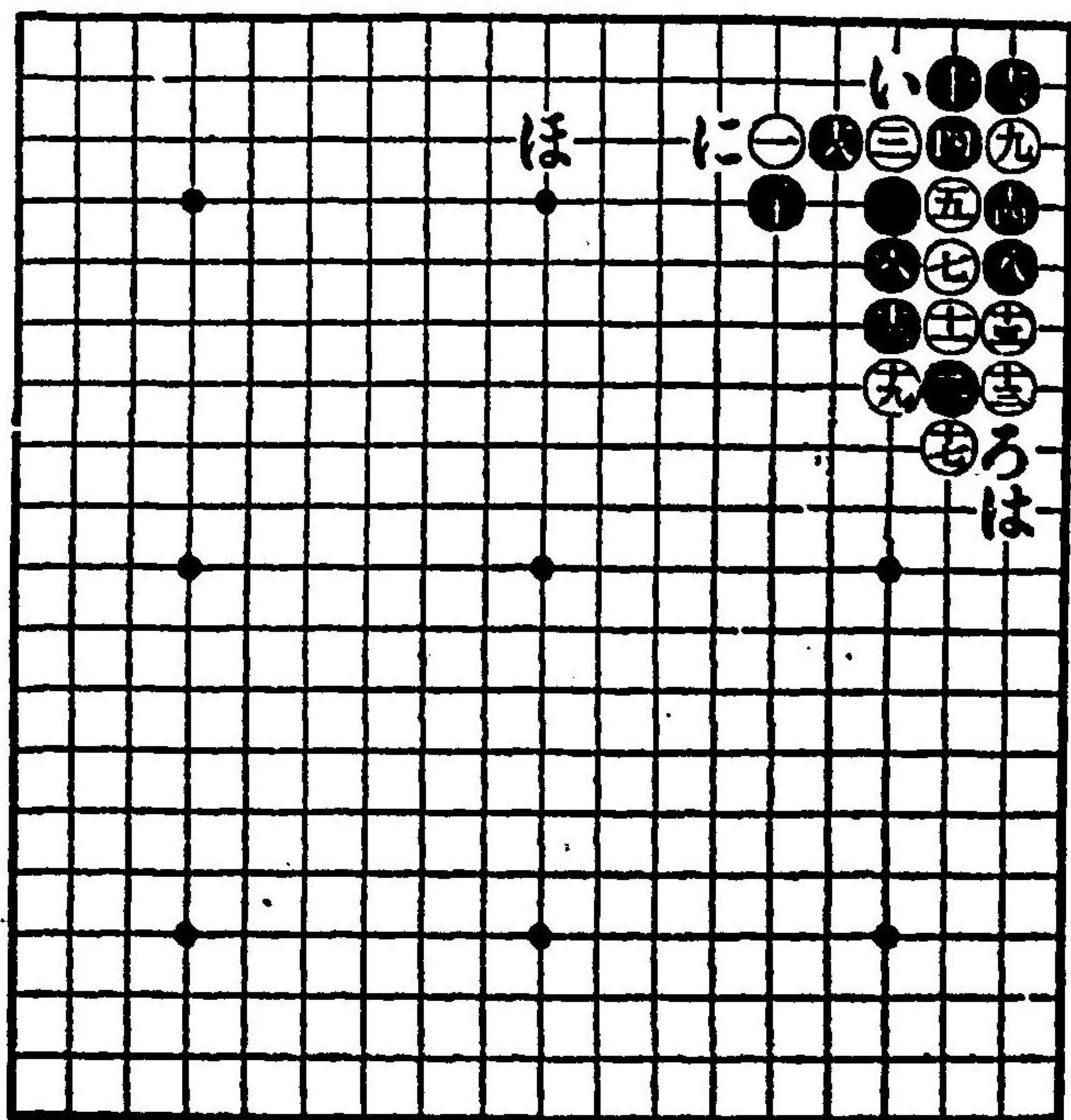
(第二十二圖)

第二十三圖は、前圖「い」の手よりの變化であるが、黒にか
 く打たれては、白は「い」と打つより外はない。若し「い」の手
 で「い」に打てば、黒は「い」の所に伸び、白「ろ」に泳げば「い」
 の所に附けて、「は」又は「い」のいづれかに打つことになる
 から、黒の方が宜しくなる。又圖の如き手順を運んで、
 黒が「い」と打つとになつても、前圖に比べると少し劣るけ
 れども、とにかく「い」の二手を黒が打つとになれば、黒
 の方が優つてゐる。
 又白が「い」の手で「い」の所に立てば、黒は「い」の手で「い」の所に
 繼ぎ、先手を取つて「ほ」に夾むから、矢張り黒の方が宜
 しい。

この石が

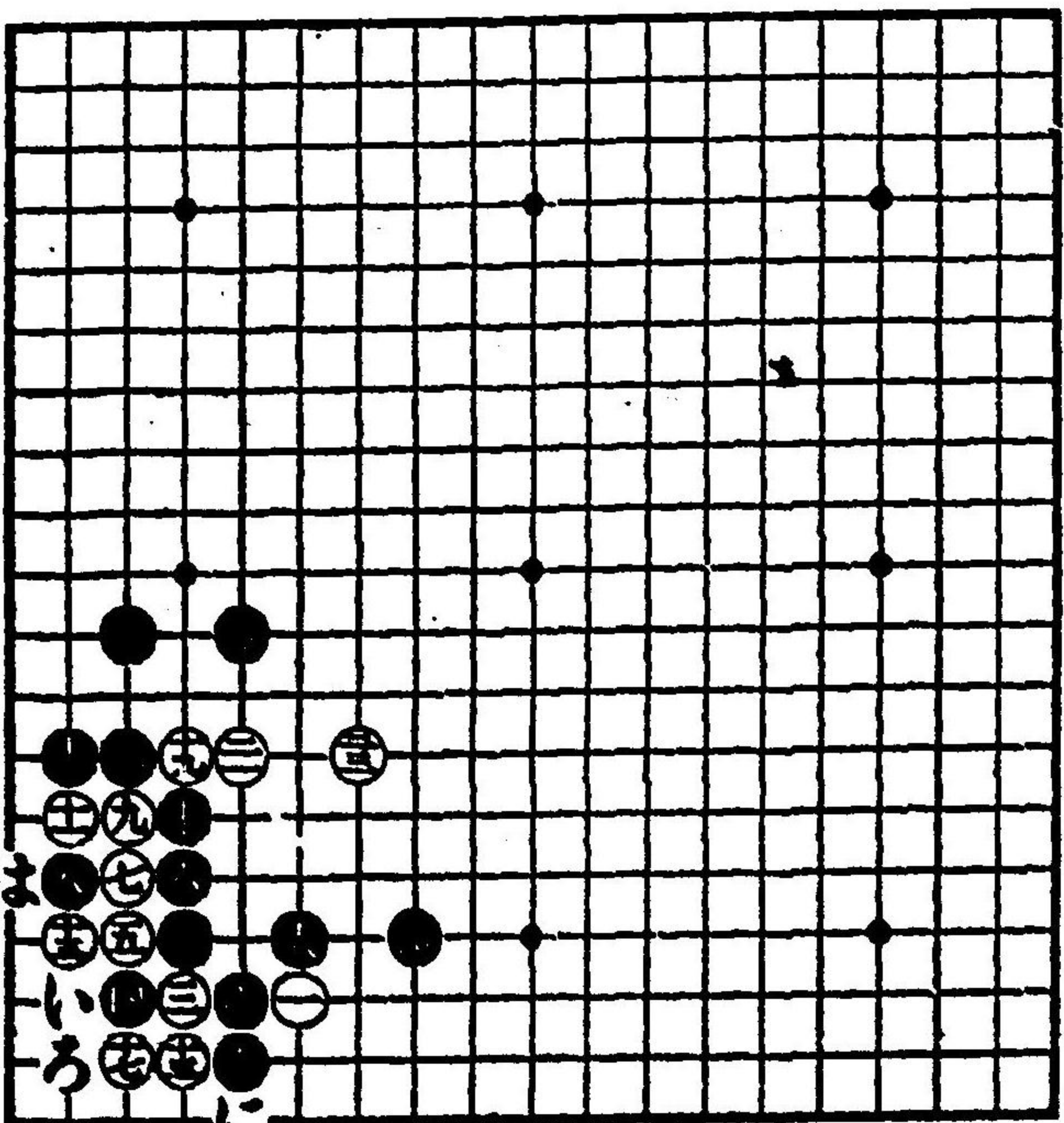
活きりや勝だと

知れたこと



(第二十三圖)

第廿四圖は、白④の手よりの變化であるが、若し④の手で「ろ」に跳ねて、黒を⑤の所に伸ばさせ、⑥の所に跳ねると恰も前圖と同じになる。然るに、白が③の一子を惜むところから、變化を試みたのであるが、俗手で面白くない。白④は⑤に跳ねたいところだけれども、さすれば、黒は「ろ」に伸びて、白が④に一子を抱へた時④に切り、白が⑤に繼いだ時「ろ」に曲り、白が④に切れば「は」に下つて、白を取るといふ手があるから、止むを得ず打つたのであるが、黒が⑥と打つてなつては、矢張り黒の方が大に宜しい。或は、黒が⑥の手で「ろ」に打つて、急速に白を取らうとするのはどうかと問ふ者もあらうが、さうすると、白は「ろ」に附けるといふ手があるから、圖の如く打つのがよい。又後に至つて、黒が「は」に下ることになれば、「ろ」に打つて白を殺すことが出来るから、白①の一子は、動けないものと思はねばならぬ。



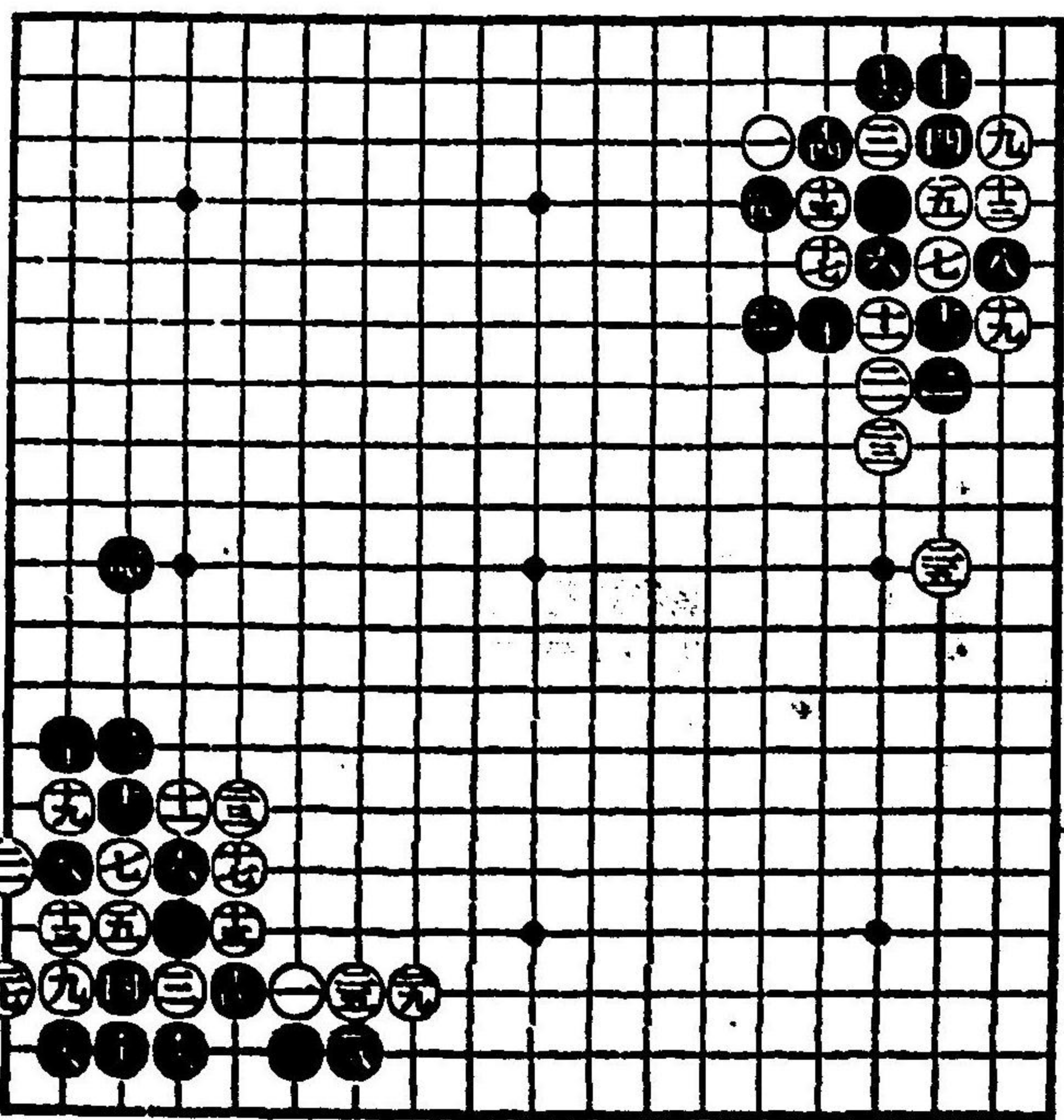
(第二十四圖)

第二十五圖は、白がいづれに變化しても、面白くないところから、④の手を變化して圖の如く跳ねて見たのである。この④の跳ねは、本形ではあるが、無理であるから矢張り黒の方が宜しい。則ち黒の⑤と白の⑥の交換は、黒が中央に發展の出来るだけ優つて居る譯である。

又碁かと

くるまつて寝る

草履取



(第二十五圖)

●ツグ (第二十六圖)

第二十七圖は、前圖黒⑨の手より變化したもので、⑨は善い手であるが、前圖に比べると、紛れが多いため好ましくないといはねばならぬ。

第二十八圖は、黒⑨の手よりの變化を示したもので、白が「V」に附け、黒が「ろ」に伸びてゐる場合には、⑨の手は非常に面白けれども、さうでない時は、置碁としては好ましくない。しかし、場合によつては、かういふ變化を打つのが面白いともあるから、一應辨へて置く必要もある。

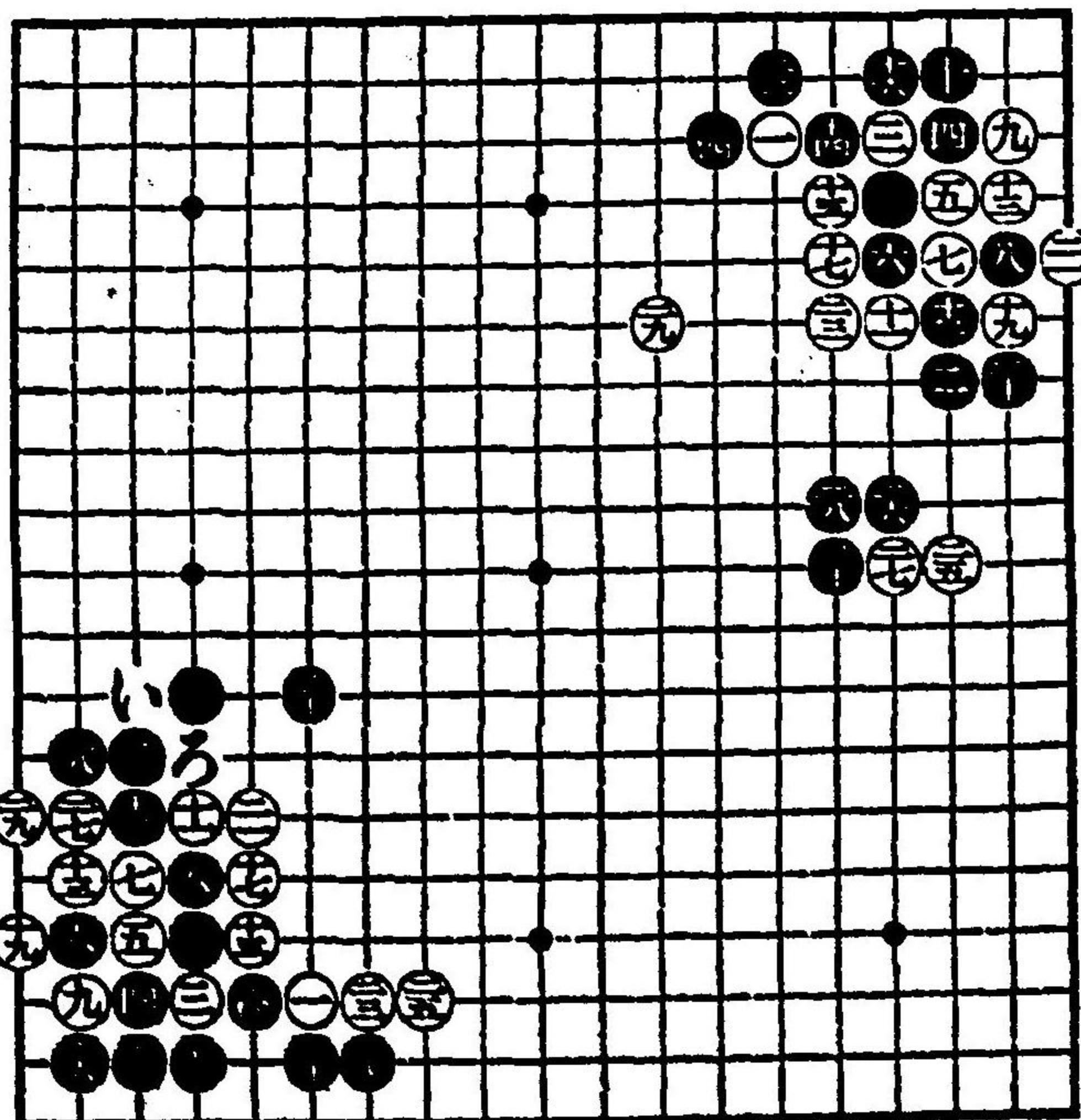
角の石

やうやう

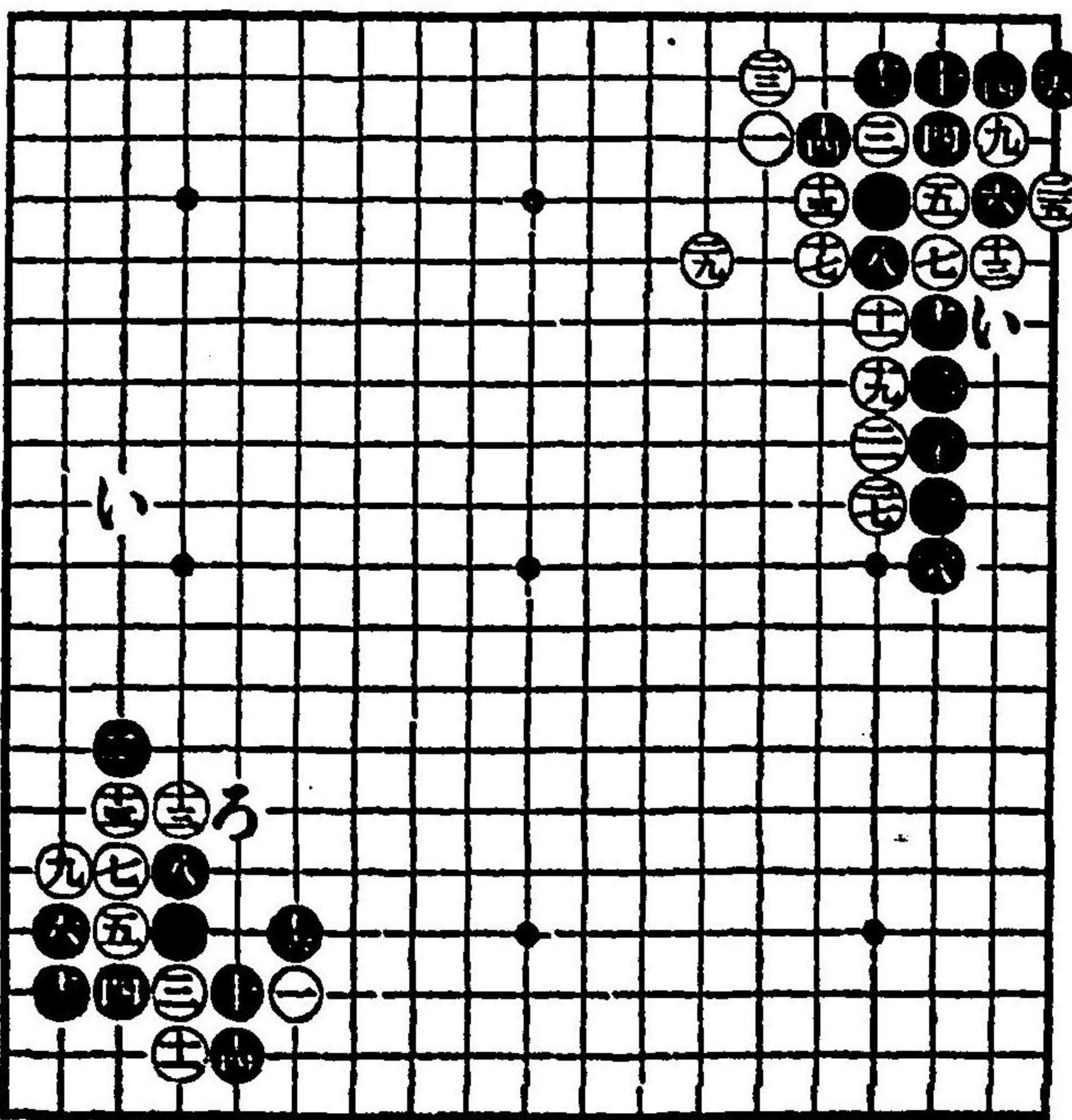
活きて

吸ひつける

(第二十七圖)



(第二十九圖)



(第三十圖)

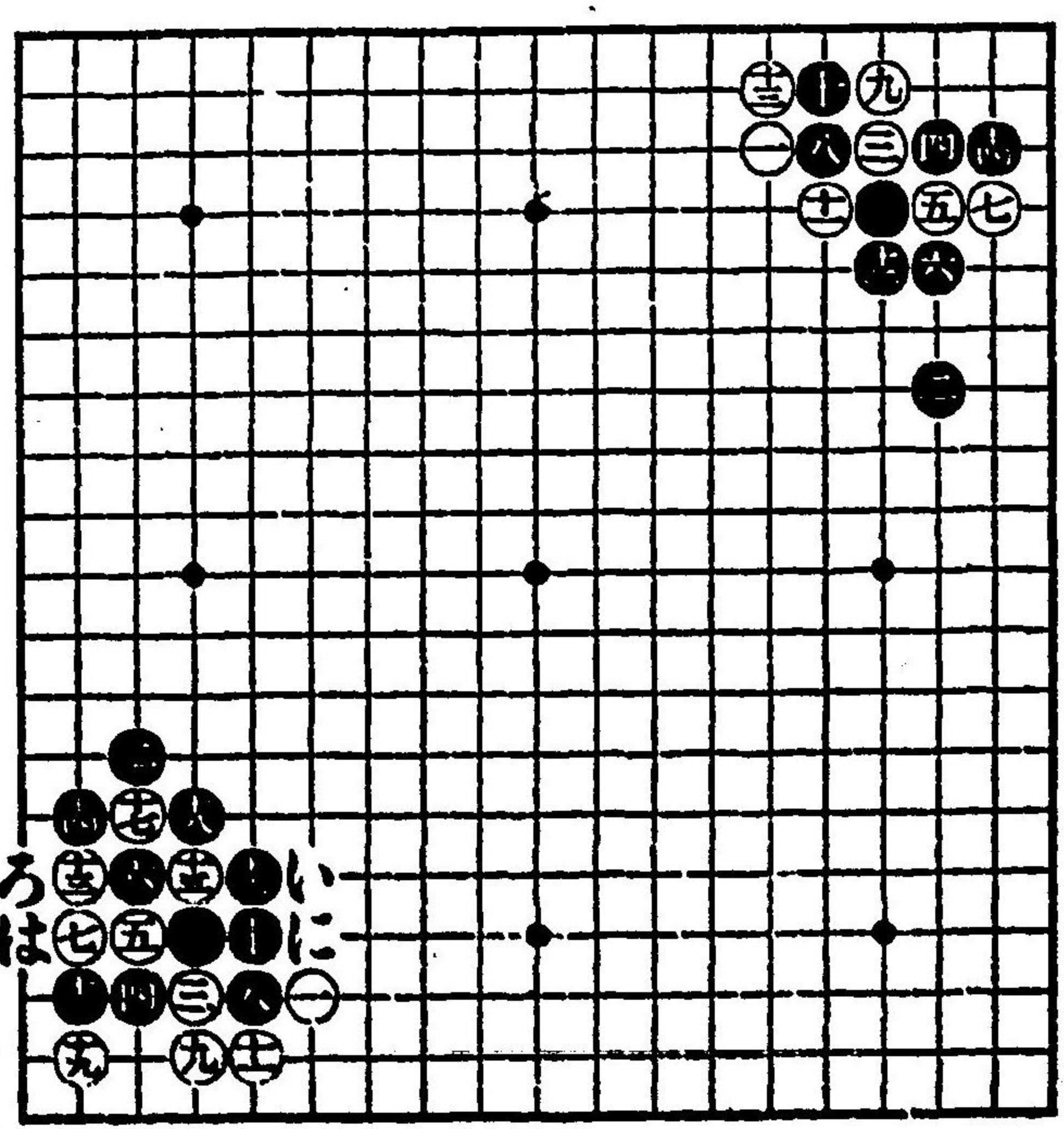
第二十九圖は、前圖白⑨の手より變化したもので、前圖の如く、⑨と⑩の一子を取つて活きたところで、白は面白くないから、圖の如く押したものであるが、⑨と⑩として⑪と下り、隅の白を棄てたのは大に良策である。かく白は隅を棄てたとはいふものの、後に「V」に曲れば劫が残る譯であるから、黒は一向面白くない。さればとて、白が⑫の時⑬の所に跳ねると、⑭の所に切られるから黒は面白くない。
元來黒が⑮と打つのは、少し無理の手であるから、黒の結果の面白くないのは當然で、餘儀ない次第である。
第三十圖は、前圖白⑩の手の變化であるが、この時黒が⑪と跳ね込むのは、頗るよい手である。しかし、大替りとなるのであるから、場合を見計らつて、よくよく考へて打たねばならぬ。
又「V」の邊に白石のない場合には、⑫の手で「ろ」に跳ね捲る手があるけれども、置碁では危険であるから、圖の如く打つのが無事で宜しい。

第三十一圖は、前圖の如く●の筋が面白くないので、變化を試みたのであるが、場合によつては面白いともある。しかし、好んで打つべき手ではない。又初學の中は、とかく○の手で●に繼ぎたがるけれども、それは宜しくない。矢張り、圖の如く打たねばならぬ。

第三十二圖は、前圖黒●の手よりの變化で、この○の手は、前圖の説明にもある通り普通は宜しくないが、某によつて、外部を堅くして、先手を取つて他に打たうといふやうな場合には、必ずしも悪い譯ではない。だから、その打方を一通りお目にかける。

黒●は善い手で、たとひ勢子及び○の三子を四丁に取られない場合でも、●に繼ぐのは悪い。ナゼならば若しこの手で●に繼げば、白に「イ」に掛けられて絞られるからである。尤も白に四丁の當りのない場合には、黒は●の手で「ろ」に跳ね、白●に取れば「は」に渡つて、白を四丁に取る事が出来るけれども、白に●と押されて「に」に出る手のないことがある。その場合には、悪いと思はねばならぬ。また白も、圖の如く打つて面白くない場合には、●の手で「に」に押ししてゐるのがよい。

(第三十一圖)



(第三十二圖)

第三十三圖は、前圖黒●の手よりの變化であるが、これは、黒が中央より上邊にかけて、遠く白を包圍してゐるやうな場合に打つ手で、黒が斯く打つのは、先づ己が地を鞏固にして、白を重くするといふ趣向で、これがたんに白に手のかかる場合には大に宜しい。されば最初に打つべき手でないことは、自ら明かである。

ふるさとは

みしこともあらず

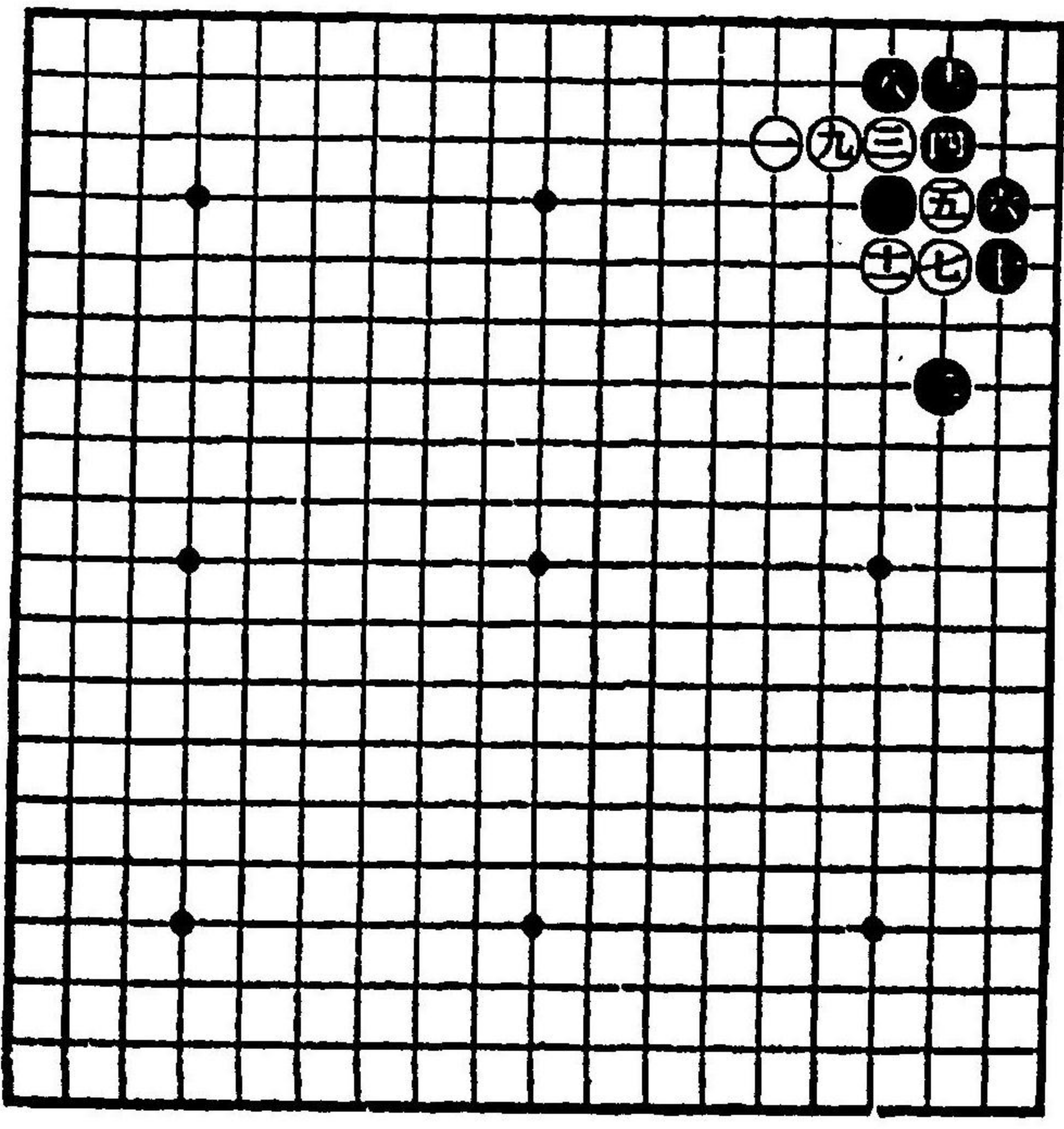
斧の柄の

朽ちしところぞ

こひしかりける

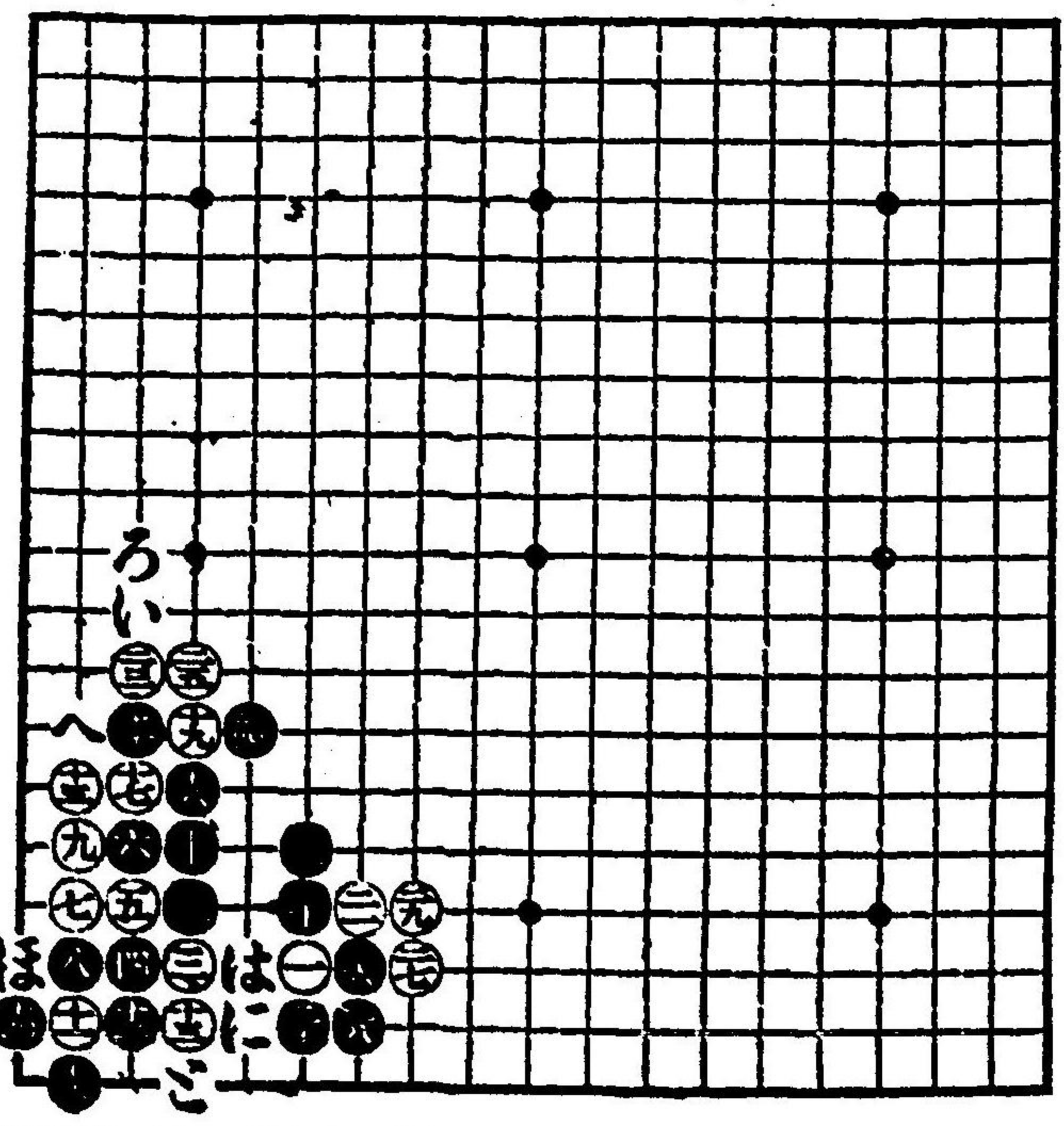
(友則)

(第三十三圖)



第三十四圖は、第三十二圖に於ける黒●の手よりの變化であるが、この 手は「い」の邊に白石の在る場合には、前にも説明した通り、●の所に引くべきは勿論である。黒の●の手は善い手であるが、若し●の所に繼いで、●●●の三子を取らうとすれば、白に先手で「は」に繼がれて、●の所に附けられ、●●の二子を失ふやうな場合には面白くない。白●の手は、先手に●の二子を助けて、●●●の三子を逃げやうとする策で、面白い手である。黒●の手は、この場合には善いけれども、若し「い」の邊に白石のある時は、この手で「は」に打ち、白●に伸びれば「に」に下り、白●に繼げば●の所に跳ねてゐるがよい。總て「は」に「に」のやうになつて、●の所に跳ねるやうな形になれば、隅に多少の損失があつても、釣合上悪くないものである。特に、「い」の邊に白石のある場合には、一層善いものと覺えて置くがよい。

黒●は、この場合他に手のない所で、若し●の方から打てば、白に●の所に伸びられ、黒が「除」に打てば、白は●に伸び、黒が「へ」に抑ふれば白は「と」に下つて、隅の黒を取られて仕舞ふから、注意すべき所である。若し又白が●の手で●の所に伸びれば、黒は直に●の所に抑へる手があるから、黒に●と跳ねられた時は、白は●の如く打つより外に道がない。又白が●の手、或は●の手で、



(第三十四圖)

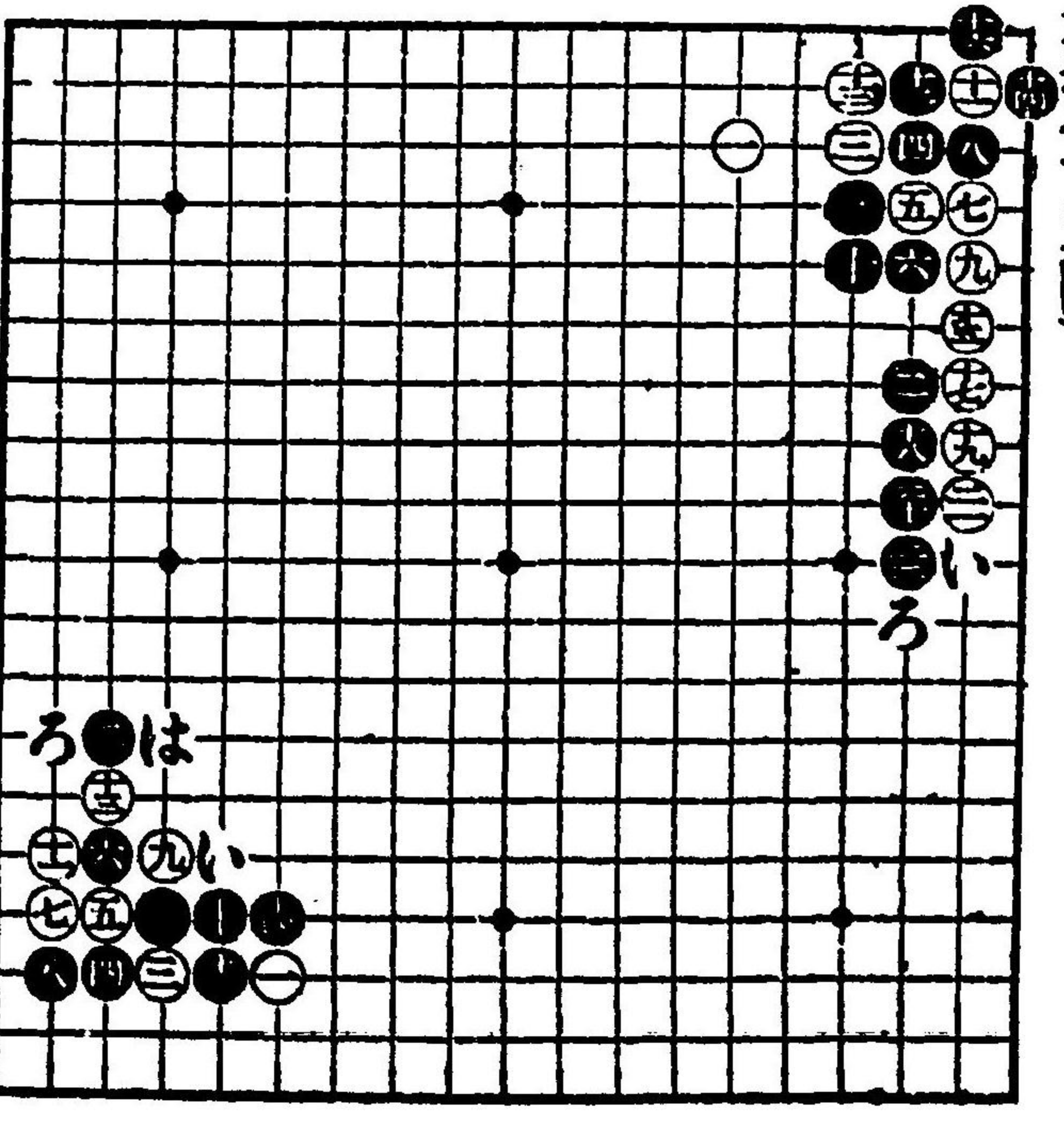
●の所に附けて來れば、黒は「へ」に出る前に●の所に附けて置かねと、●●●の三子を取つても、外面を遠ら

れて割合が悪くなるから、これ亦注意すべきことである。しかし、●の如くなれば、黒は決して悪くはない。

第三十五圖は、前圖白●の手よりの變化で、白は前圖のやうに打つて面白くないといふので、●と出たのであるが、斯る場合には●の如く●はして抑へないのがよい。若し白が「い」に伸びたならば、黒も尙「ろ」に伸びる覺悟でなければならぬ。●の如き結果となれば白は一層悪い譯である。

第三十六圖は、前圖白●の手よりの變化であるが、白が●の手で●の所に繼げば、黒は●の所に下つて二子を取るのである。若し又●に下つて●合の悪い時は、「い」に打つてよい。さすれば、恰度第三十二圖と同一になるから、よくよく心得ておいて、場合を見て定めるがよい。又黒が●の手で●に繼げば、前にも述べた通り、白に●の所に繼がれて面白くないから、この場合となつては、●と振替るより手はない。

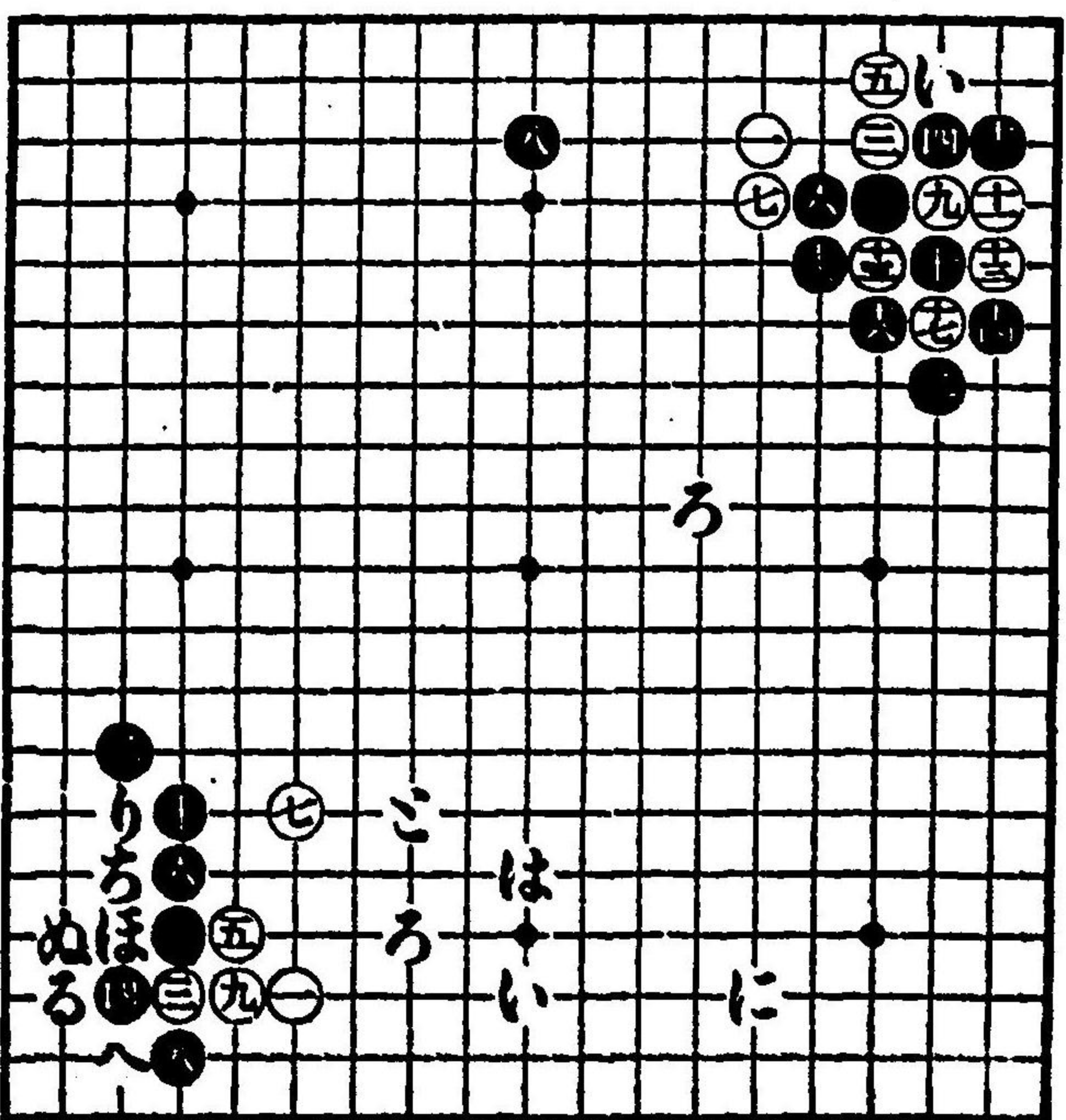
黒●は大に善い手で、斯る所は、後では打てないし、又間に合はない所である。若し白が他に轉じたならば、黒は「ろ」に下つて白をイヂメるのである。けれども、白が「ろ」に「は」の何れかに用心したならば、黒は他に轉すべきもので、この振替りの結果は、黒の方が稍宜しい譯である。



(第三十六圖)

第三十七圖は、白(四)の手よりの變化であるが、白が前圖のやうに(四)と切らずに、圖の如く下つた時は、黒は必ず(一)と出ること忘れてはならぬ。黒(一)の手は、この方面に白があれば、他に打つてもよし、半過ぎならば、白の有無に係らず、「(一)」に抑へてゐても宜しい。しかし、碁といふものは、中中そんな緩い手を打つてゐる暇のないものだから、(一)の方面に白のない時は、かく打つのが激しくて宜しい。かく打てば、白は他に打てないことになる。白が(二)と切る手は、「(三)」の見當に白石があつて、四丁に取られない場合に限る手であるが、その時黒は先づ當て、(四)と抑へつけるのが大に善い手で、白は勢ひ(五)とと切らねばならぬことになるが、さすれば黒は(六)と打つて、隅の二子を棄てて先手を取るのである。圖の如くなつては、黒は磐石となるから、大勢随つて黒に歸する道理で、活潑の善い手である。

第三十八圖は、前圖白(五)の手よりの變化であるが、白が斯く(三)と附け(四)と跳ねるのは、無筋であつて、平生は好まぬ手である。しかし、「(五)」に黒石があり、「(六)」に白石のあるやうな場合には、この隅に損をして、「(七)」の石を攻めるといふ態度で、恐嚇手に打つことがある。その時黒が(八)と伸びるのは善い手で、初學の中は、とかく(九)の手で「(六)」に継ぎたがるが、それは宜しくない。



(第三十七圖)

(第三十八圖)

なぜならば、一旦「(六)」に継いだ後、黒が若し(七)の所に跳ねなければならぬやうな場合が起つたとすれば、白は(八)と継がずに(九)の一子を黒に與へる。さて(三)の一子を取つて見たまへ、「(六)」に継いだ手は、全くムダ手になつてゐることを發見するであらう。だから、斯る場合には、(一)の手で(二)に跳ねるか、圖の如く伸びるか(三)より打つ手はないと思はねばならぬ。

白(七)は、普通(八)の所に下る手であるが、劫に敗けない場合には、「(八)」に跳ねることもある。然るに、損をして(九)と打ち(九)と継いだのは、大概黒が「(一)」の石を「(二)」に飛出すことを見越したからである。けれども、黒はこの場合(三)と打つのが大に善い手で、かういふ手は、習はねば分らぬ手だから、忘れてはならぬ。かく(四)と打つたところで、「(五)」の石は危険に見えても、決して死ぬやうな石ではない。又場合によつては取られたところで、隅に得をしてゐるから大したことはない。

然るに、若し(一)と打たずに「(二)」に飛出したとすれば、白は直に(三)の所に附けて来る。その時、黒が「(四)」に曲ればまだしもよいが、大概「(五)」に抑へるのが普通である。さて黒が「(六)」に抑へたとすれば、白に「(七)」に切られるから、黒は大分悪いことになる。特に「(八)」に切られた時、「(九)」に掛れば損ながらまだよいが、「(一)」に切られるやうな碁では、大概「(二)」に伸びるものである。さうすると、又白に「(三)」に切られることになつて、いづれにしても、黒の大損に歸して仕舞ふ。これ(四)の手が、前後の關係上、沈着な善い手である所以である。

他義法度かたく守らばその外も

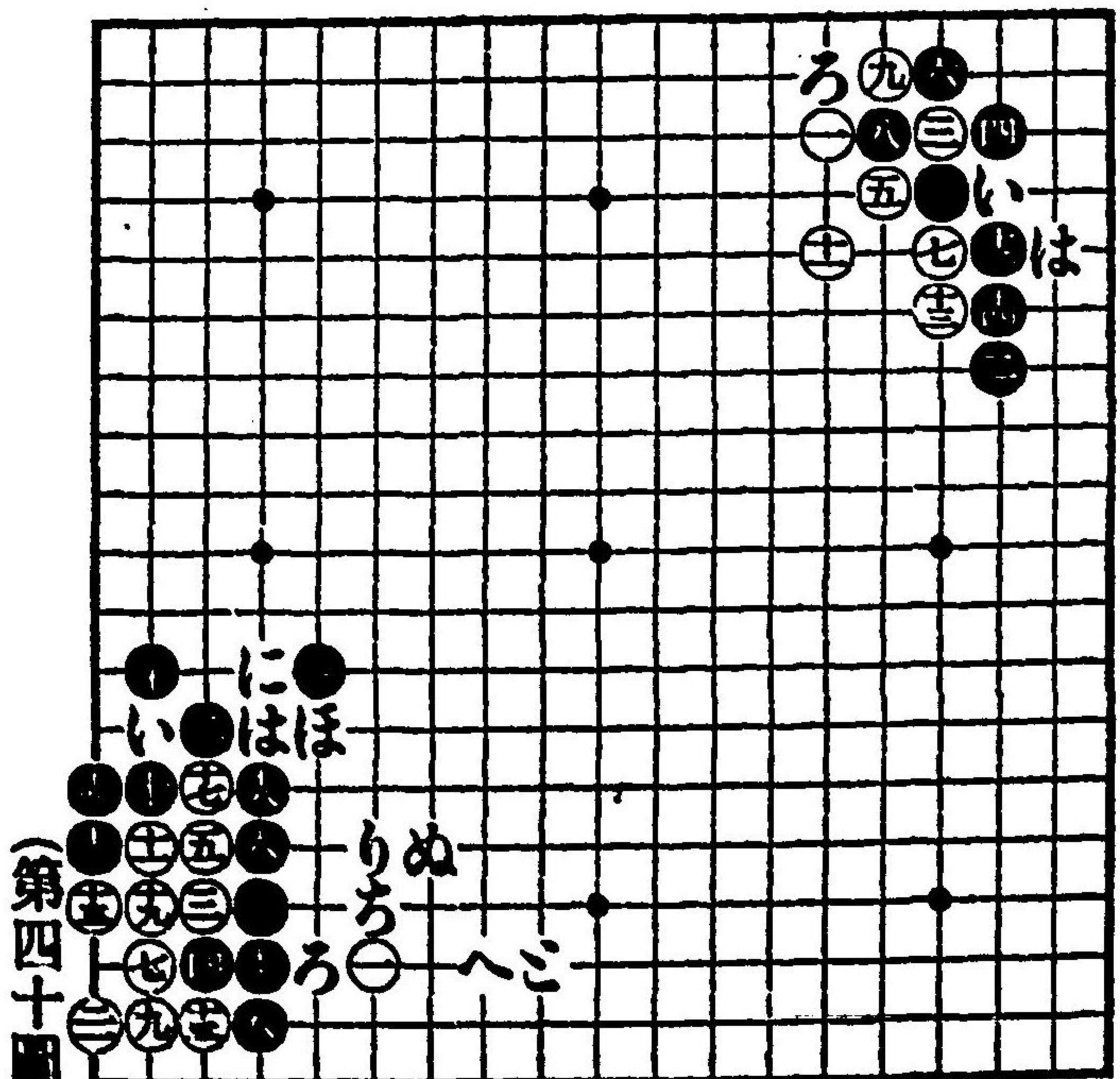
かんにんするは道のみちなり

(碁の訓)

第三十九圖は、前圖の場合に黒が●の手を變化したのであるが、この變化も亦、黒は決して悪くはない。若し白が⊕の手で●の所に繼げば、黒は●の手で「い」に繼ぐのである。●の手で「い」に繼ぐのは、前圖の説明と反するやうであるが、●と●の所に繼ぐ手と交換した後であるから、前圖の場合とは違ふのである。しかし、それでは白が餘り悪過ぎるから、圖の如く⊕と跳ねたのであるが、矢張り黒は十分で白は悪いのである。又若し白が⊕の手で「い」に打つて来たとしても、黒は矢張り●と●の所に繼いでゐるのである。それでも白は、⊕と掛繼ぐくらのものであるから、黒は●に切つてもよし、「ろ」に跳ねてもよい。

第四十圖は、白が⊕と●の所に附けても面白くないといふので、圖の如く變化を試みたのである。この場合に、黒が無事を望むならば、●の手で●の所に引いて居ればよいのであるが、しかし、圖の如く⊕と抑へるのが第一の得手である。なぜならば、黒は「三ノ三」の大場を占領したからである。そこで、白が⊕の手で●の所に切つて来たならば、黒は第十九圖乃至第三十九圖の中、場合に適した挨拶をするのがよい。しかし、白が圖の如く伸びた場合には、●と抑へるのが宜しい。黒●は大に善い手であるから、忘れてはならぬ。白が⊕の手で●に伸びたな

(第三十九圖) ●●ノ所ツク



(第四十圖)

らば、黒は●に抑へ、白が「い」に跳ねれば、黒は●の所に抑へて十分である。その時●の手が●の所に在るのに比べると、大に相違のあるとが分るであらう。特に●の白があるから、若し白が「ろ」に覗いて来たとしても、効能がないから、尙更宜しい。それゆゑ白は、巴むを得ず●と伸びたのである。黒●も亦大に善い手である。普通は●の所に打つのであつて、●の處に打つても悪い譯ではないが、圖の如く打つのに比べると、大に違ひがある。この●の手は、「誘ひの手」と言つて、白にあらゆる悪手を打たせて、然る後に活かすといふのが妙手で、すべて碁は、敵に悪手を打たせる時は、自然に自分の方がよくなるものである。若し白が●の手で「は」に切れば、黒は「い」に跳ね、白「ほ」の時●に打つて、無造作に白を殺すことが出来る。だから、白は巴むを得ず活きたのである。黒●は形といふもので、この結果は黒十分である。併し場合により●の手で「ろ」若くは「と」に夾み、白「は」に切れば「い」に跳ねて、先手を取つて「ち」に附けるもよし、又黒「と」の時白「り」若くは「ぬ」に飛んで、その拍子に●に打つとなれば、一層働きがあつて宜しい。

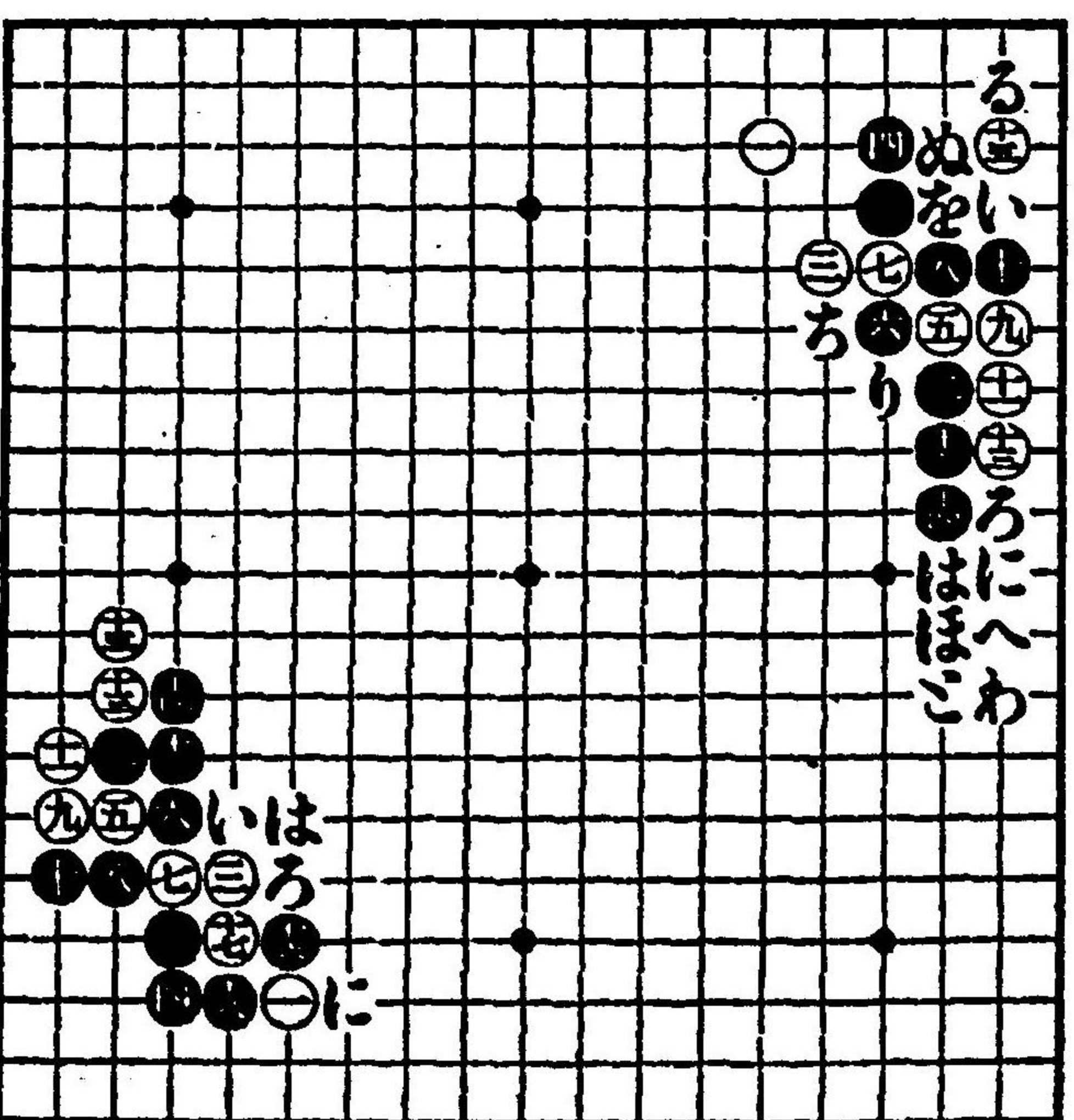
蓋布置碁之先務如兵之陣而待敵也。意在疎密得中。形勢不
屈、遠近足以相援、先後可以相符。若入地境、或於六三三六下
子、及九三與十三之著。斯不執一進退合宜。訣曰、遠不可太疎、
疎則易斷。近不可太促、促則勢羸。用意在人。此乃爲格。

(定石通解の一事)

第四十五圖は、前圖白⑤の手よりの變化であるが、若し黒が⑥の手で「ろ」に打てば白は「ろ」に伸び黒は「の」の時「に」に伸び、黒は「の」の時「へ」に伸び、黒と「白」むとなつた時、黒は尙隅に一手を要することになる。其の本來よりいへば、白に匂はしてあるから善い譯であるが、隅に加へる一手の位置も中中むづかしく、自然ゴタついて來るから、置碁としては矢張り面白くない。

第四十六圖は、前二圖の黒⑤の手よりの變化であるが、この⑤の手は最も善い手であつて、圖の如く⑥と附越す手順となり、⑦となれば、如何に變化しても、⑧の二子を棄てないやうに打てば、黒の方が善いことになる。それゆゑ白は、⑨の手で⑩に切る外はないが、さすれば黒は「ろ」に出で、白⑪の時「ろ」に跳ね、白⑫に打てば、「は」に繼いで、⑬に附ける手と、⑭の所に出る手と、兩腕みの形となるから、無論白の方が善い。若し又黒「ろ」

の時、白が⑮と打たずに⑯に二子を取れば、黒も亦⑯の所に二子を取るまでのもので、その結果は矢張り黒の方が



(第四十五圖)

が宜しい。

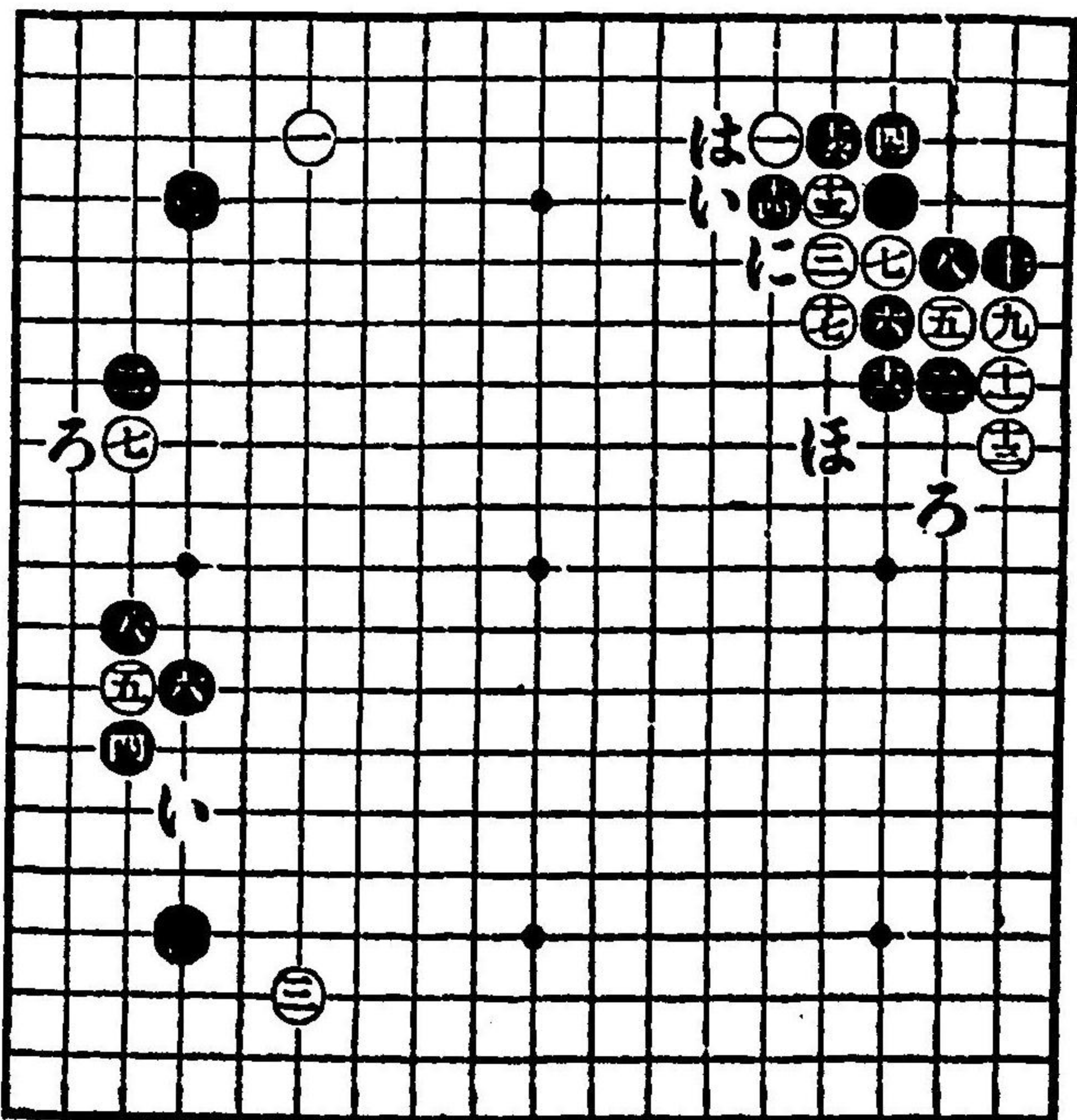
第四十七圖は、白⑥の手よりの變化で、白は前圖のやうになつては思はしくないから、圖の如く伸びたのであるが、この時黒が⑦と附越し、⑧と切つたのは善い手で、白が⑨の時、黒は「い」に伸びる手と、「ろ」に掛ける手とあるが、又⑩⑪⑫の三子を棄てるつもりならば、「は」に二子を抱へて打つのもよい。則ち、白が三子を取らうとするには、先づ「に」に當て、黒が「ろ」に繼いだ時「ほ」に掛けるのであるが、その取り工合が如何にもマズイから、これ亦黒の方が優つてゐる譯である。

第四十八圖は、⑬⑭の白の掛りに對し、黒が⑮⑯と二者とも大桂馬に受けたのであるが、これは、古い定石であつて、今は同形を嫌つて、⑰の手を「い」は打つことになつてゐる。しかし、「大桂馬繰り」の部に屬するから、參考までに示すのである。

そこで、白が⑮と附け又⑯と附けるのは、この間をゴタツカせて黒を凝らし、軽く捌かうといふ手段で、昔の定石には、⑰の手で「ろ」に跳ねて、いろいろと變化を打つてあるが、要するに、これは白の手段に填つたもので面白くない。圖の如く⑱の二子を取切つて打てば、黒の方が大に宜しい。斯る場合に、兩方善く打たうといふことは到底出來ないことであるから、先づ一方を片附けるのがよい。白に⑳と附けられたと思へばこそ、いろいろと

應じたくなるのだが、今黒より㉑と附けたとすれば、善くはないけれども、㉒の手が非常に善い手だから、㉑の

(第四十七圖)

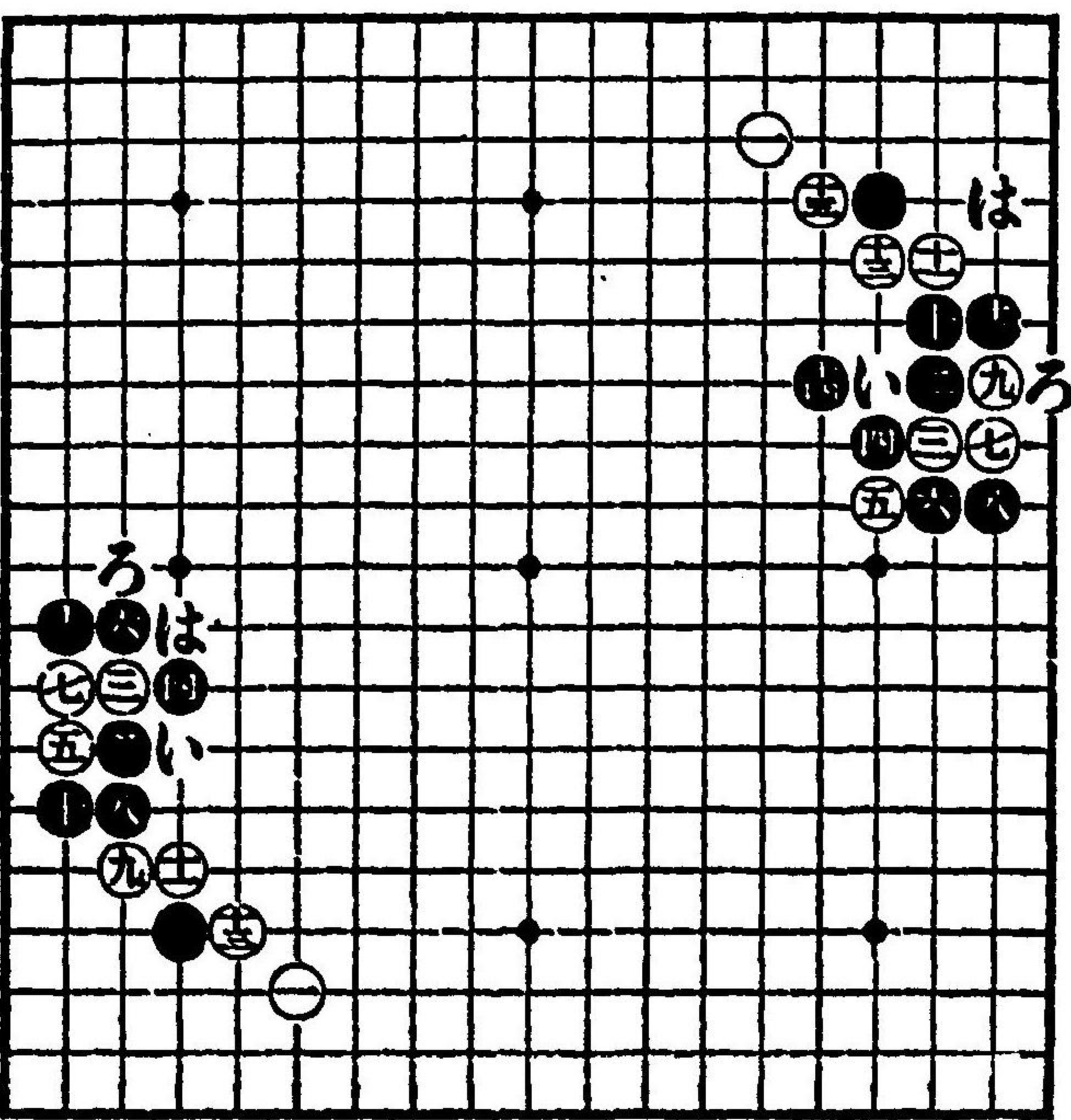


(第四十八圖)

手が少しくらゐ悪いとしても、結果は黒の方が優つてゐる道理になる。

第四十九圖は、前圖と違つて、一方から白が③と掛つた場合であるが、然る時は④と上から跳ねるのが大に善い手で、初學の中は、とかく「い」に伸びたがるけれども、これは少々緩い手である。又或は、下から⑦の所に跳ねるの見受けるが、それも宜しくない。ナゼならば、白に⑧の所に切られると、勢ひ⑨の所に一子を抱へることになり、白に「い」に跳ねられると、⑩の所に繼がねばならず、⑪の所に抑へられると、「ろ」に一子を取らねばならぬことになつて、手割において非常に損をすることになるからである。今これを解剖して見ると、最初白が③の手で「い」に附けたのに、黒が④と引いたのはまだ却すべしとするも、次に白が⑤と跳ねた時、黒は當然⑥と切るべき筈であるのに、⑦と跳ねたのは餘程緩い。然るに白が又亂暴にも⑧と抑へたから、黒は⑨と切らねばならぬのに、「ろ」に掛繼いだ譯で、某にはない程の手である。黒が「ろ」に掛繼いだのに、白が⑩と飛込んでくれたのはありがたいが、自分の地内であつて見れば、大したこともない。則ちこの「ろ」に掛繼ぐのは、恰度⑪の所にキチンと繼いだのも同様の譯である。かく解剖して來たならば、如何に黒が損をしてゐるかが分るであらう。

又黒が⑫の手で⑬の所に跳ね、白に⑭の所に切られた時、⑮に切らずに⑯に伸びたとすれば、白は⑰の所に附ける



(第四十九圖)

(第五十圖)

のが手筋で、大に宜しい。

又白の⑮の手は、⑯の所に伸びるのが當然であるけれども、黒に「い」に繼がれると、重くなつて困るから、軽く跳ねたのであるが、この時黒⑮の手は善い手で、斯る場合には、隅に構はず、⑰の一子を取るのが一番宜しい。白⑱は、止むを得ず打つた手であるが、⑲と⑳となつた時、黒が㉑と掛繼ぐのは大に善い手で、かういふ所は、この際打つて置かぬと、後に締められたり、いろいろと變化が起るものであるから、必ず打つて置くべきもので、恰度四丁を打抜いて置くと同じ道理である。

かくて、後に黒から「は」に飛込むことになれば、白は地なしになる譯で、則ち本圖は、黒の方が大に優つてゐる。第五十圖は、白が前圖のやうになつては面白くないので、㉒と跳ねて變化を試みたのであるが、黒は㉓の手で「い」に繼ぐのも本手で善いけれども、圖の如く打つのも亦悪くはない。白㉔の手は、矢張り止むを得ず打つたものであるが、若し白がこの手で「ろ」に打てば黒は㉕に伸びるものと心得て置くがよい。又黒は、㉖の手で㉗の所に抑へ、白が「は」に切れば㉘の所に曲つてゐても善いが、これを前圖に比べると、白は幾分か優つてゐる。

わが藝をみがかんことを打忘れ

人の曇りをいふぞをかしき

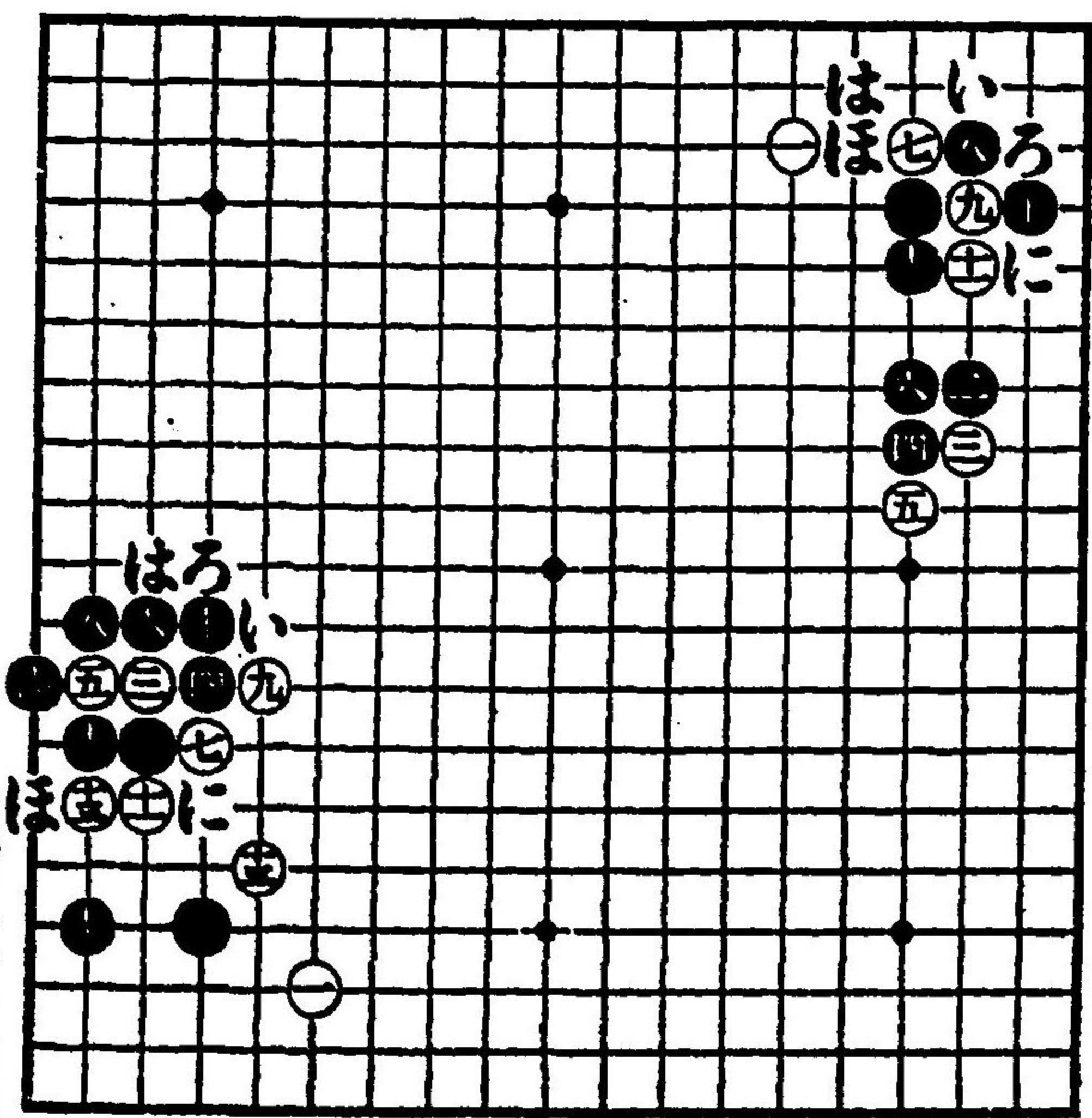
(碁の訓)

第五十一圖における白の(九)の手は、黒を棄らせる手段で、この時黒が(一)の手で(二)に伸びれば、白は「ろ」に跳ね、黒が「ろ」に伸びれば、白は「は」に掛懸ぐから、いはゆる白の手段に乗つたもので面白くない。それゆゑ、黒は(三)と圖の如く打つのが、働きのある手である。その時白が「ろ」に切つて来れば、黒は「ろ」に伸び、白が「は」に曲れば、黒は「ほ」に二子を抱へて十分である。

第五十二圖は、白(四)の手よりの變化であるが、この(四)の手は、黒の迷ひ易い手であるから、白としては面白い。この時黒は(五)の手で、(六)に繼いでも悪くはない。則ち白が(一)の所に跳ねて来れば、黒は「ろ」に跳ね返し、白を「ろ」に伸ばして打つのである。併し(四)の如く(五)と跳ね、白が(六)に曲れば「は」に伸びて、飽くまで白を匂はせる趣向に打てば、白は大に困ることになる。それゆゑ白は、(七)と變化したのであるが、かく中途において、(三)の二子を取るのには、非常に碁が打ちよくなるから、黒の方が大に宜しい譯である。

白(四)は善い手であるが、黒の(五)も亦善い手である。初學の中は、(六)の手で「は」に切つて、(七)の一子を取りたがるけれども、非常に悪い。(八)と打つてさへ置けば、白が取りに来たところで、「ほ」に跳ねれば何時でも渡つてあるものと心得るがよい。

(第五十一圖)



(第五十二圖)

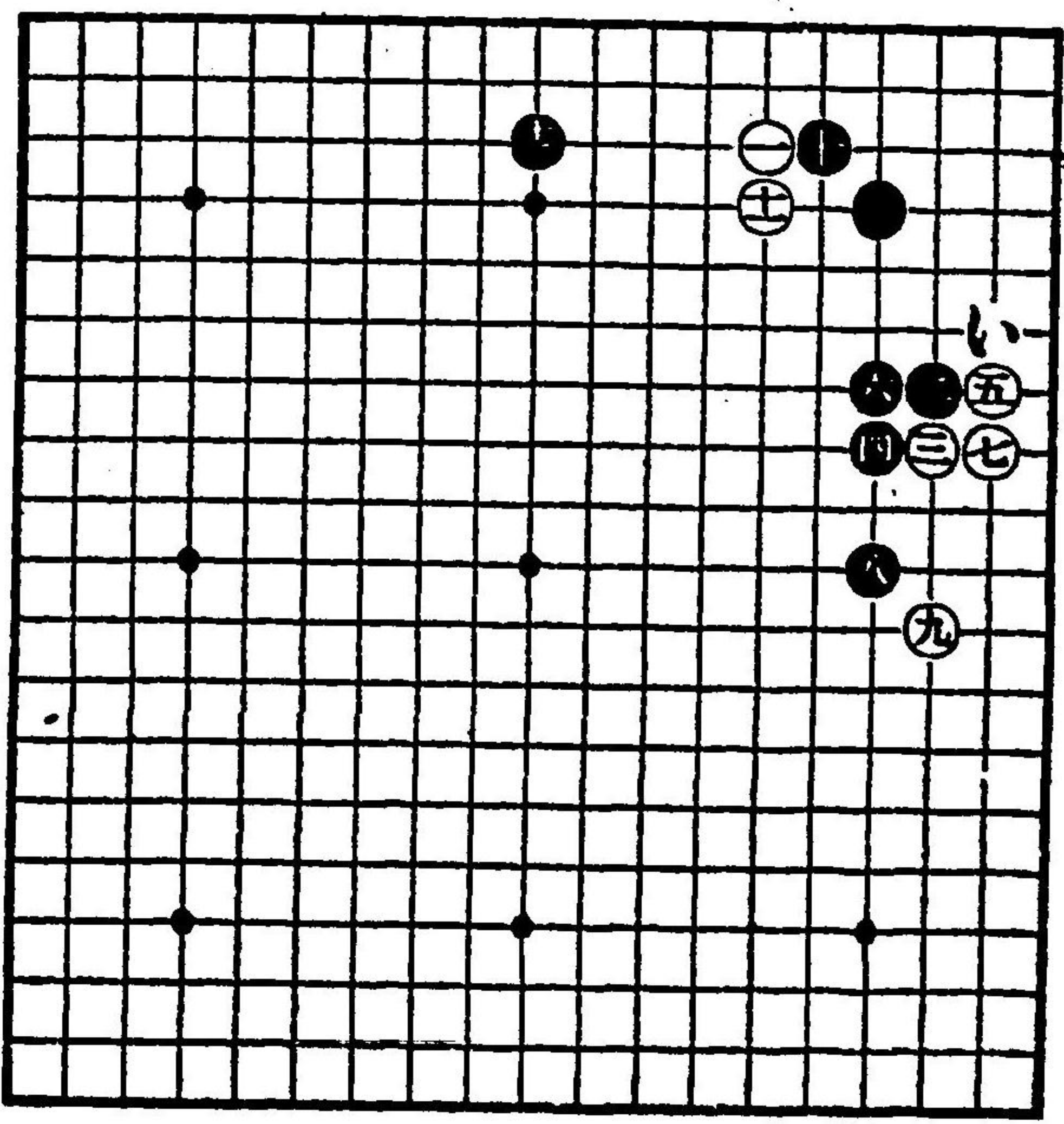
第五十三圖は、前圖に説明した通り、黒が(一)と繼いだ場合であるが、(二)と飛ぶのが又善い手である。とかく「ろ」に抑へたがるけれども、この隅は兩明きといつて、一方を塞いでも一方より侵されて、地にならない所だから、先づ(三)と打つて白に(四)と打たせ、然る後(五)と尖み附け(六)と立たせ、(七)と夾んで白を攻め立て、他に地を取る趣向に打つのが肝要である。初學の中は、一寸打てないけれども、かういふ風に打つのが本手といふもので、碁品が高いといふものである。

ふんどしの

嫌ひなをそこ

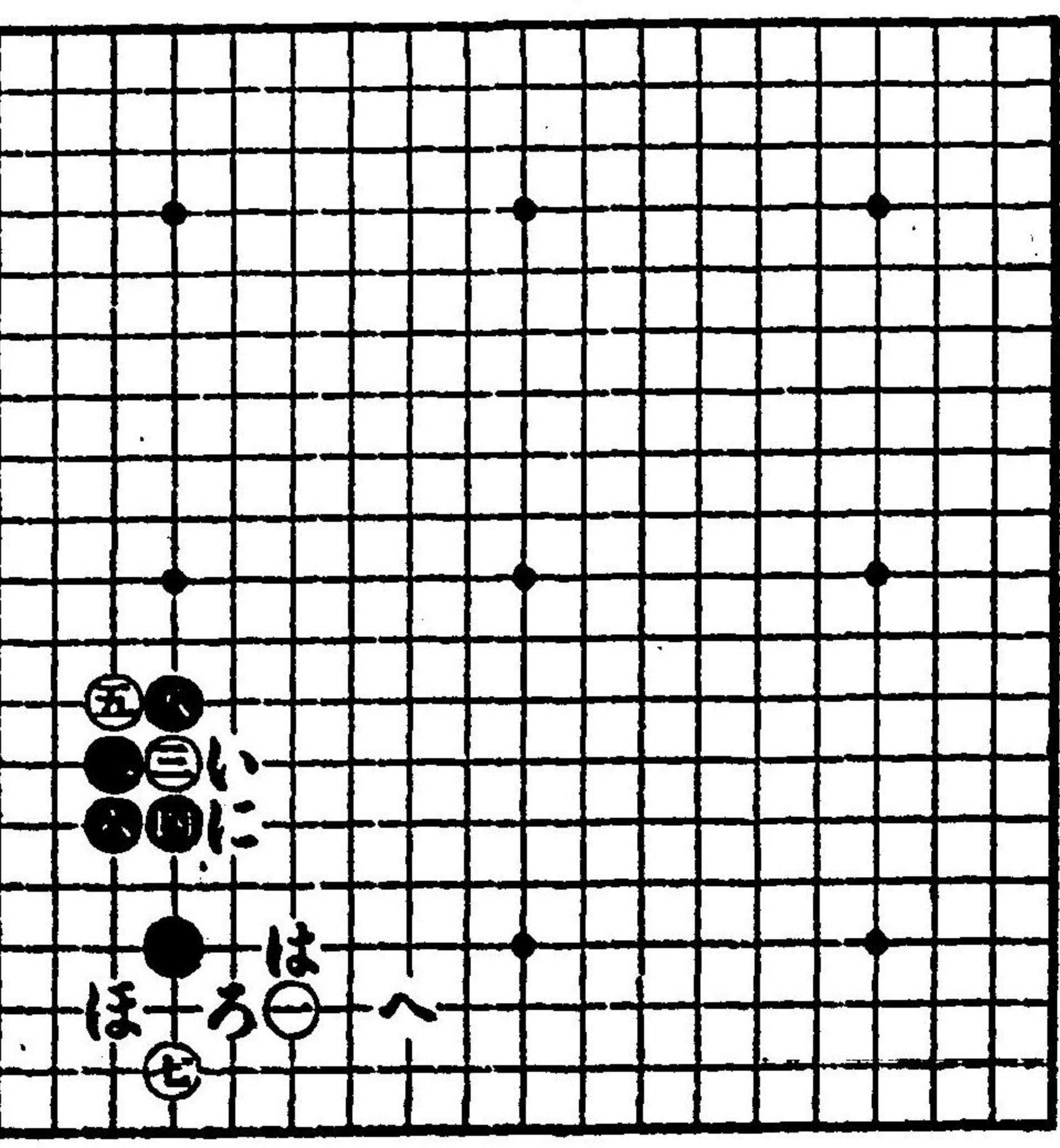
碁はつよし

(第五十三圖)



第五十四圖において、白が③と附けたのは、黒を迷はせるために變化を試みたのであるが、この場合に、黒が④と跳ねるのは普通善い手である。黒は④の手で⑤の所に引くのも、又⑥の所に出るのも善いけれども、⑦の所に引くのは、少しおとなし過ぎる。力さへあれば、⑧の所に出るに越したことはないが、白に手段の餘地があるから、無暗に打つてはならぬ。黒⑨の繼ぎは善い手で、初學の中は、とかく先手であるから「い」に跳ねたがるけれども、斯る所は、大概單に繼ぐべきものである。ナゼならば、黒が⑩と打つた時、白が若し⑪に繼いだとすれば、黒は「ろ」に尖み附け、白「は」の時「に」に出て打つので、「い」には跳ねないからである。

白⑫は、⑬の所に繼ぐのも重くて面白くないから、變化を試みたのであるが、この時黒⑭と切るのは大に宜しい。初學の中は、とかく「ほ」に受けたがるけれども、それは悪い。既に白より⑮と打たれし以上は、隅は小さいからお伴をせずに、圖の如く打つがよい。かくて、後に⑯⑰の白を攻めやうと思ふ場合には、「ほ」に打たずに「へ」に打つて攻むべきものである。

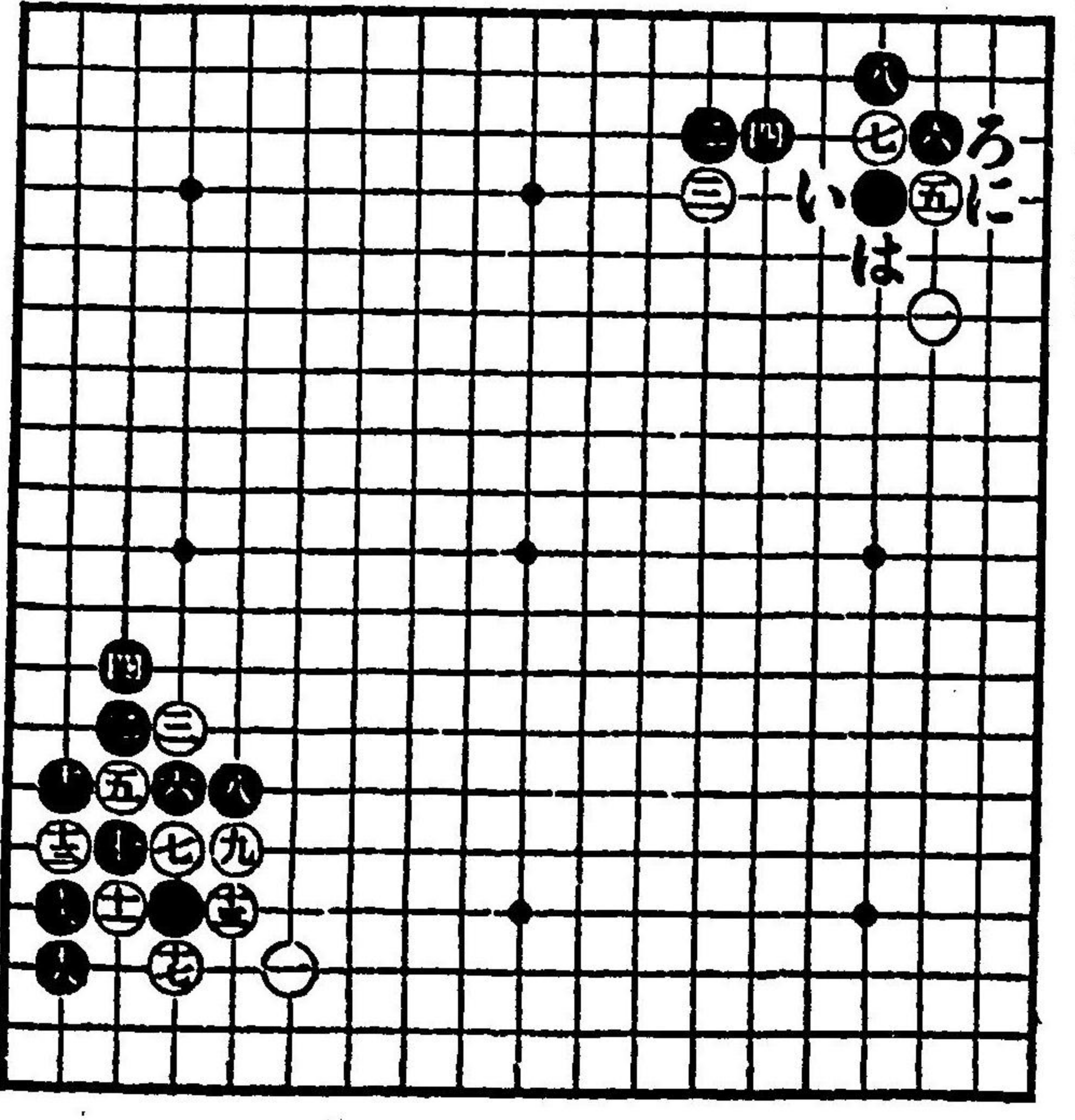


(第五十四圖)

第五十五圖は、黒⑱の手の變化で、黒は白の⑳に對して、おとなしく引いたのであるが、白の㉑の手は、黒が㉒と引いて堅くなつてゐる上に、なほ黒を凝らして、堅い上にも堅くさせて、先手を取つて他に打たうといふ策である。斯る場合には、黒は㉓と打つのが大に善い手である。若し黒が㉔の手で「い」に引けば、白に「ろ」に跳ねられて、普通の定石になるが、⑳と㉑との交換があるから、白の意中に填つたことになる。

又圖の如く㉕と一子を抱へておけば、後に白は、「ろ」に跳ねる手と、「は」に跳ねる手とであつて、いづれに打つかは他の成行によることになるから、白は手を抜いて他を打つことになるが、黒は暇が出来たならば、「に」に跳ねてゐるのが非常に善い手である。

第五十六圖は、第五十一圖に説明した通り、黒が強硬に㉖と出た場合で、白が㉗と跳ねたのは、一儲けしやうといふ手であるが、この時黒が㉘と打つのは大に善い手で、斯る場合には、總て切るのが宜しい。この手で㉙と尖み附けるなどは、位が低い上に味が悪いといはねばならぬ。白㉚の手は、止むを得ず打つたもので、若しこの手で㉛に繼いだり㉜に跳ねたりすれば、黒に㉝の所に抑へつけられて、隅にイヂメ込まれることになる。しかし圖の如くなつては、白に利益がなく、黒の方が大に優つてゐる。



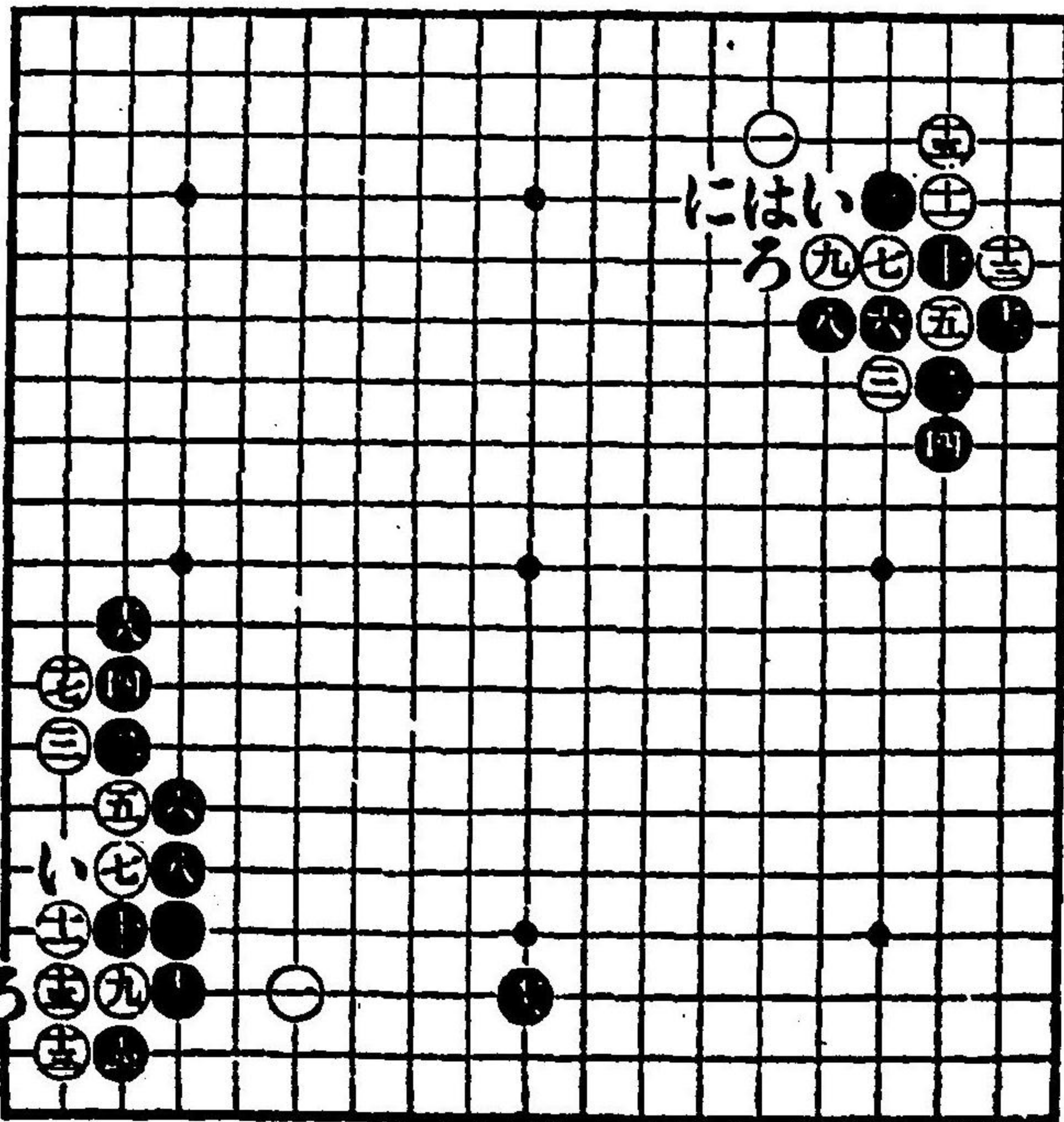
(第五十六圖)

第五十七圖は、前圖白(五)の手よりの變化であるが、白が(六)の如く(七)と伸びるのは、餘程危険である。即ち白(五)の時、黒「イ」に出で、白「ろ」黒「は」白「に」となつて、(七)の石が四丁に取られない場合には、白は(六)と打つ手があるけれども、その時は、黒も(七)の手で「ろ」に跳ねるのが善い。しかし、四丁の當りは滅多にないから、(六)と伸びる手は先づないものと見て宜しい。然るに、白がその無理手を打つたとしても、白は餘り面白くないから、黒は安心して打つが宜しい。

第五十八圖における白(三)の手は、黒を迷はさうといふので變化を試みたのだが、これに對して黒が(四)と伸びたのは、紛れのない善い手である。斯る場合には、(六)の如く出るのが第一で、(五)の所に引くのは餘り好ましくない。白(九)の手は形といふもので、初學の中は、とかくこの手で(六)に打ちたがるけれども、それは筋違ひである。

そこで、黒が若し(七)の手で(六)に切れば、白は(八)に抱へ、黒「イ」に切れば「ろ」に一子を抜取つて、(五)(七)の二子と振替るつもりである。黒は、かく振替つたところで、悪いといふ譯ではないが、白に(六)の一子を取られる形が好ましくないから、矢張り(六)の如く打つ方が宜しい。又(六)に至つては、(七)の所に抑へてゐるのも悪くはないが、そのいづれに打つべきかは、局面の形勢を案じて決するがよい。

(第五十七圖)



(第五十八圖)

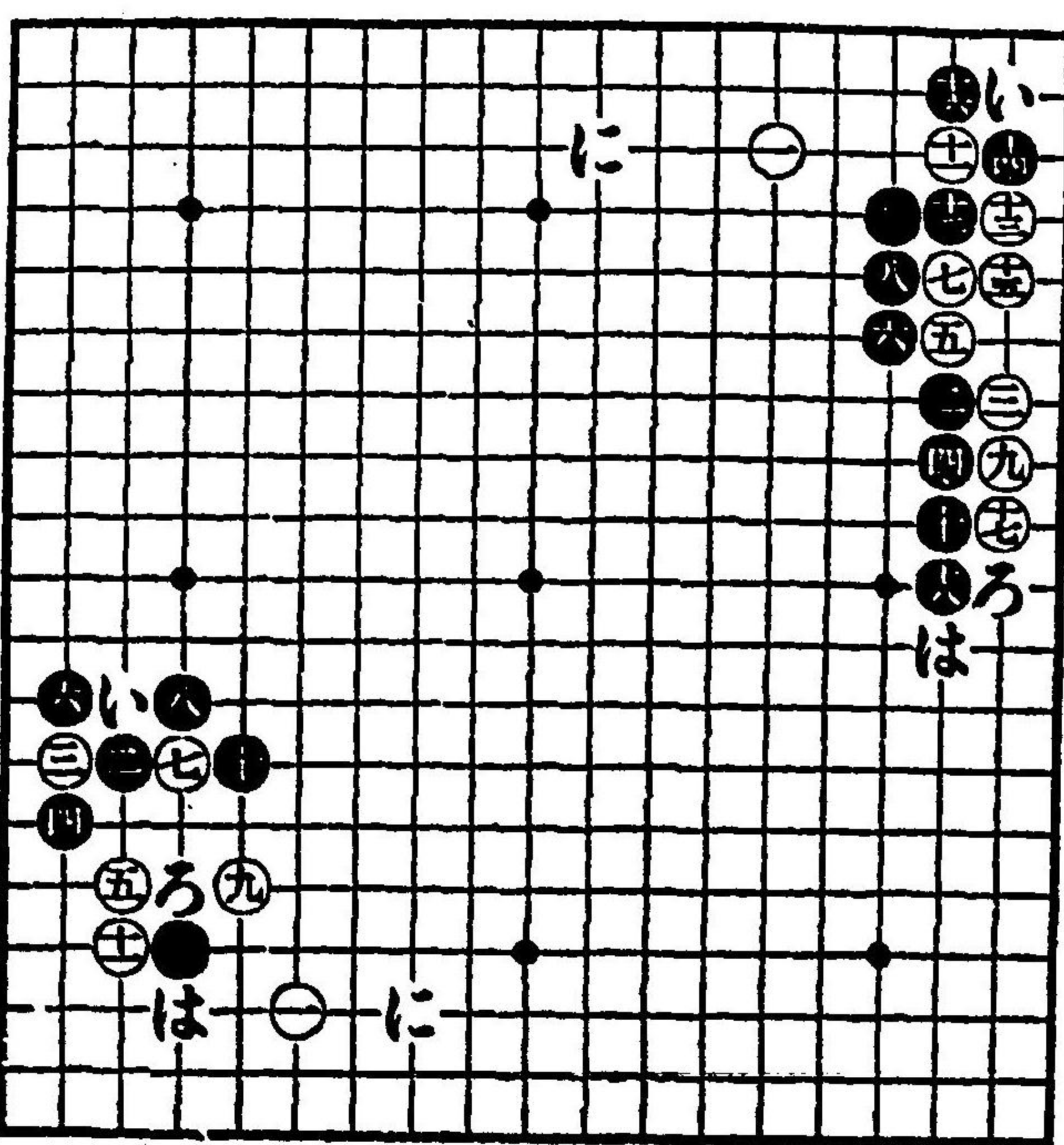
第五十九圖は、前圖白(九)の手よりの變化で、則ち(九)の手で先づ前圖(七)の所に匂ひ、然る後(十)と飛んだのであるが、これは、前圖に比べると、白は重くなつてゐるだけ悪い。白(九)は、(九)と打つてあるだけ資本が多いから、「ろ」に打つて振替りにくいので、止むを得ず繼いだのである。

かくて、白が(九)の手で「ろ」に匂へば、黒は「は」に伸びて外面が厚くなるし、又(十)の一子も、「に」の邊に一手を要するから、白は前圖に比べると劣つてゐる。要するに、(三)と附けた時(四)と出らては、白は面白くない結果になるのである。

第六十圖は、黒が(四)の手を變化して見たのであるが、矢張前圖のやうに「イ」に伸びる方が優つてゐる。圖の如く抑へたため、白に(五)と打たれたので、この(五)の手は、下手を迷はすには至極妙である。しかし、白が(五)の手で「に」に跳ねたならば、黒は(六)の所に伸ばすべきもので、(六)の一子を抱へるのは悪い。けれども、(六)の如く白に(五)と打たれた以上は、(六)と一子を抱へてゐるのが本手である。白(七)は、實は打ちたくない所だけれども、(九)と打ちたいばかりに餘儀なく打つたのである。

さて又、黒は(十)の手で(七)の所に打てば、隅の置石は活きるけれども、その活きる形が面白くないから、(六)の如く打つて棄てるのが宜しい。この置石は、今取られたやうであ

るが、後に「ろ」に出れば、白は「は」に受けるくらゐのものだし、又黒が「に」に打てば、「は」に下る手も出来るのだから、黒は當分棄てたままで、他に轉するがよい。して見る(第五十九圖)



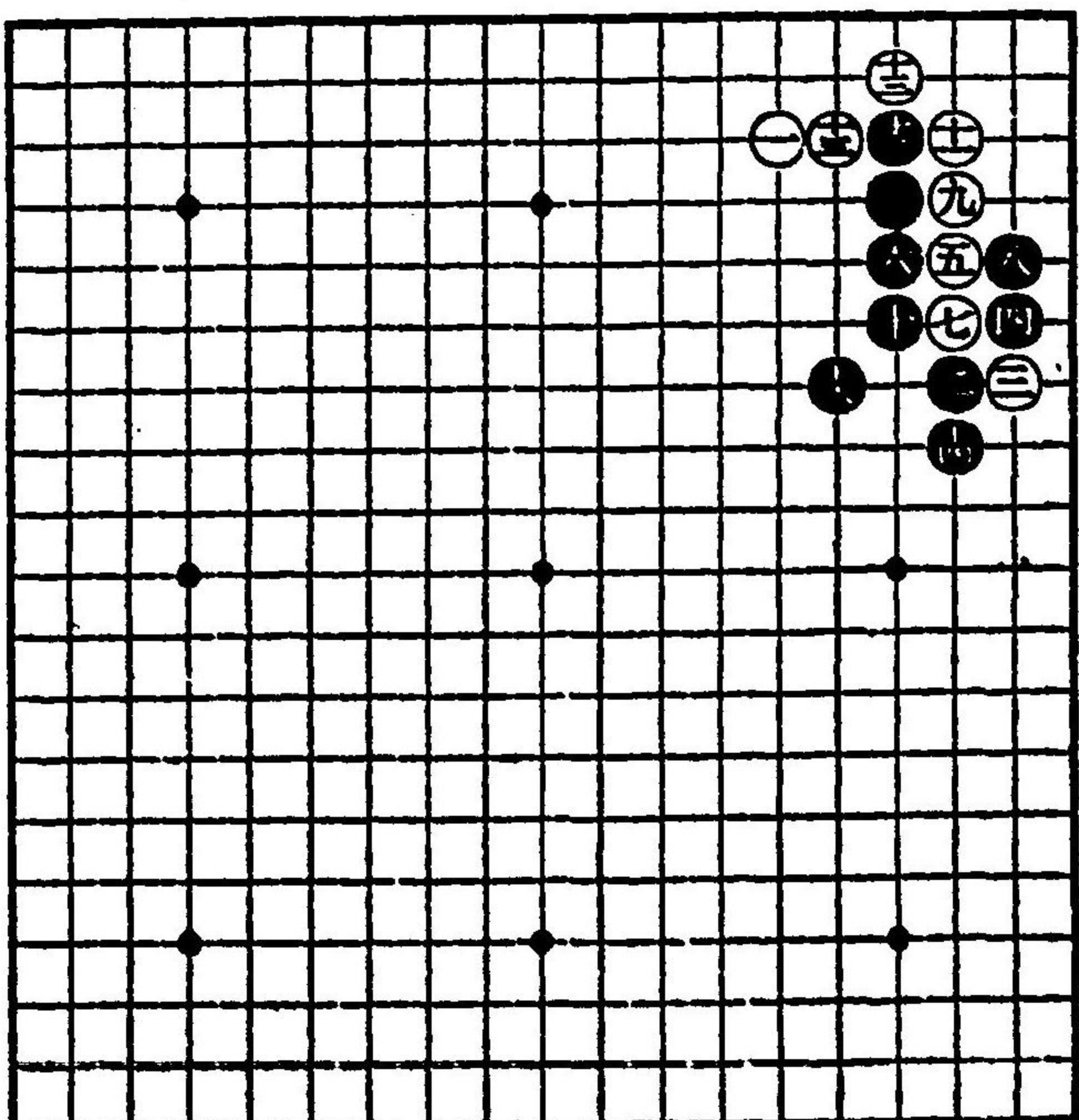
と、隅の置石を棄てるのは、餘り大きくないのみならず、白は(七)等の悪手を打つてゐるから、黒は十分である。(第六十圖)

第六十一圖は、前圖黒●の手の変化であるが、白○の時黒が▲と逆に出るのは善い手で、若し黒が、先きに●の所に締つてゐる時は、このくらの旨い手はない。併し、●の所に締りが無いとしても、決して悪い手ではない。要するに、この振替りは、黒は幾分損ではあるが、厚くなつてゐるから、置碁としては、打易い形である。

燃斷吟鬢瘦盡身。
筆端容易幹千鈞。
碁家苦甚詩家苦。
著著下來皆苦辛。

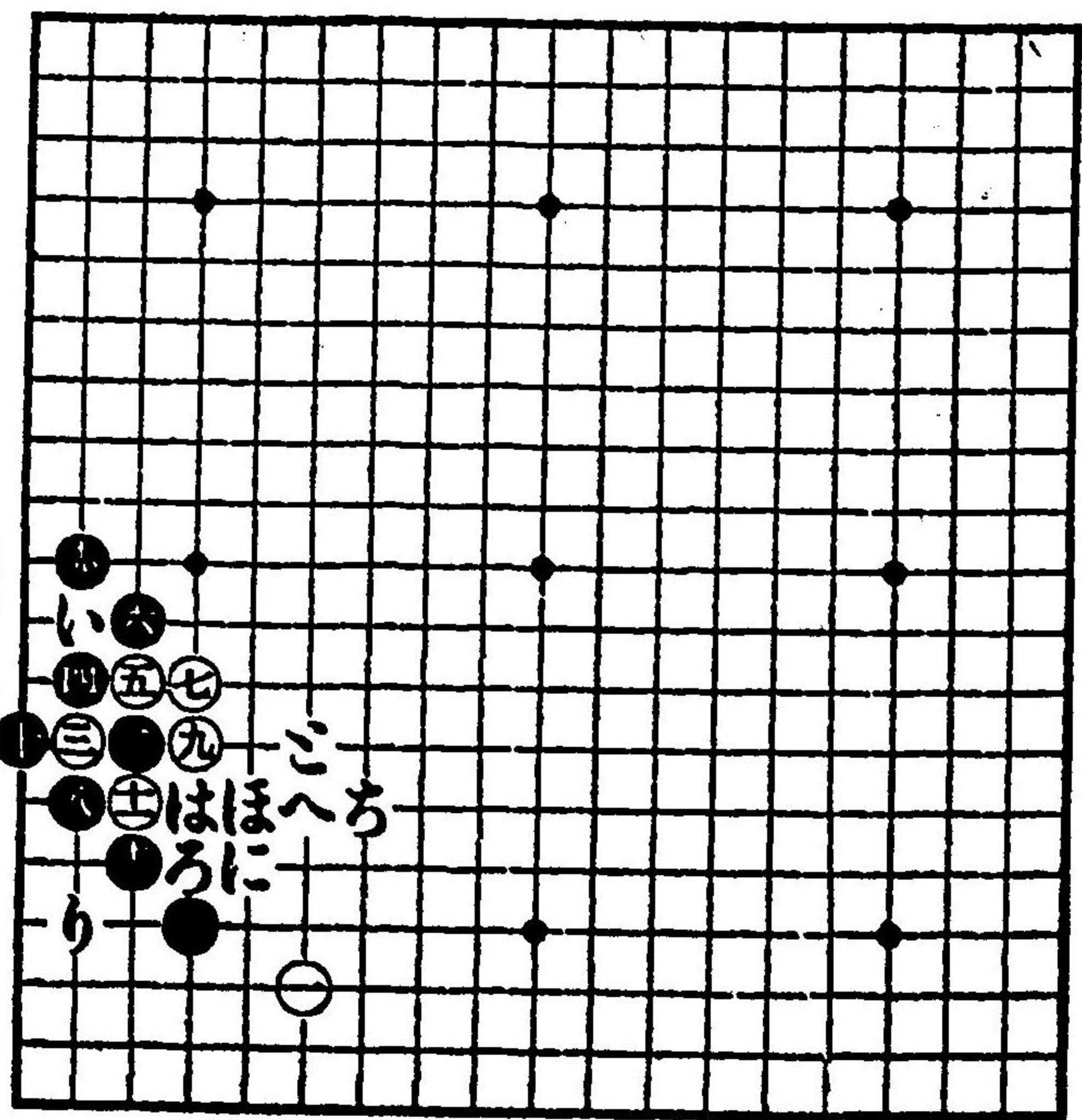
(詩集)

(第六十一圖)



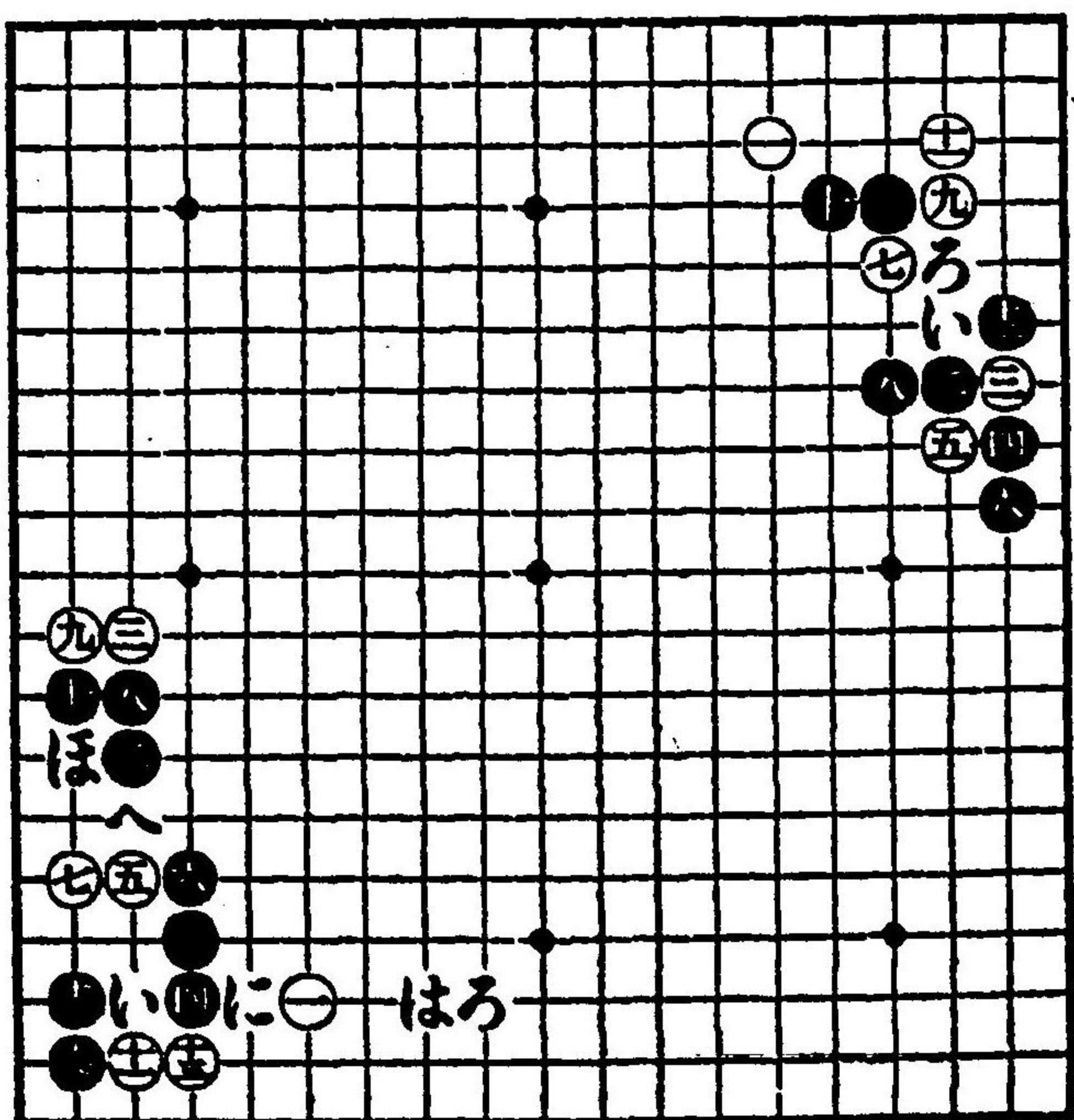
第六十二圖は、黒●の手よりの変化で、黒は●の手で●の所に伸びる方が一番善いけれども、かう打つこともある。この時白は他に良策がないから、●と切つたのであるが、然る時は、黒は●と打つのがよい。若し●と打たずに、●に抱へると、白より●の所に跳ねられて、疑り形となるから宜しくない。又黒●の手は、●の如く白の一子を抜き取る場合と、●に継ぐ場合とがあるから、その場合を心得ねばならぬ。則ち●の手で●に継いでも、白に「△」に切られた時、●の一子を四丁に取られない場合は、●と継ぐのが宜しい。併し本圖は、●の一子を四丁に取られるものとして打つたのである。さて白が●と當てて来ても、黒は●と●の如く打つて少しも差支ない。又若し白が●の手で●に打つて来たならば、黒は●の手で●の所に打ち、白が「ろ」に伸びたならば「は」に出下、白は「は」に伸びれば黒も亦「ほ」に出で、白が「へ」に跳ねたら黒も亦「と」に跳返し、白が「ち」に伸びたならば、黒は手を抜いて他の大場に打つが善い。この変化は、黒少し疑り形ではあるが、後に「り」に飛込む手もあるし、置碁としては打易くなるから宜しい。さりながら、最初●と打つのは、好んで打つ手でないといふことを、くれぐれも心得て置くがよい。

碁譜トム (第六十二圖)



第六十三圖は、前圖①の手よりの變化であるが、この①の手は、當らず障らすといふ善い手である。けれども、後の打方については、大に注意を要する。そこで白②はいはゆる手筋で、餘程旨い手であるから味はねばならぬ。黒は若しこの石に掛りあへば、意外の損を招くから、③と伸びたので、この④は善い手である。若しこの手で⑤又は⑥の所に打てば、白は⑦の所に跳ね、黒が「△」に伸びた時「ろ」に出掛けから、黒は甚だマズイ結果となる。又⑧の手で⑨の所に抱へても、矢張り⑩の所に跳ねられて面白くない。されば、⑪の所に石がないと、黒はどうすることも出来ないから、⑫と伸びて置くのが本手である。黒⑬の手も亦善い手で、白に⑭の二子を引かれると後手になる。總て先手に逃げられる手は、碁ではいつも大きいものである。かく打つても、置石と⑮の二子とはなほ安全であるから、黒は十分といはねばならぬ。

⑯の石に附ける手は、以上で大概盡きたから、これより第六十四圖のやうに、⑰と夾むのに移るが、白にかく夾まれた時、黒が手を抜けば、直に「△」に打込まれて、黒は裸體になつて仕舞ふから、⑱と縮るのである。元來⑲と大桂馬に打つのは、暇があれば⑳に縮らうといふ主意で打つのであるが、さりとて、白が㉑の手で、直に「△」に打込めば、既に説き盡した通り、白は隅で活きることは



(第六十三圖)

(第六十四圖)

活きるが、その代り外の方がいけなくなる。けれども、圖の如く㉓とあつてからに打込まれるのは、夾みうちにせられる道理で、白に隅に活きられた上に、黒は眼がなくつて、逃げねばならぬことになるから面白くない。つまり、㉔と縮るのは、㉕と打つた注意を追ふ道理で、「△」の打込みを防ぐと同時に、㉖の白を薄弱にする手で、則ち一隅を占領するのであるから、非常に大きい手である。それゆゑ、白が㉗と打つて来たならば、黒は直に㉘と縮ることを忘れてはならぬ。これ、置碁の最も肝要とする所である。しかし、「ろ」若くは「△」に白石のある場合に㉙と縮るのは、守る一方で敵に響かぬから面白くない。斯る場合には、㉚の手で「△」に尖み附けて打つべきものと覚えておくがよい。

白①の手は、黒の地を消さうといふのであるが、②の手でかく打込むのは早速過ぎる。先づ「ろ」の邊に打つのが至當である。けれども、圖の如く、直ぐに打込んで来たらどうするかは、初學の最も迷ひ易いところであるから、これよりその變化を説明して、利害得失を明かにする。

そこで、黒③の手は普通であるが、白④の手は、「△」の渡りと、黒が古い定石のやうに「△」に突當つて来れば、⑤に打つて活きやうとする策である。この時黒は「△」に突當つて白を隅に活かしたところで、強ち悪い陣ではないが、當時は圖の如く⑥と打つのが善いとなつてゐる。それは、白が⑦と打つて来た時に、⑧の所に押入すに、圖の如く⑨に飛び、⑩⑪の二子を取込むといふ考へなので、それには、⑫の手が「△」に在るよりは、遙に利盛であるからである。これは、如何にも隅を損したやうであるが、白の⑬⑭の二子を取込んだのが非常に大きいから、黒は十分である。



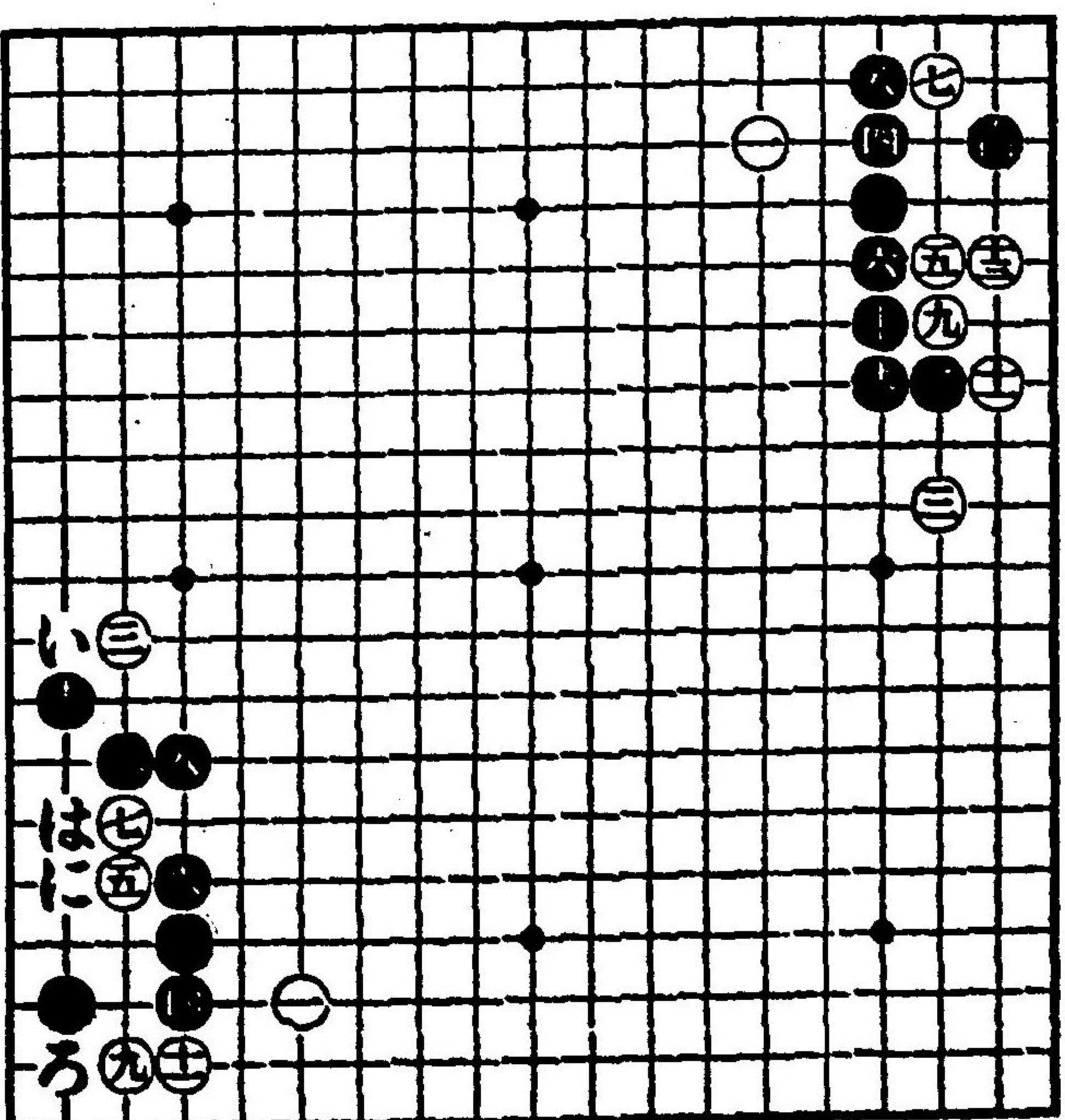
第六十五圖は、白⑦の手よりの變化であるが、白が⑤と打ちつばなしで、⑦とかく先きに打つた時は、黒は⑥の手を⑥の所に打つて、前圖のやうに渡らせるのは、非常に損であるから、圖の如く抑へねばならぬ。なぜならば、白が多く資本を注ぎ込んでゐないからである。又白が⑧の手で⑥の所に打つたとしても、黒は矢張り⑥の所に打つて、⑥の一子を取るがよい。

又白⑧の時黒が⑨と打つのは、普通は悪い手で、⑨に立つべき所だけれども、本圖は白が⑦と資本を入れてあるから、圖の如く渡らせても差支ない。本圖も亦前圖同様矢張り黒の方が宜しい。

第六十六圖も亦、白⑦の手よりの變化であるが、白が⑤と打つた時は、前同様の理由を以つて、黒は⑥と飛び、先きに資本を入れた方を取つて、白に⑥と渡らせるのがよい。この振替りも亦、黒は十分である。

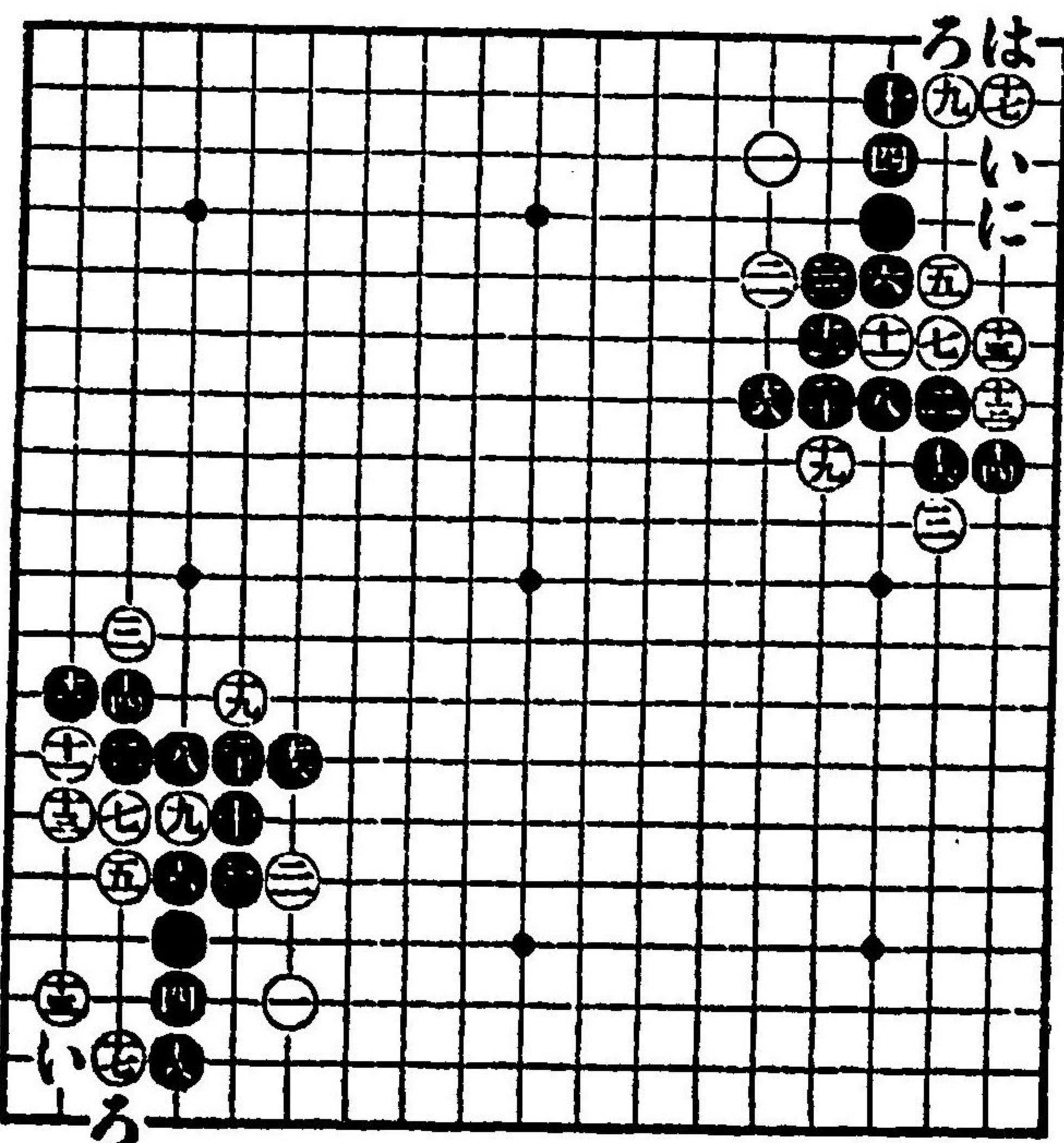
若し白が、後に「い」に抑へたならば、黒は必ず「ろ」に抑へることを忘れてはならぬ。さうでないで、白に「は」又は「に」に打たれて、⑥⑦の石が蘇生することがある。

(第六十五圖)



(第六十六圖)

(第六十七圖)



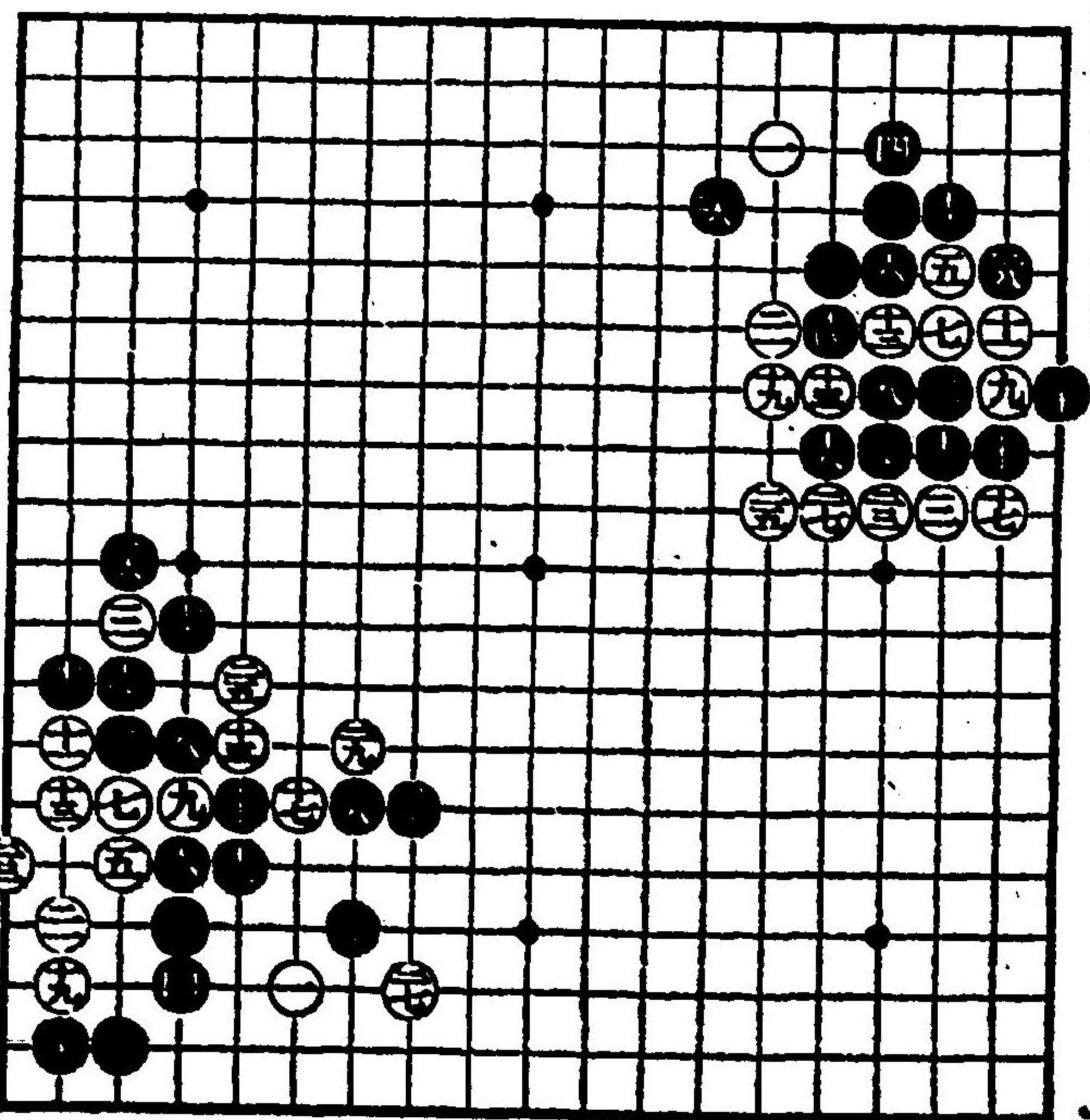
(第六十八圖)

第六十七圖は、前圖黒⑧の手よりの變化であるが、この⑧の手は悪い。なぜならば、白の⑥の手が非常に善いからである。しかし、白が⑥の手で「い」に打つとすれば、黒は決して悪くはない。その理由は、後に黒より、「ろ」に跳ね、白は「は」に抑ふれば「に」に附越して、劫にする手があるし、又白が「は」に抑へず、「に」に引いて活きるとすれば、黒は⑥の一子を取り得るから、この黒は外に眼形を失つても、中に活きがあることになるからである。然るに本圖では、黒が「ろ」に跳ねて来たところから、白は「に」に打つて、損耗なしに活きるといふ旨い手があるから、前圖に比べると黒の悪いことは明かである。

第六十八圖は、黒⑧の手よりの變化であるが、前にも述べた通り、白が⑦の手で⑥の所に打たずに、圖の如く⑥に突當つた時、⑨の所に抑へて⑤に渡すのは、古風の定石で面白くないから、圖の如く⑥と伸びるのがよい。本圖は、一見前圖と同じやうに見えるけれども、手順によつて斯くなつたもので、⑧の手が「い」にないだけに、黒に劫に打つ手が残つてゐるから、黒は十分といはねばならぬ。

第六十九圖における白④の手は、無理であるけれども、つまり、④以下の五子を棄てて、外を塗らうといふ趣向である。だから、黒は⑤の手で、次圖の如く⑥の所に逃げて、白を活かす方がよろしい。圖の如く⑦と打てば、白の五子は取れるけれども、白の趣向にはまつたもので面白くない。唯古い定石にあるから、參考までに掲げるのである。

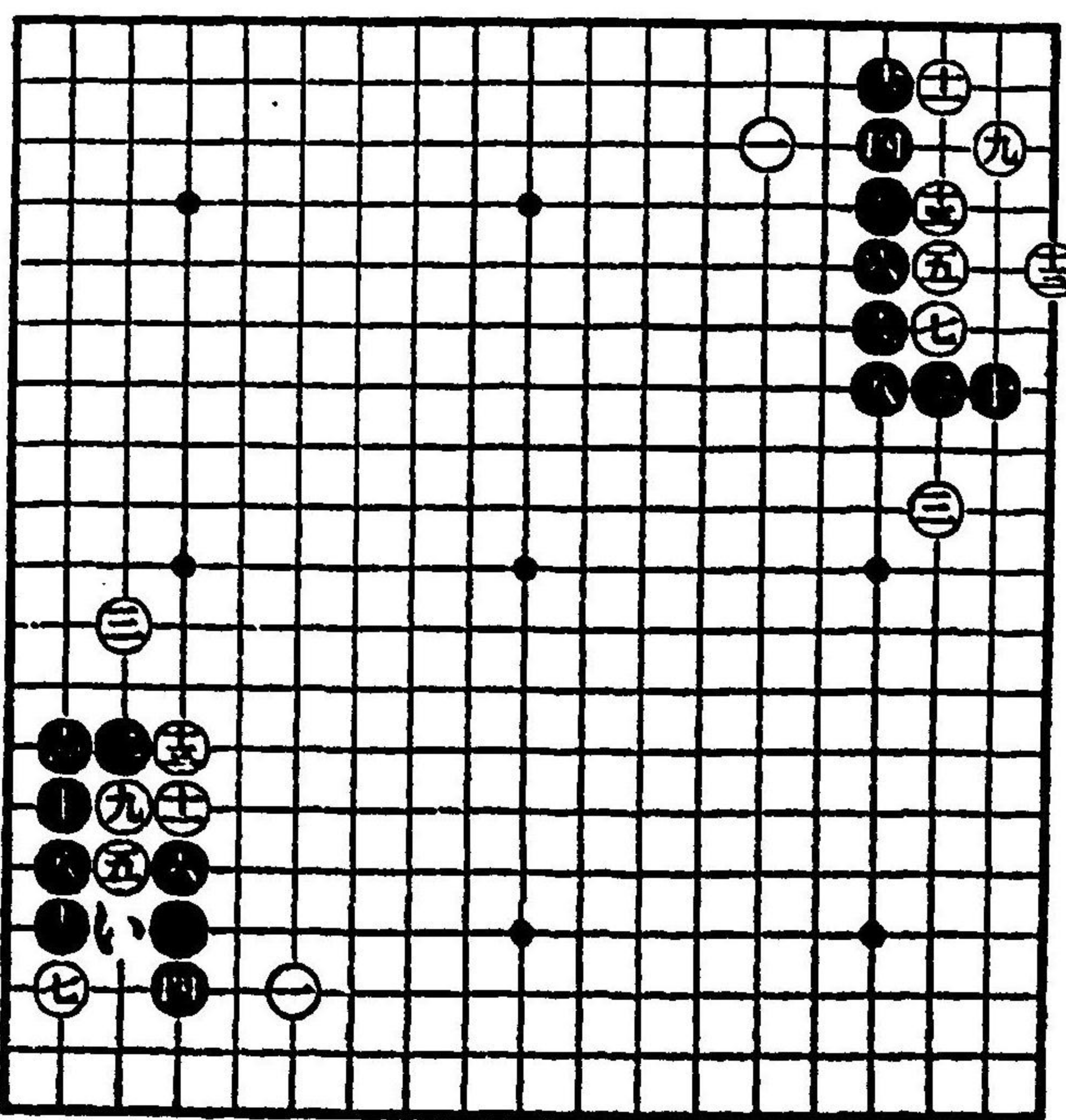
第七十圖における黒⑧の手は、前にも述べた通り非常に善い手である。又黒の⑨は手筋、⑩は形、⑪も亦手筋といふもので、何れも大に善い手である。かうなれば、たとひ白を取らずとも、白を眼二つにして活かしたのだから利益である。圖の如くなれば、白は忽ち潰れて仕舞ふ。これで見ても、白が最初⑫と打込む手の、悪いといふことが分るであらう。



(第六十九圖)

(第七十圖)

第七十一圖における白⑬の手は、悪い手であるけれども、變化を試みるために、承知の上で打つたのであるが、然る時は、黒は直に⑭と下るのが大に善い手であるから、忘れてはならぬ。白は圖の如く後手を以つて、活きることは活きるけれども、外が眞黒くなるから、どうすることも出来ない。かくて黒は、⑮若くは⑯の石を、夾んで打てば、必ず大に善い基になる。



(第七十一圖)

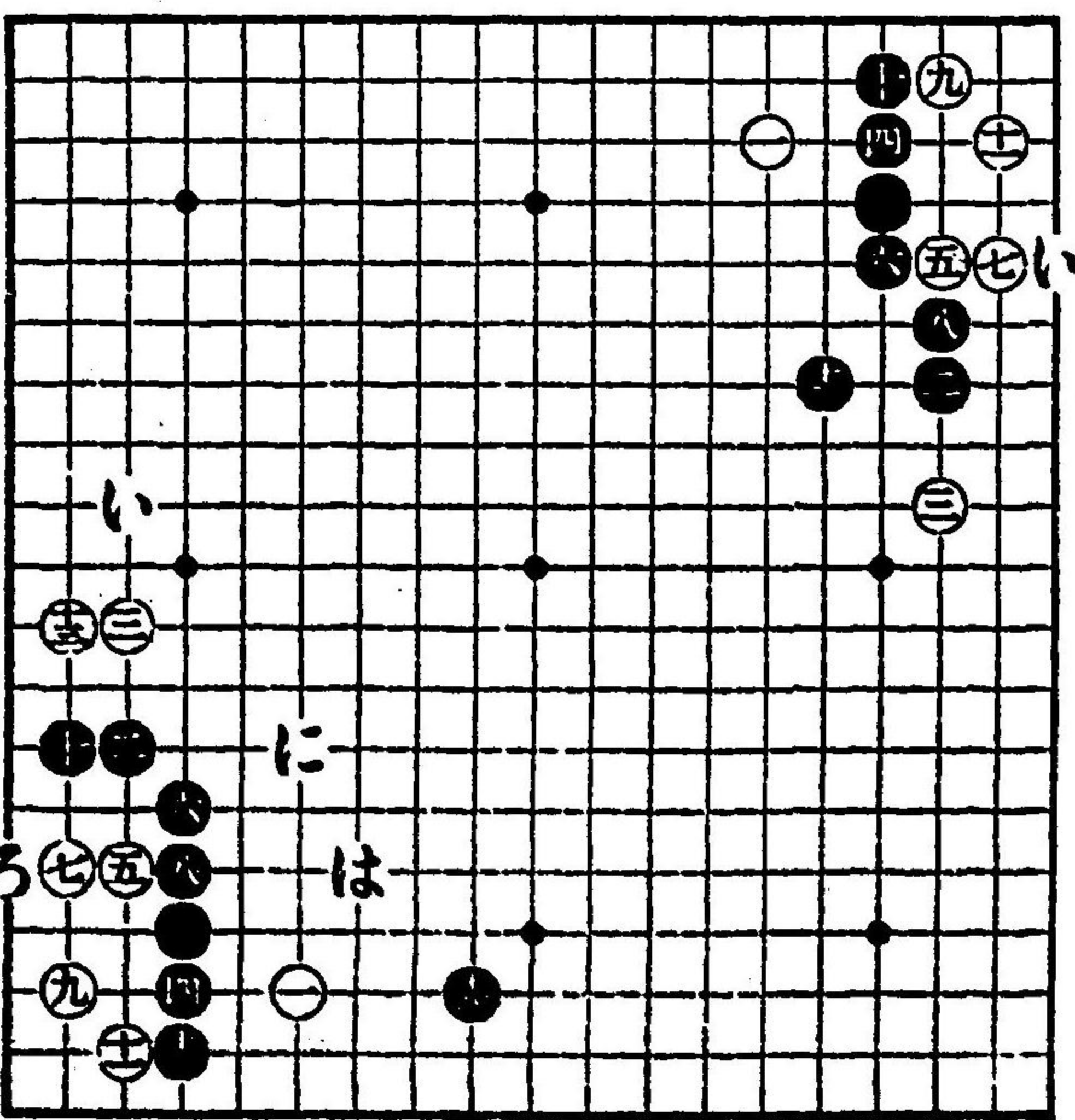
(第七十二圖)

第七十三圖も亦、白⑤の手よりの變化であるが、白⑤の時黒が①と打つのは、左右何れかの白を、ひどくイデメやうとする場合で、白⑨の時①と抑へて隅の白を活かし、③と後手を引くのは、一見損のやうであるが、力さへ強ければ、決して悪くはない。しかし、③の手は最も大切の手であるから、よくよく忘れてはならぬ。かく打つて置けば、後に「い」に附けて、兩方より抑へ附ける手があるから、白は隅に活きたところで、矢張り面白くないといはねばならぬ。

第七十四圖は、黒⑥の手よりの變化で、この⑥の手は、古來ある定石ではあるが、常に打つべき手ではない。特に⑤の所に白の在るやうな場合には、少し緩い手だから面白くない。黒⑥の手は、昔は①の所に打つたものだけれども、圖の如く③の石ばかりの時は、①と繼ぐのがよい。但し「い」に白石のある場合には、渡られる手があるから、普通通りに打つがよい。又④の手で①の所に先きに打てば、白は⑨の手で⑤の所に打つことを忘れてはならぬ。白⑤の手、中働きのある善い手である。この手がないと、黒より「ろ」に附けられて、隅の白が死ぬことになるから、白は一着を要する所であるのに、中に打たずに外に打つて、それで中の石を活かすといふ旨い手であるから、忘れてはならぬ。黒⑥も亦善い手で、若し白

が⑤の手で「は」に逃げれば、黒は「ろ」に打つがよい。要するに本圖は、黒の不器用な打方であるから、そのつ

(第七十三圖)



(第七十四圖)

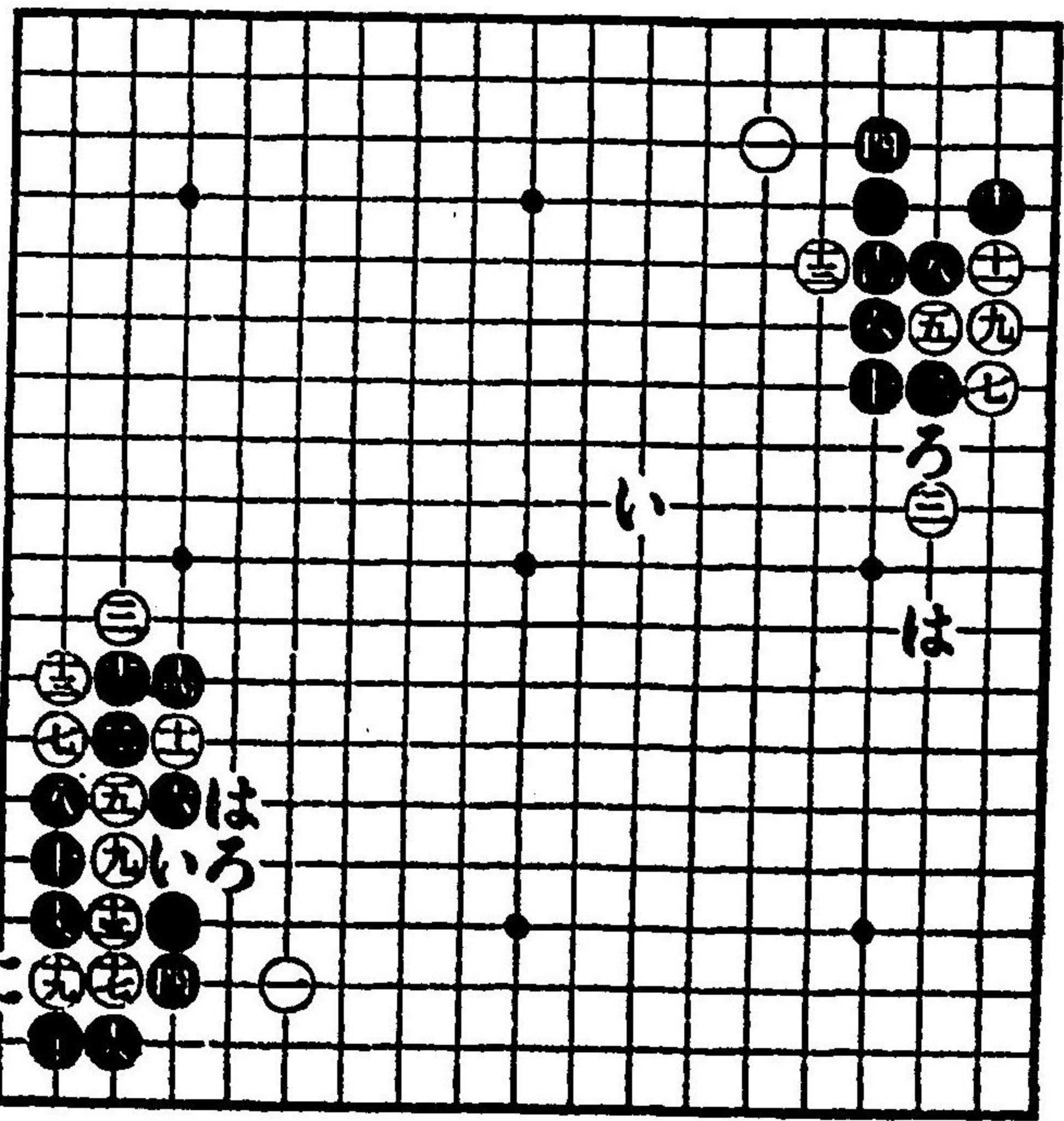
もりで記憶せねばならぬ。

第七十五圖は、白⑤の手よりの變化であるが、白が⑤と附けて來た時は、普通⑥と上から抑へるがよい。白⑤は④の所に伸びる手がないから、圖の如く跳ねたのである。尤も「い」の方面に白石のある場合でなければ、⑤の石は次圖に示すやうに、④の所に切られて四丁に取られるから、白は容易に打てない手である。黒⑥は、厚くてよい手である。この手で「ろ」に突當るのを往往見受けるが、大に悪い手である。

本圖は、黒の地を減らしたやうで、白は得をしたやうに見えるけれども、白は實際餘り面白くない。則ち、白は「は」にでも打つて置かぬと、黒に打たれることになれば、始末がつかぬから、黒は十分である。

第七十六圖は、前圖の説明を補足するまでで、則ち前圖における「い」の方面に白石のない場合には、黒は本圖の如く④と切つて、⑤の石を四丁に取ることが出来るのである。これは準四丁といつて、一寸四丁らしく見えないが、⑥までの手順を運んだ時、白が「い」に打てば黒は「ろ」に當て、白が「は」に④の一手を取れば、黒は「は」に當てて四丁になる。これは白ハマリの形で、初學には分りにくい四丁であるから、心得のために現はしたのである。

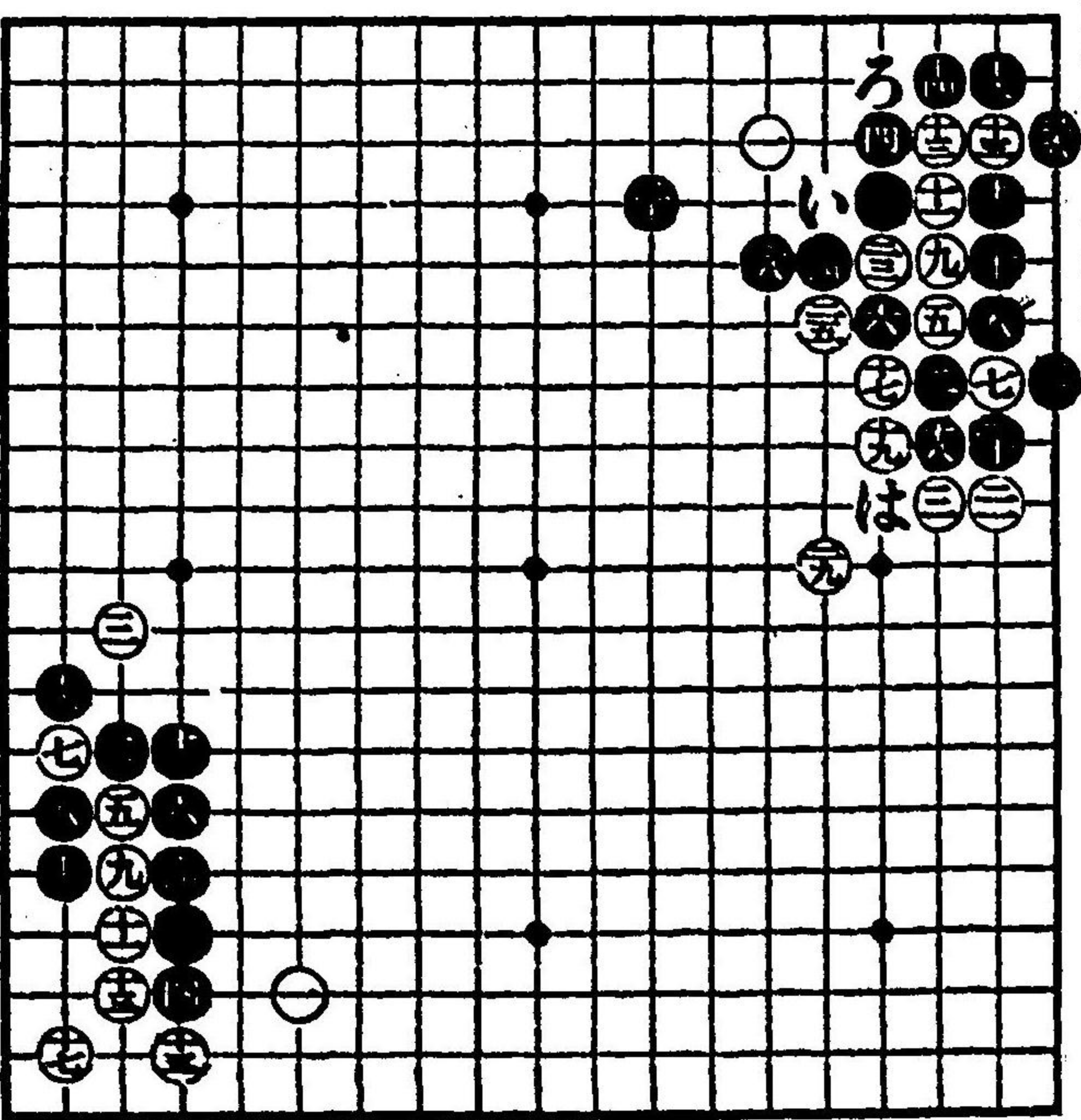
(第七十五圖)



(第七十六圖)

第七十七圖は、前圖白⑤の手よりの變化で、白は前圖のやうに四丁に取られてはたまらぬから、仕方がなく打つたのであるが、その結果は、黒は攻めながら地が出来てゐるのに、白は地なしであるから、白は矢張り面白くない。又若し白が⑤の手で「ろ」に切れば、黒は「ろ」に繼いでゐて差支へない。さすれば、白は矢張り⑤の方に手が戻る。若し白が⑥に打たなければ、黒より「は」に切られるのが、如何にもキビシイ手であるから、結局圖の如くなるくらゐのものである。黒⑥は大に善い手で、必ず打つことを忘れてはならぬ。

第七十八圖は、前圖黒⑥の手よりの變化であるが、この⑥の手は善い手である。前圖のやうに打つて工合の悪い場合には、圖の如く打つて悪くないばかりか、前圖に比べると、黒は寧ろ優つてゐるくらゐである。



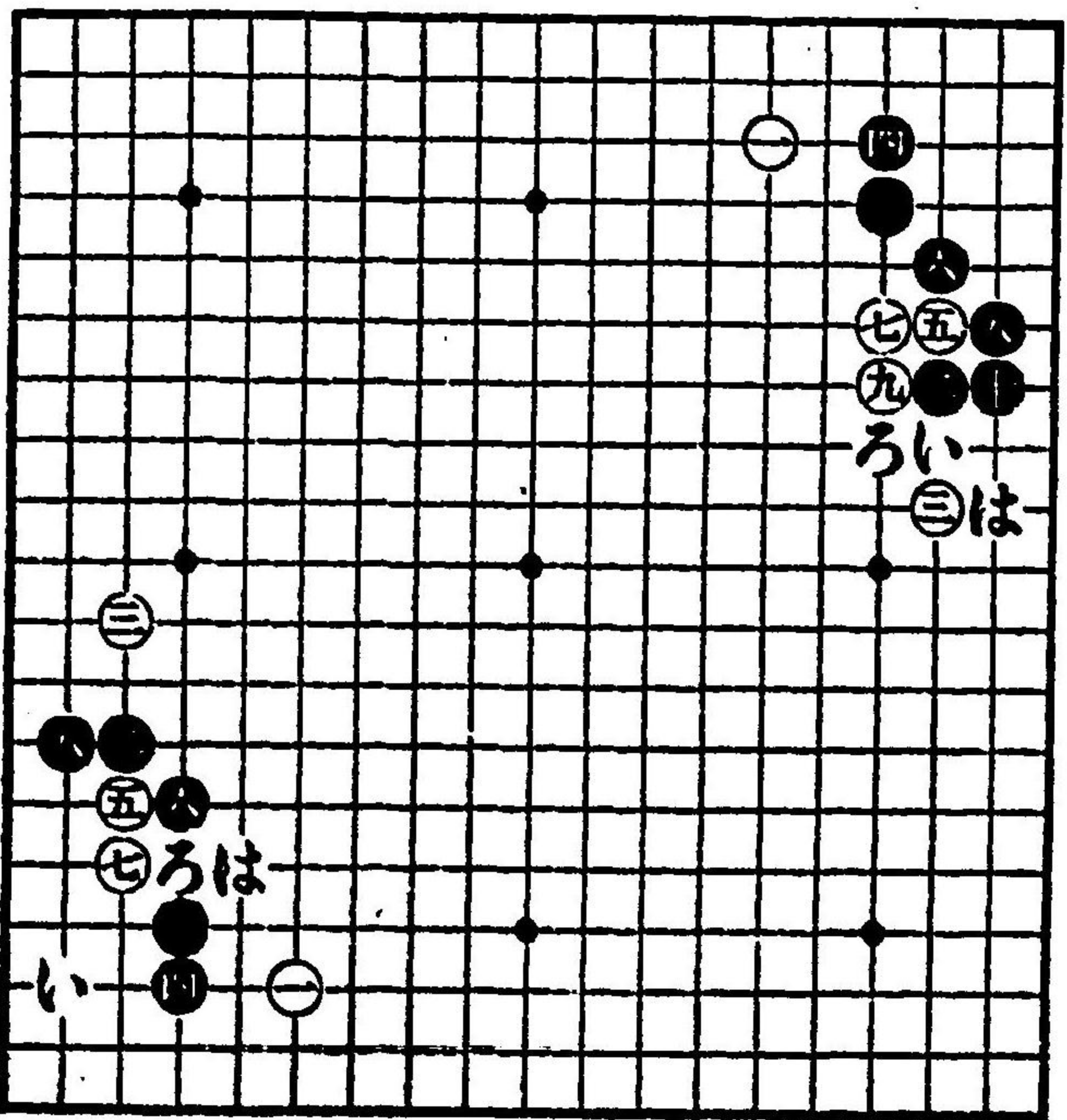
(第七十七圖)

⑥ツッ

(第七十八圖)

第七十九圖は、黒⑦の手よりの變化であるが、この⑦の手は、最初にあつては前圖のやうに打つのが善いけれども、あたりが種種複雑してゐる時は、かく打つのが紛れがなくて善い。白が⑦の手で⑥の所に下れば、黒は⑦の所に抑へて、第七十五圖と同じになる。さて又黒が⑧と黙つて繼ぐのは頗る善い手で、初學の中は、この手で「ろ」に打ち、白「ろ」の時「は」に跳ねたがるけれども、これらは俗手の甚だしいものである。かくキチンと繼いでおいて、「ろ」に跳出す手を狙ふところが、最も味のあるところである。黒に跳出されてはたまらぬから、白は何とか一手を加へねばならぬことになる。だから、黒は十分の形である。

第八十圖は、白⑧の手よりの變化であるが、前にも述べた通り、この⑧の手は悪い手で、黒に⑧と圖の如く下られると、仕方がないことになる。則ち白が「ろ」に打てば黒は「ろ」に繼いでよいし、又白が最初「ろ」に出れば、黒に「は」に抑へられて、ダメづまりとなつて動けない。初學の迷ひ易いところだから、よくよく注意して覚えておくがよい。

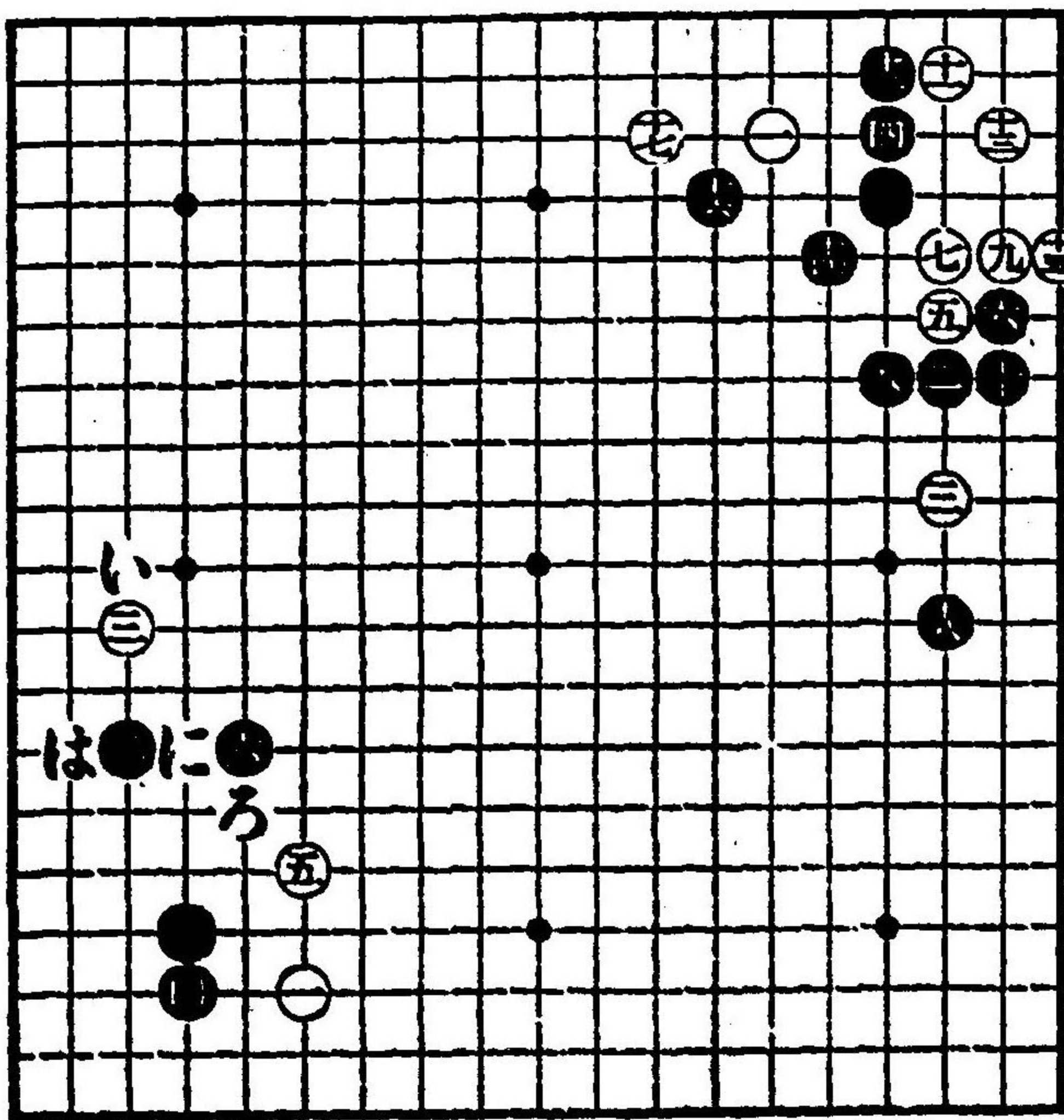


(第七十九圖)

(第八十圖)

第八十一圖における黒⑤の手は、③の白を弱くして攻めやうとする場合には、面白い手であるが、初學には一寸打てない。又場合によつては、①の所に下る手もあるが、白⑦の時①と伸びる手は、とかく白に趣向をせられるから、この變化の中では悪い方である。しかし、②と掛けて④と夾むなどは、最も善い手で、矢張り黒十分の形である。

第八十二圖は、白⑤の手よりの變化であるが、白が打込ますに圖の如く飛んだ時は、黒も必ず⑥と飛ぶのがよい。黒がかく飛ぶのは、③の白があるからで、若し③の石のない時は、「5」に二間に開くべきものであると覺えておくがよい。或は⑥の手で、「ろ」に兩桂馬に飛ぶこともあるが、これは堅いといふだけで、白より「は」又は「に」に附けられる手があつて、固まり過ぎて發展の道がないから、面白くないといはねばならぬ。

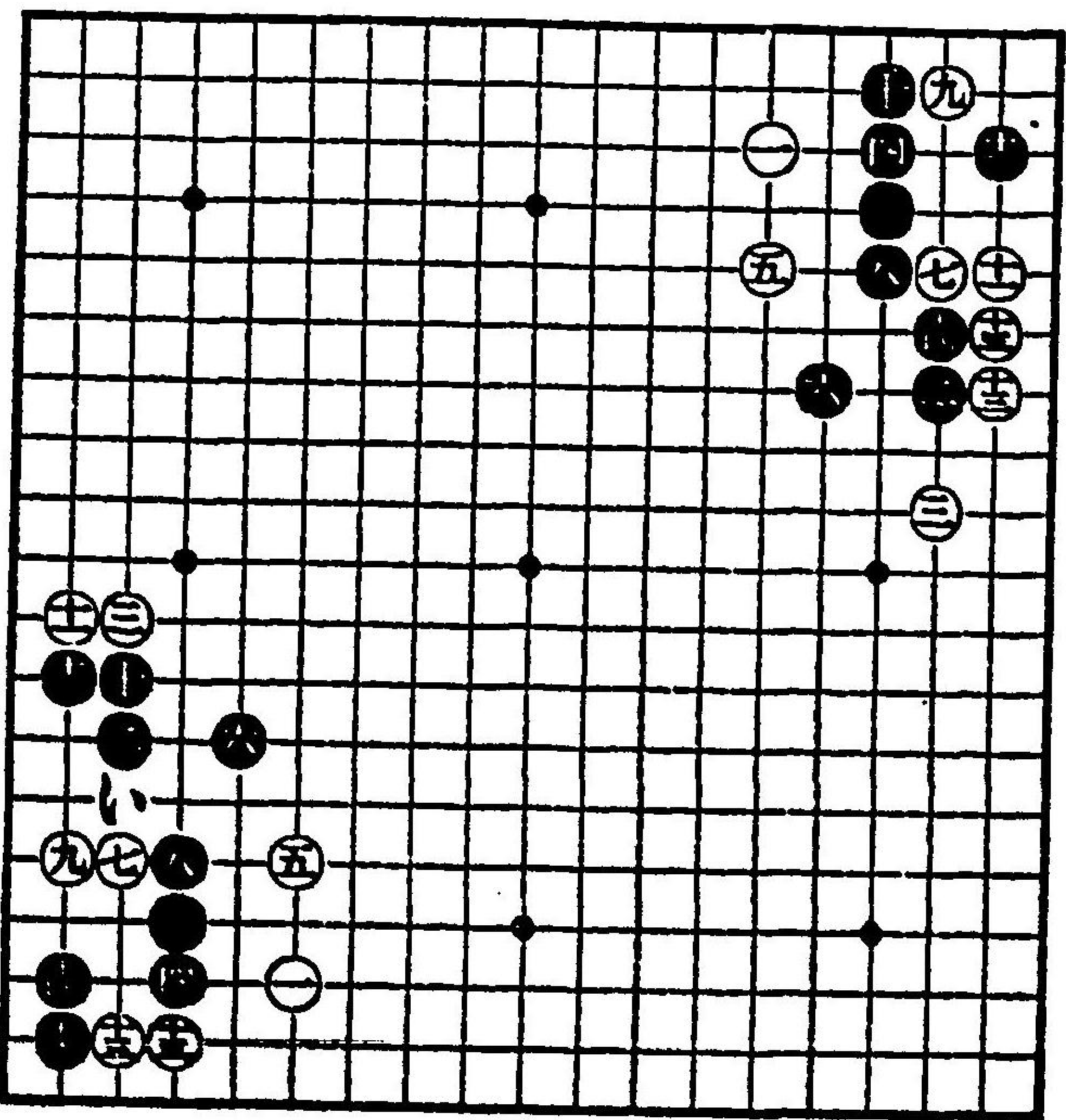


(第八十一圖)

(第八十二圖)

第八十三圖は、白が⑦と打込んだ場合であるが、先きに⑤の石のない時に説明した通り、斯る場合には、③と打つて④の二子を取込むべきもので、黒はこれで十分である。

第八十四圖は、前圖白④の手よりの變化で、既に前にも説いた通り、昔は黒⑤の手を「い」に打つて、白を隅に活かしたものであるが、今は③の石に突當り、以下⑥まで手順を経て、⑦⑧の二子を取込むのがよいとなつてゐる。とかく初學の中は、前圖と共に取り方を間違へ易いから、前圖のやうに④と①の石に渡りを打つた場合と、本圖のやうに④と下つた場合とを間違へぬやうに、よくよく心得ておかねばならぬ。



(第八十三圖)

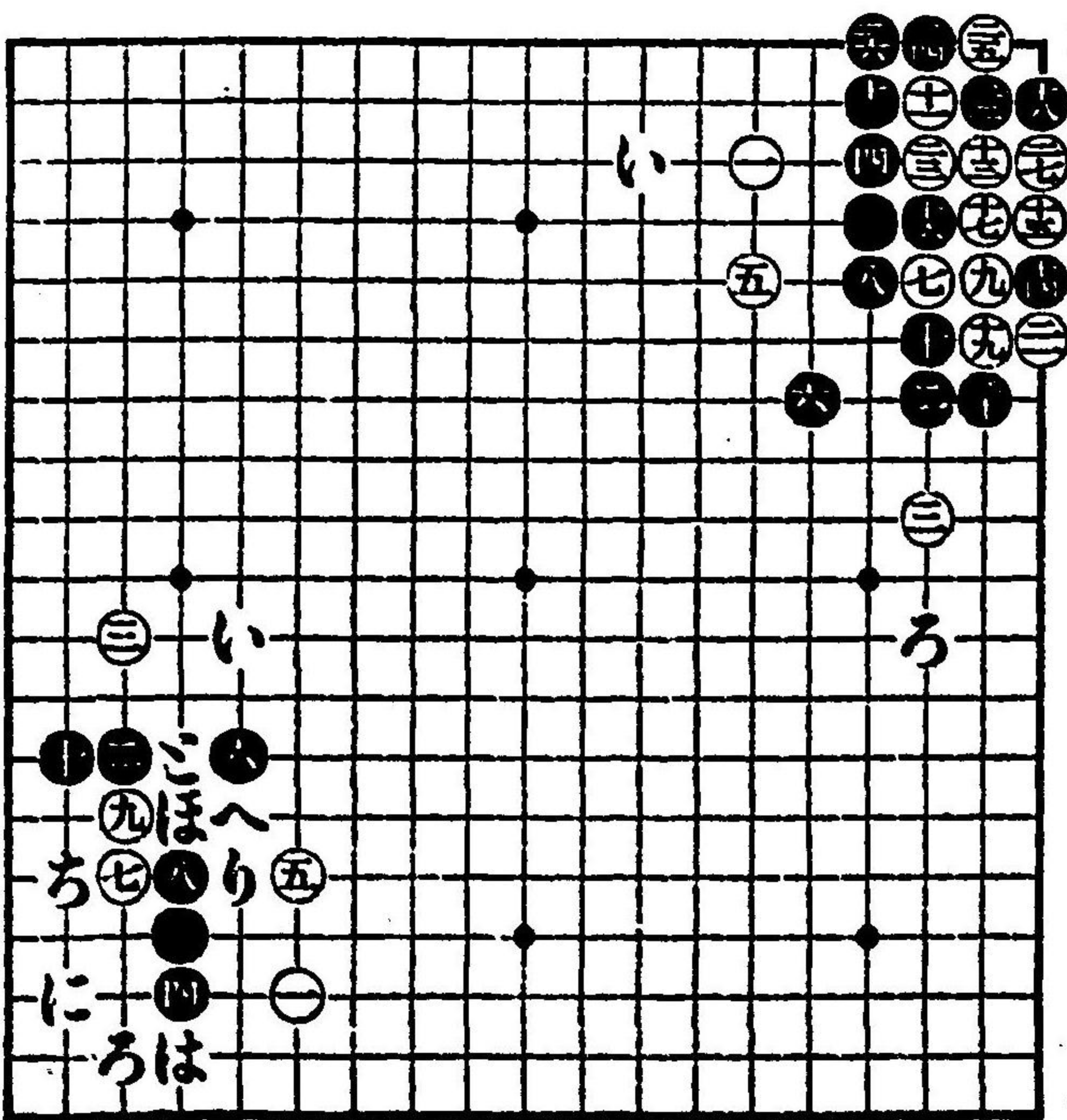
(第八十四圖)

第八十五圖は、前圖黒⑩の手よりの變化で、則ち昔風に打つた形を示したのであるが、外面の白をイヂメやうとする場合には、かう打つのに限る。だから、趣向によつては、この定石を用ゐるのも宜しい。そこで、黒が⑩と打つのは、外面の白をイヂメやうといふ趣向で打つのだが、白が⑪と打つた時は、黒は前圖のやうに⑫の手で⑬に打つて、⑭⑮の二子を取込むのは損である。圖の如く⑯と打つて、隅を活かすが宜しい。

黒⑯より⑰までは、忘れてはならぬ肝要の手順で、かく打つた以上は、黒は「い」は又「ろ」に打つて、白を攻立てるがよい。眼を持たうなどといふ考へを出すのは、この場合宜しくない。黒は渡りがあるけれども、白は渡りがないから、ドシドシ強硬に攻立てるがよろしい。

第八十六圖は、前圖白⑯の手よりの變化であるが、この⑯の手は大悪手である。白が斯く伸びるのは、黒の⑰の手のない場合か、又は「い」に白石の在る場合に限る手で、既に⑱とある以上は、白は死んで仕舞ふ。

黒⑲は肝要の手であるから、忘れてはならぬ。この時白が⑳と「ろ」に打込めば、黒は「は」に抑へ、白が「に」に尖めば「ほ」に抑へて、隅の白に活きがないから、白は「ろ」に打込むやうなことはなく、⑳の二子は⑰の一手で取られてゐるのである。しかし、白が「に」に尖む手で「ほ」



に出で、黒「へ」に抑へた時「に」に打ち、黒「と」に繼いだ時「ち」に打てば、黒は「り」に繼がねばならぬから、白は隅に活きすることは活きるけれども、それには、尙一手を

(第八十五圖)

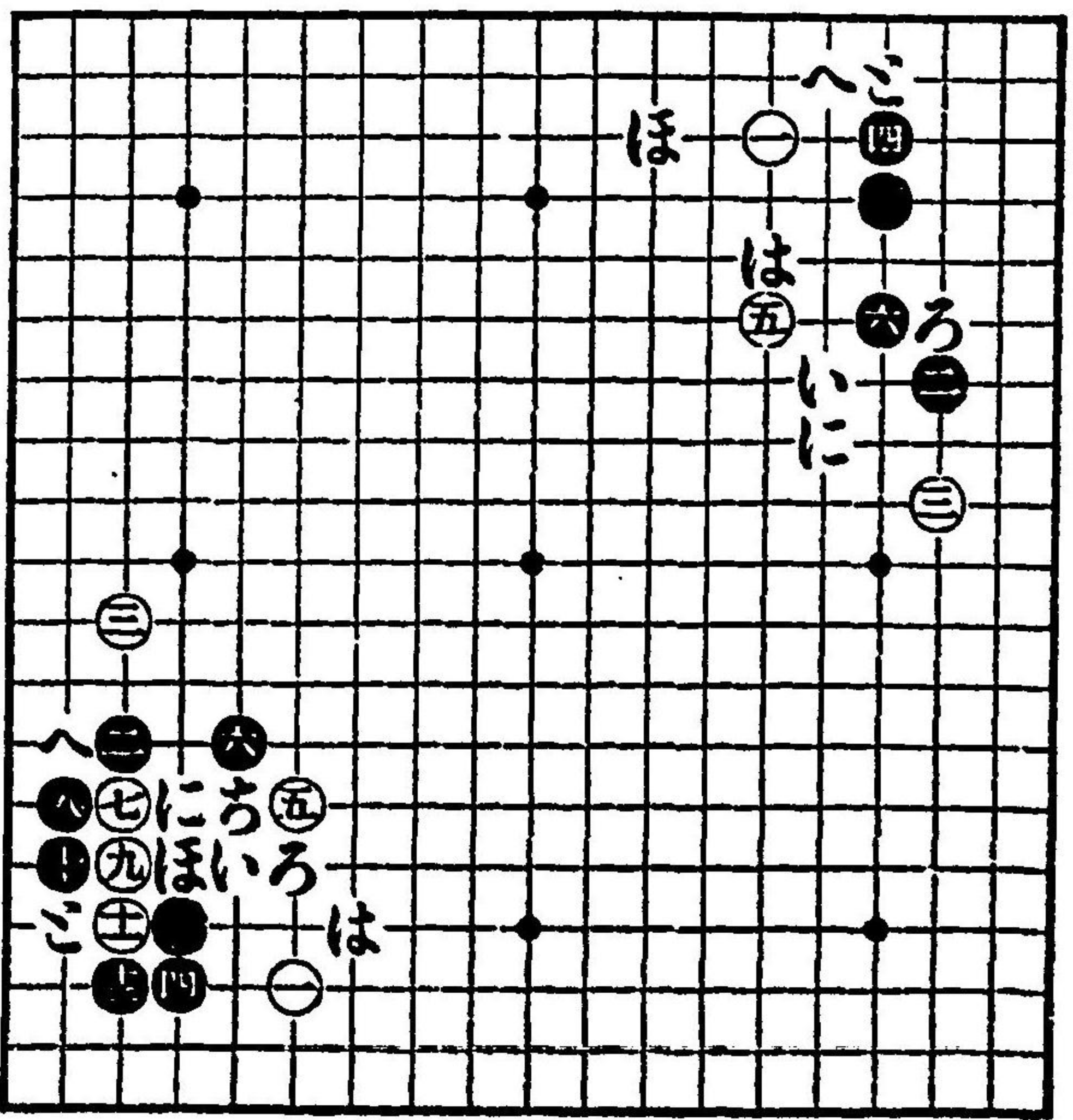
要するし、外部の白が弱くなるから、活きたところで白は面白くないといはねばならぬ。

(第八十六圖)

第八十七圖からは、白⑳の手を變化して、圖の如く二間飛んだ場合であるが、白が斯く㉑と打つのは、黒に「い」に飛ばせた後「ろ」に附けて黒を逃はせやうとする策で、「は」に飛んだ場合とは、全然意味が違つてゐる。だから、この場合には、黒は㉒と打つて堅めるのが宜しい。その時、白が若し「に」に掛けて来れば、隅は安全であるから、「ほ」に夾んで打つ考へであるのが肝要であるし、又若し白が「に」に掛けずに、「へ」に尖んで来た時は、「と」に受けてはならぬ。必ず「に」に桂馬して、外部に發展するといふ心がけを忘れてはならぬ。

第八十八圖は、黒が㉓の手を前圖のやうに打つことを知らずに、圖の如く一間飛に打つたものとして、白より打込んだ時の變化であるが、無論前圖に比べると黒は劣つてゐる。尤も黒は、白㉔の時先手を取つて、他の大場に打たうとする場合には、㉕の手で「い」に打ち、白に「ろ」若くは「は」に受けさせて、手を抜いてもよい。

そこで、既に㉖と圖の如く打つた以上は、白が㉗と打込んで来た時、㉘と應ずるのは大に善い手である。とかく初學の中は、この手で「に」に抑へ、白㉙の時「ほ」に繼ぎ、白に「へ」に渡られるが、それでは、㉚の手の効力が少しもないことになるから、一番悪い。黒の㉛も亦善い手で、白が若し㉜の手で「と」に出れば、「ち」に打つて白を



取ることが出来るし、又白が「ち」に逃げれば、「と」に渡つてゐて、一見地面が減つたやうであるが、その實少し

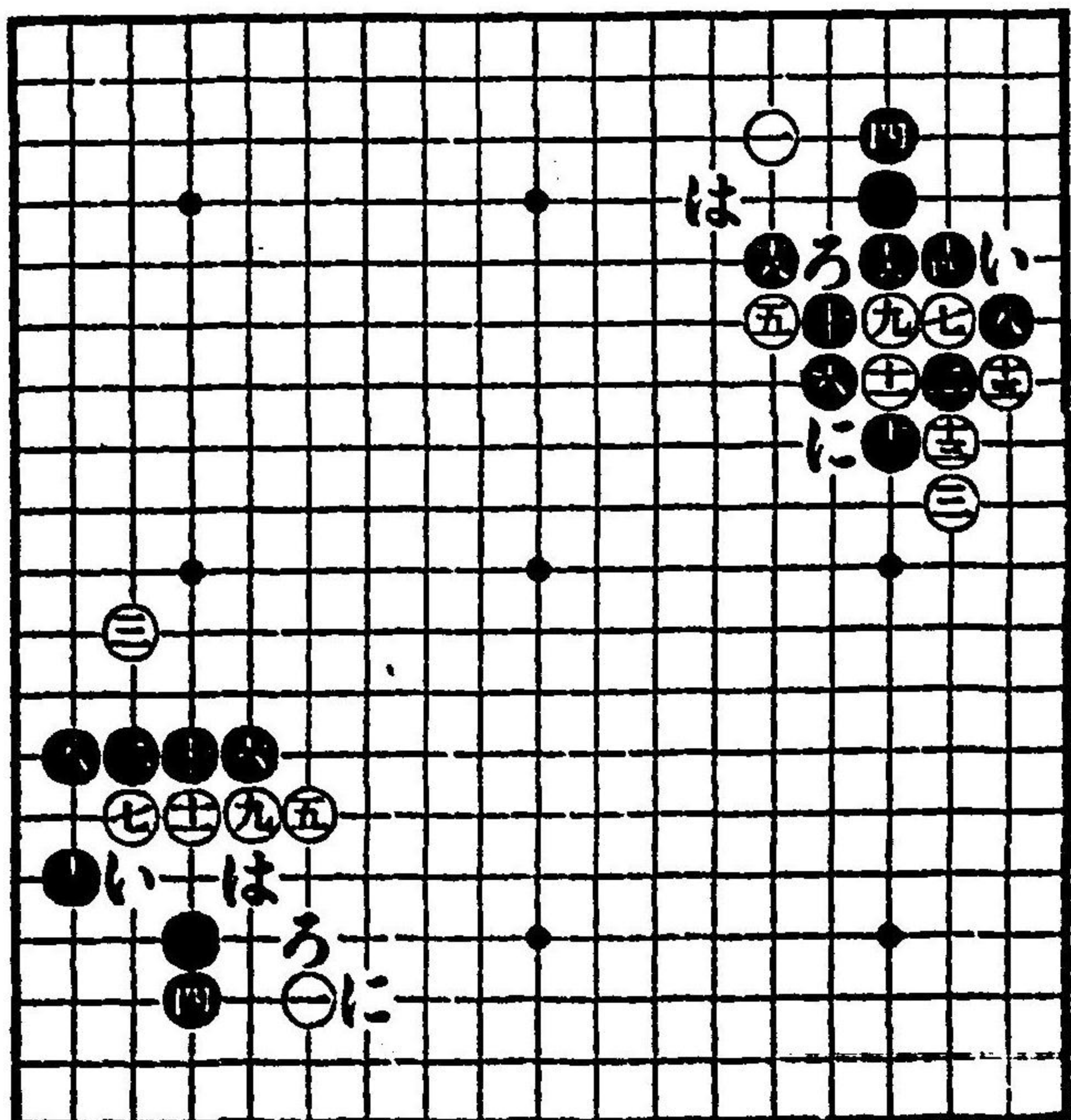
(第八十七圖)

も減つてゐない。要するに、これ昔の手の癖で、この㉜の手は、最も肝要の手であるから、忘れてはならぬ。

(第八十八圖)

第八十九圖は、前圖白④の手よりの變化で、この④の手は、餘り面白くない手ではないが、唯黒の受方を示すために出したのである。しかし、黒に⑤と跳ねられては、白には旨い手はない。黒⑥より⑦までは大に善い手であるが、これに反して、白⑧の手は、如何にも俗手で宜しくない。だから、白は⑨の手で⑩に切るのが善いけれども、さすれば、黒は⑪の手で⑫に引き、白が⑬に出れば⑭に引き、白は⑮に打てば⑯の所に出てもよし、又白が⑰に打たずに⑱に打てば、黒は⑲に掛けてみて宜しく、いづれにしても、⑳の手の肝要であることは、ますます明かである。

第九十圖は、黒㊸の手よりの變化であるが、黒が斯く㊸と下るのも亦餘程善い手で、㊹の石を攻めやうとする場合には、前圖よりも優つてゐる。黒㊸も亦善い手で、白が若し㊺の手で㊻に打てば、黒は㊼に附け、白が㊽に並べば㊾に跳ねて、別別に打つ考へでをれば、白の恰好が悪いから、黒の方が宜しい。則ち白は、双方活きてゐる石を切つた道理で、㊿を打つたと同じことになる。



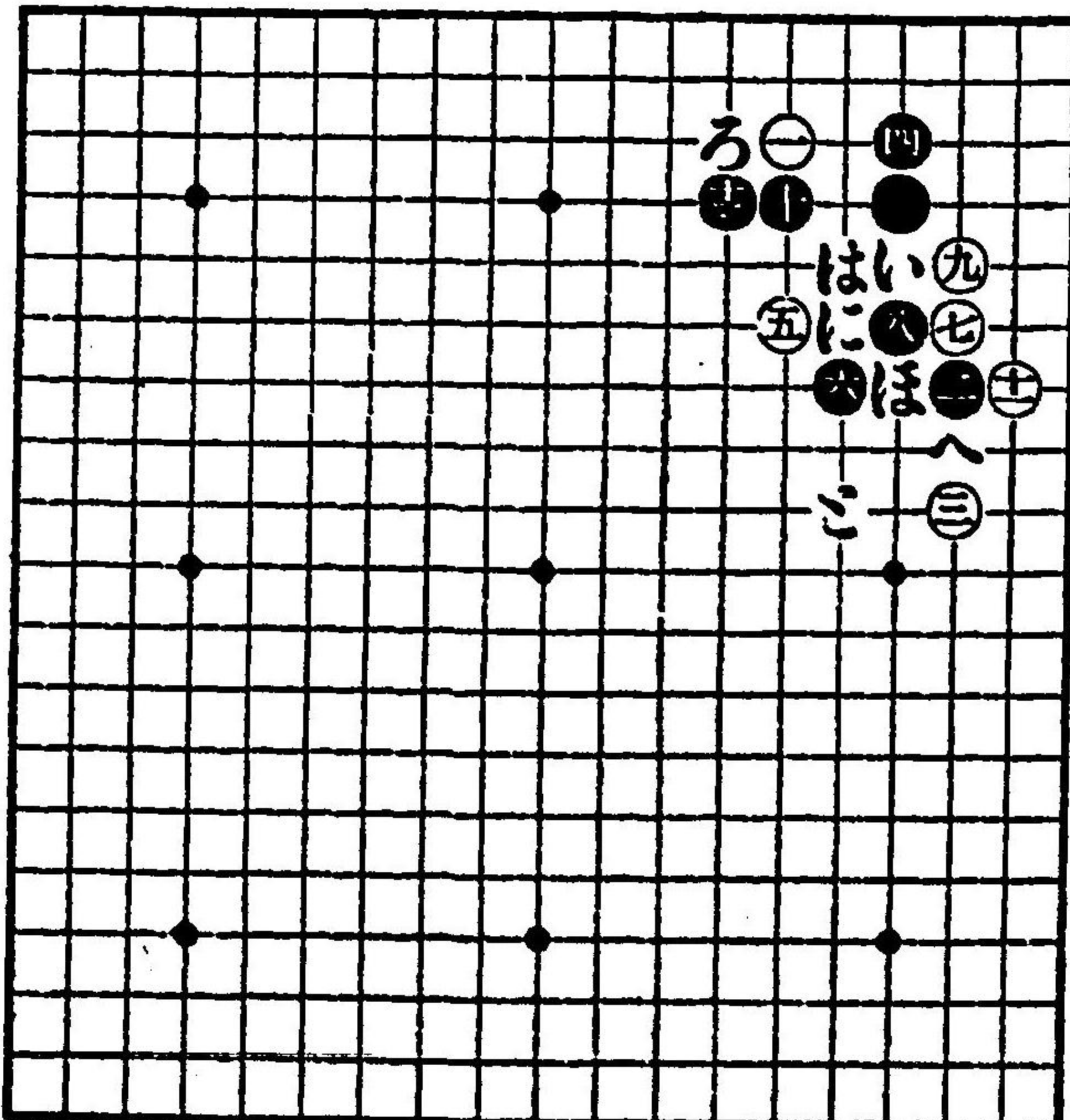
(第八十九圖)

④三目ツグ

(第九十圖)

第九十一圖も亦、黒㊸の手よりの變化で、この㊸の手は、手筋からいへば面白くないが、しかし、㊹の手がよいから取り返しがつくのである。前に㊺の手で斯く打つのは悪いといつたが、㊻と圖の如く打つつもりならば、あながち悪い譯ではない。尤も㊼の手で㊽に離れば、白に㊾と渡られ、白が㊿と打つた註文にはまることになつて、前にも述べた通り面白くないから、注意を要する。黒㊸も亦大に善い手で、これを㊹に跳ねるのに比べるゝ、餘程優つてゐる。しかし、㊺の白に逃げられて悪い場合には、㊻に跳ねる方が善いこともあるから、熟考の後いづれとも決するがよい。

又若し白が㊼の手で、圖の如く渡らずに㊽に跳ねたらば、黒は㊾の所に下つて二子を取るがよい。即ち白が㊽に出れば㊿に抑へて、白に手はない。又黒㊸と打つた後、白が㊽に出たとしても、黒は矢張り㊿に抑へるので、その時白が㊾に切れば、黒は㊿に離いでよい。則ち白は㊿に打つより仕方がないが、白が㊽に打てば、黒は㊿に飛ぶだけのことであるから、㊽の切れば少しも恐れるには足らぬのである。



(第九十一圖)

第九十二圖は、黒が八十八圖以下の應手を忘れた場合の打方で、この變化は、前數圖に比べると、黒は多少劣つてゐるけれども、簡單明瞭で宜しい。白が⑨の手で「い」若くは⑩の所に受けたらば、黒は「ろ」に跳ねるか又は⑨の所に下つてゐるのが確かだ、さすれば、白は④と附けた効能がなくなつて仕舞ふ。

黒①は大に善い手で、これは、②と打つ時からの趣向であるから、忘れてはならぬ。かくて、黒がこの後打たうとする場合には、「は」に夾んで打つのである。

われもまた

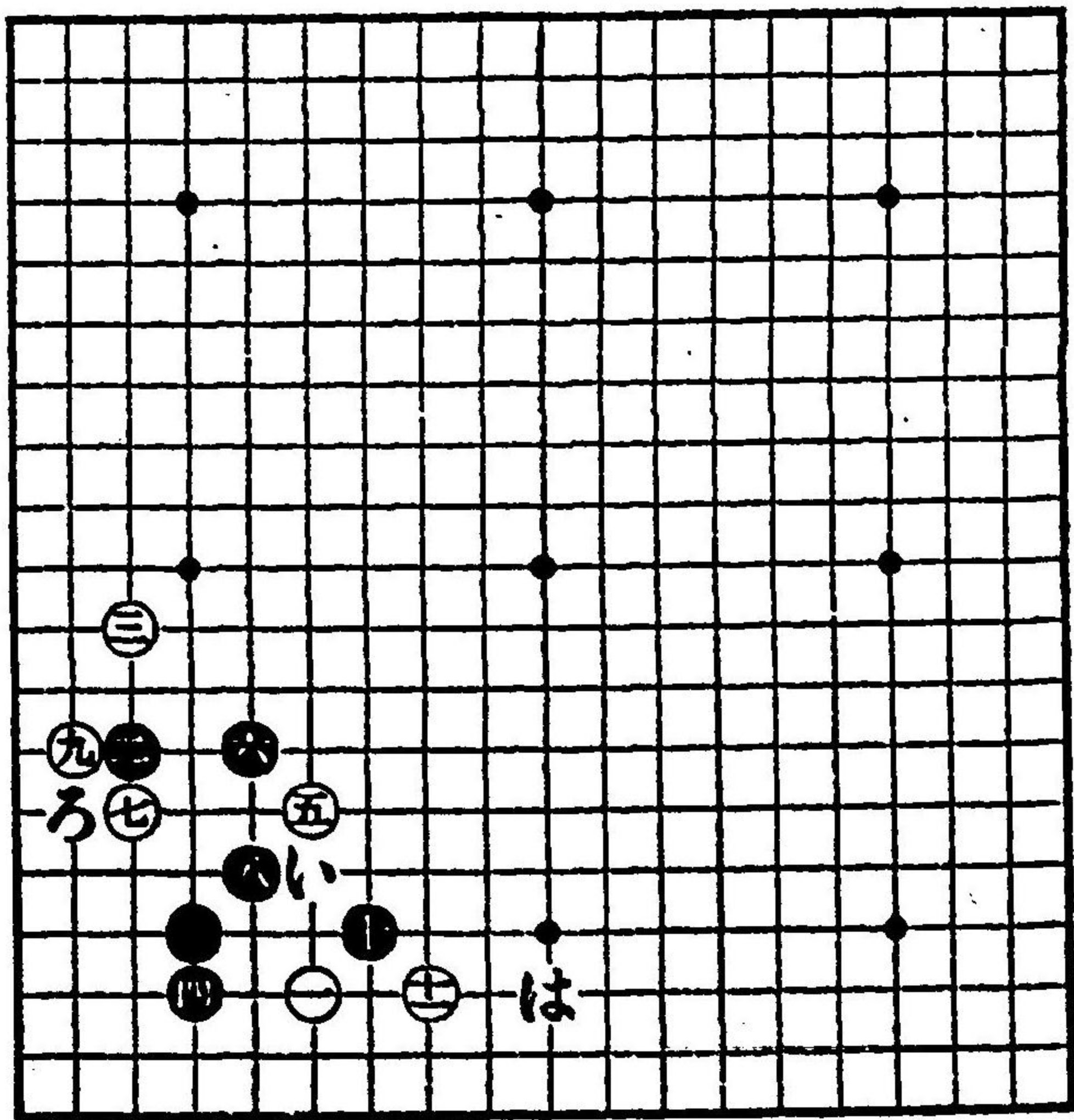
あたなる戀に

みたれ碁の

打ちもれなくに

もの思ひせり

(伴 廣 書)

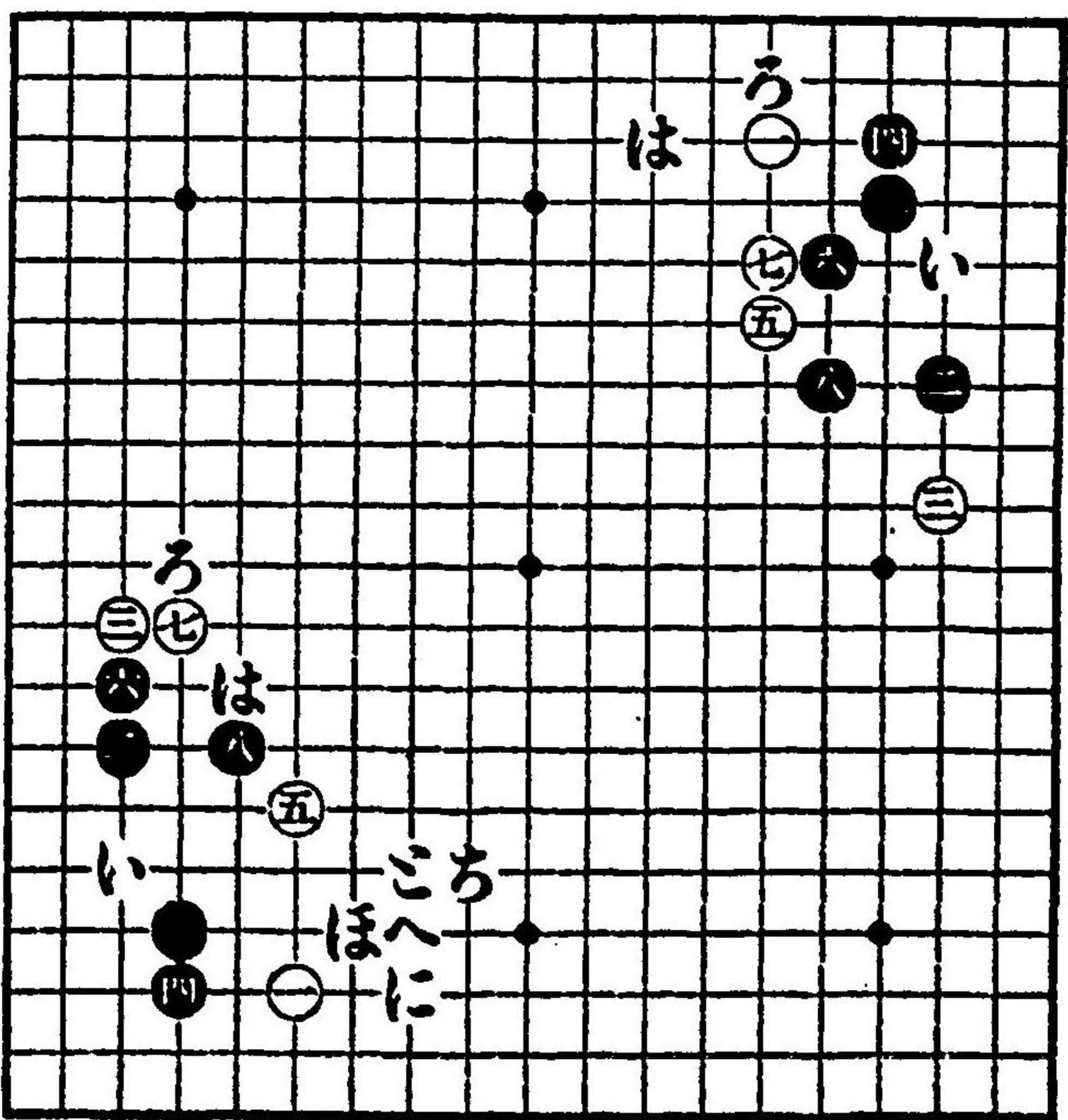


(第九十二圖)

第九十三圖における黒①の手は、白より「い」に打込まれるのを嫌つて、紛れを少く打たうといふ場合には善い手であるが、しかし常に用ゐる手ではない。圖の如くなつたところを見ると、白は①②③④と澤山の石があつて、如何にも堅く仕切つたやうであるけれども、後に黒がこれを攻めるには、第八十七圖にも説いた通り、「ろ」の渡りを見て「は」に夾んで打つものであると忘れてはならぬ。

第九十四圖における黒①の手も、亦前圖と同じ意味で、「い」の打込みを嫌ふ場合に打つ手であるが、しかし、最初より用ゐる手ではない。中頃から後ならば打つてもよいが、それも全局の形勢を見ての話である。なぜならば、黒の堅くなると同時に、白にも③④の方面に、大きな地が出来からである。

さて又、白が若し⑤の手を「ろ」に尖めば、黒は⑥の手で「ほ」に飛ぶのである。かくて、黒は後に暇があれば、毎毎説く通り「い」に夾んで打つのである。さすれば、白は「ほ」に尖むくらゐのものであるが、然る時は、黒は「い」に押し、白「と」に跳ねれば「ち」に跳返して、何處までも押出して打つので、少しも恐れるには及ばない。



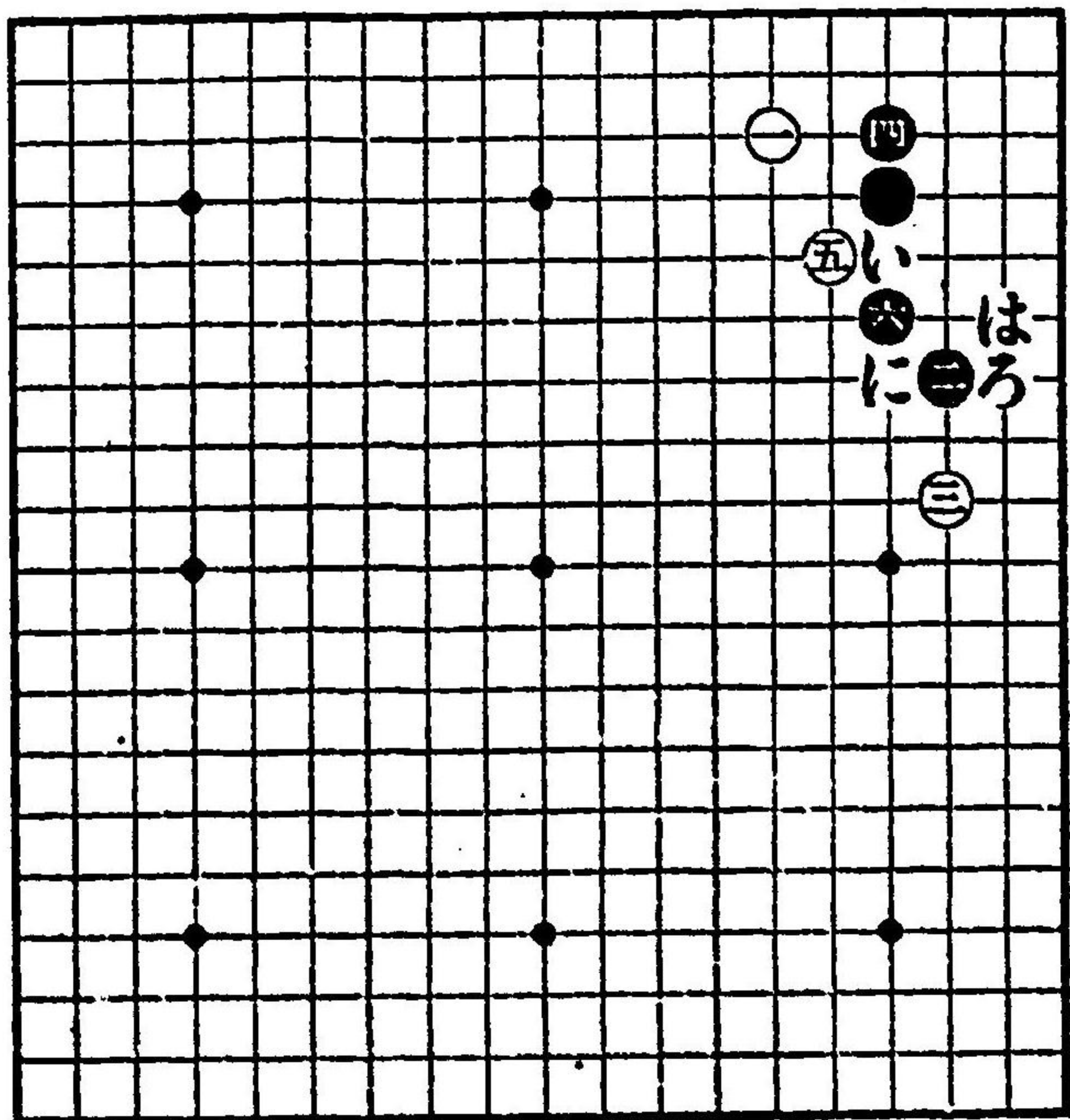
(第九十三圖)

(第九十四圖)

第九十五圖は、白⑤の手を變化したのであるが、圖の如く④と桂馬に掛つて来た時は、黒は⑥と受けるのが一番宜しい。初學の中は、とかく④の手で「い」に打ちたがるけれども、さすれば、白より「ろ」に附けられ、「は」に抑へると「に」に附けられたりして、骨にうるさいばかりでなく、外に出るのにも工合が悪くなる。

局裡乾坤大。人間日月長。
路從平處險。人向靜中忙。
對面心千里。藏機勢萬般。
本來閑暇事。翻作戰爭場。
勢布松窓靜。聲敲竹院深。

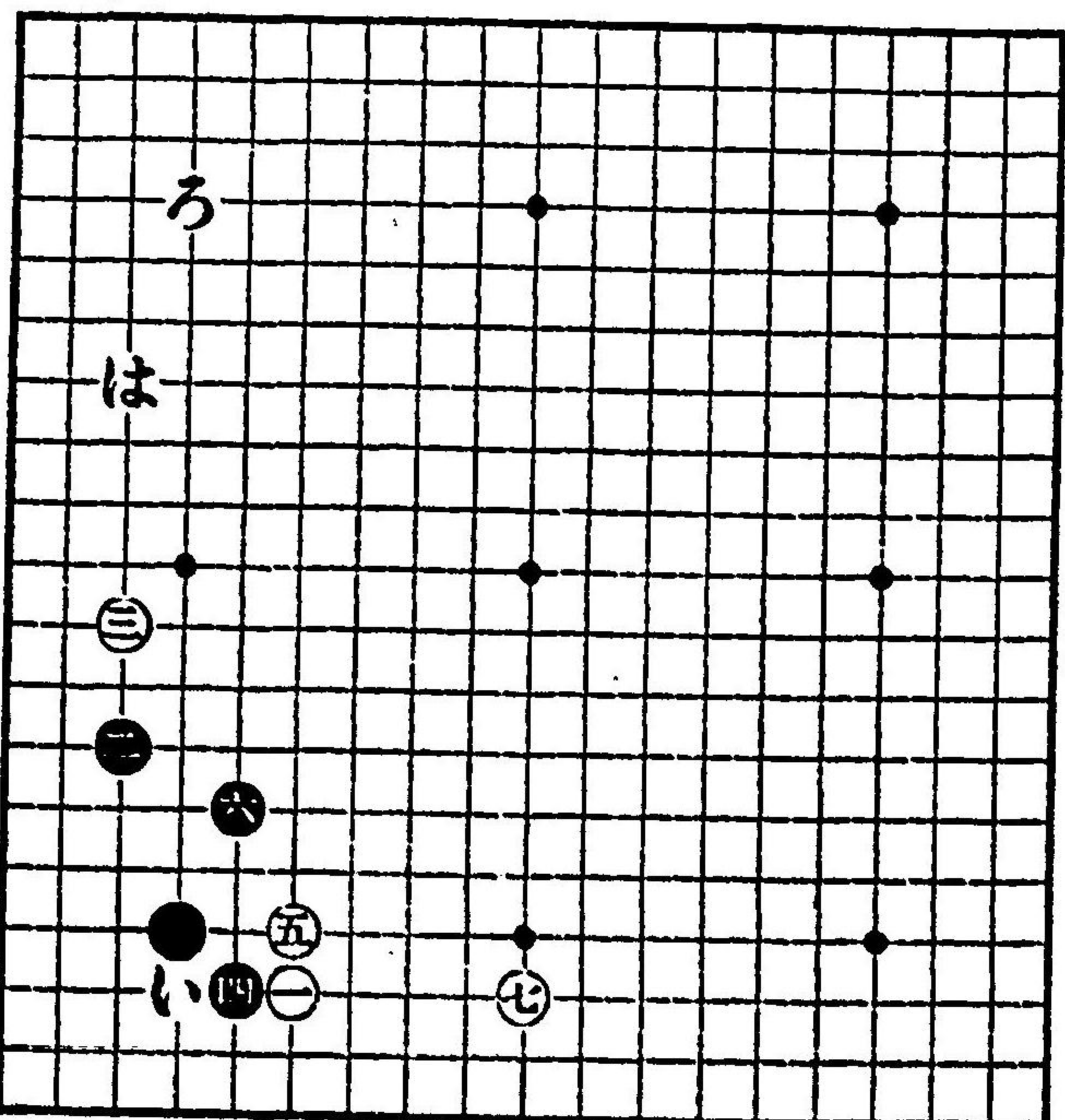
(第九十五圖)



第九十六圖からは、黒④の手よりの變化であるが、黒が④と尖み附けた時は、白は必ず⑤と立つべきもので、碁が最初の中ならば、見ずにも打つべき所である。なぜならば、若し黒より④の所に跳ねられることになれば、この一隅には、白より手掛りがなくなつて、白は如何ともしやうがなくなるからである。さて黒が④と尖み附け⑤と桂馬するのは、白が⑥の手で他に打てば、⑦の所に來まうといふのだし、又圖の如く白が⑥と打てば、③の石をイチメやうといふ考へで、先づ己れを守るのである。即ち左上隅「ろ」に置石のある場合には、「は」に打つて地を取りながら、③の石を攻めやうといふのである。しかし、大概の場合には、④の手を「い」に締る方がよいので、唯かういふ手も知らねばならぬから、參考として示すのである。

碁會所と醫
者とに迎へ
二人出し

(第九十六圖)

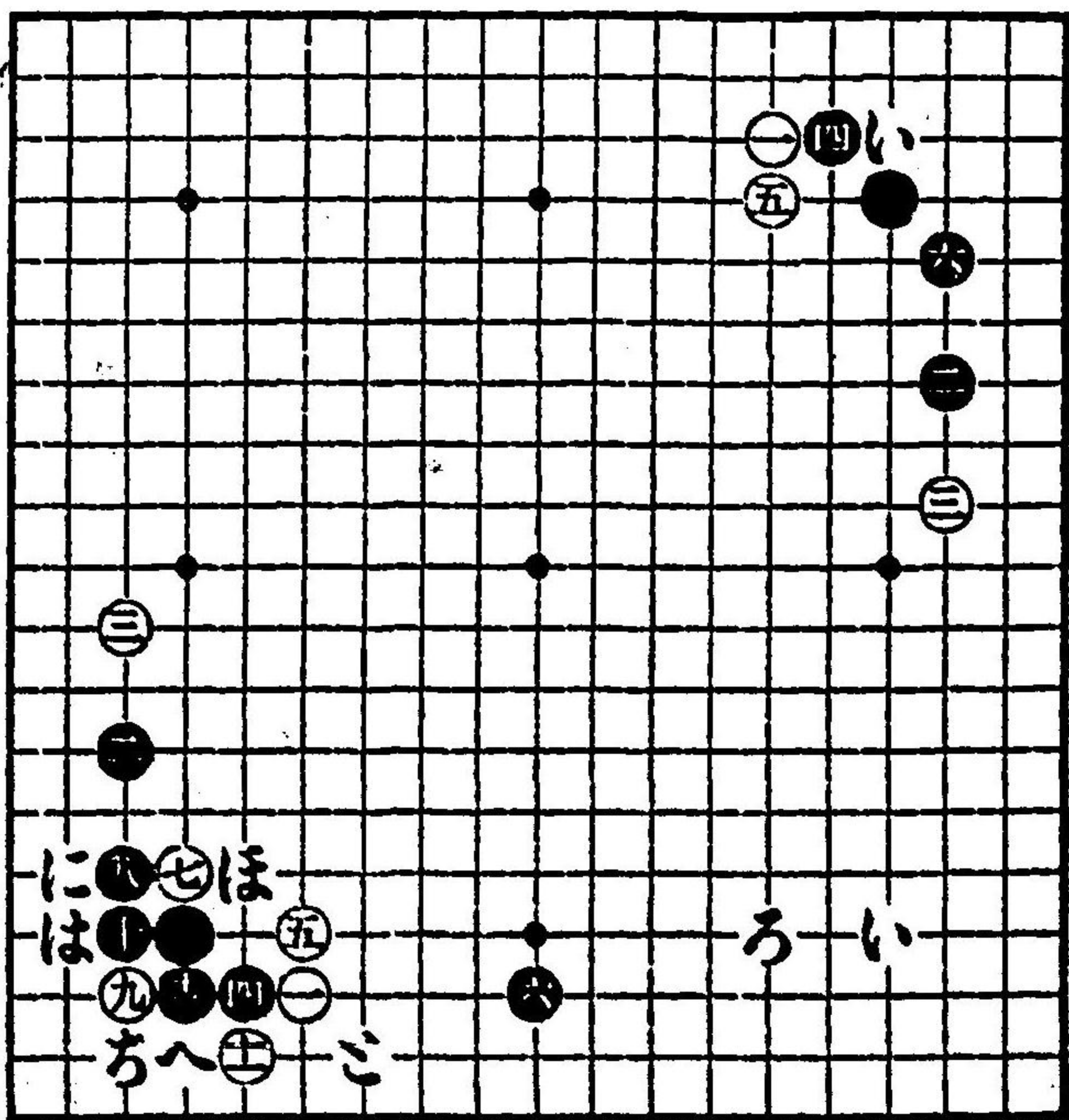


第九十七圖は、前圖①の手の變化であるが、かく④と尖み⑤と打つのは、最初の手ではなくて、多くは中頃に打つ手である。即ち、黒が普通の如く④の手で「い」に捕れば、あたりの白が丈夫であつて、直ぐに⑤の所に打込まれて、攻め立てられるといふ恐れのある場合である。斯る場合には、隅に十五六目の地が出来るのだから、かう打つのが大に宜しい。同じ定石でも、かく時期によつて善悪の差別が生ずるから、よくよく場合を見定めた上で、此處はどの定石が適當であるといふことを、自から判断して打つやうにするのが、いはゆる定石の活用で、最も大切の心掛けである。

第九十八圖は、前圖②の手よりの變化であるが、この②の手は、右下隅に「い」の置石から「ろ」と一間飛のある時は、跳へ向きの善い手である。ナゼならば、④⑤と夾んであると、白より容易に隅に打込むことが出来ないからである。若し斯る場合に白が隅に打込めば、隅に小さく活きる代りに、①②の石が危くなるから、自然打込めない道理になる。又「い」ろ」に黒石のない時でも、場合によつては⑥と夾んでもよい。とにかく⑥と夾むのは、強硬の手であつて、かういふ手を打つくらゐでないといふ方も附かなければ、禁も上らない。

白が⑦と附けておいて⑧と打込んだのは、その手順が大

(第九十七圖)



(第九十八圖)

に宜しい。若し單に⑧の所に打込めば、黒は⑨と受けずに⑩の所に下る手順になる。さすれば、白は中で活きる代りに、外の二子を攻め立てられるから、白は一向つまらない。さればとて、白が④と打込んで黒に⑤の所に下られた時、⑥と附ければ、黒は⑦と受けずに、⑧の所に伸び、白⑨に押せば「は」に伸び、白「に」に抑ふれば「ほ」に跳ね出す手があるので、白は大に困却する。又白が「に」に抑へずに、「ほ」の跳ね出しを防げば、黒は「に」に渡つて仕舞ふ。これ則ち、⑨と先きに打込んで、⑦と附けるのは、白の無理であることを證するものである。けれども、知らなければ、矢張り騙されるから、よくよく覚えて置かねばならぬ。

黒⑩は止むを得ぬ手で、若しこの手で⑩の所に下れば、白に⑪の所に切られて、白の註文通りになるから、その結果は面白くない。黒⑫の手は、場合によつては「へ」に跳ね出すこともあるが、⑬と夾んである時は、隅の如く打つて、追追に攻めるのが宜しい。

白⑬は、直に「へ」に出で、黒に「ち」に切らせるのが定石であるけれども、斯る場合は、ことによると「と」に掛懸いで、「ち」の下りを見て、活きやうとするところもあるから、打たずに置くのがよい。定石だといふので餘り急いで「へ」に出で置けば、黒に「と」と覗かれた時、白は一眼もないことになる。然るに、「へ」に打たずに置けば、黒は容易に「と」に覗くことは出来ないから、半分以上眼形があるものと見ることが出来る。だから、黒を攻めるにしても、自から逃げるにしても、このままで置く方が都合が宜しい。この邊が、最もコツのあり、味のあるところなので、へボ禁には容易に打てないところである。

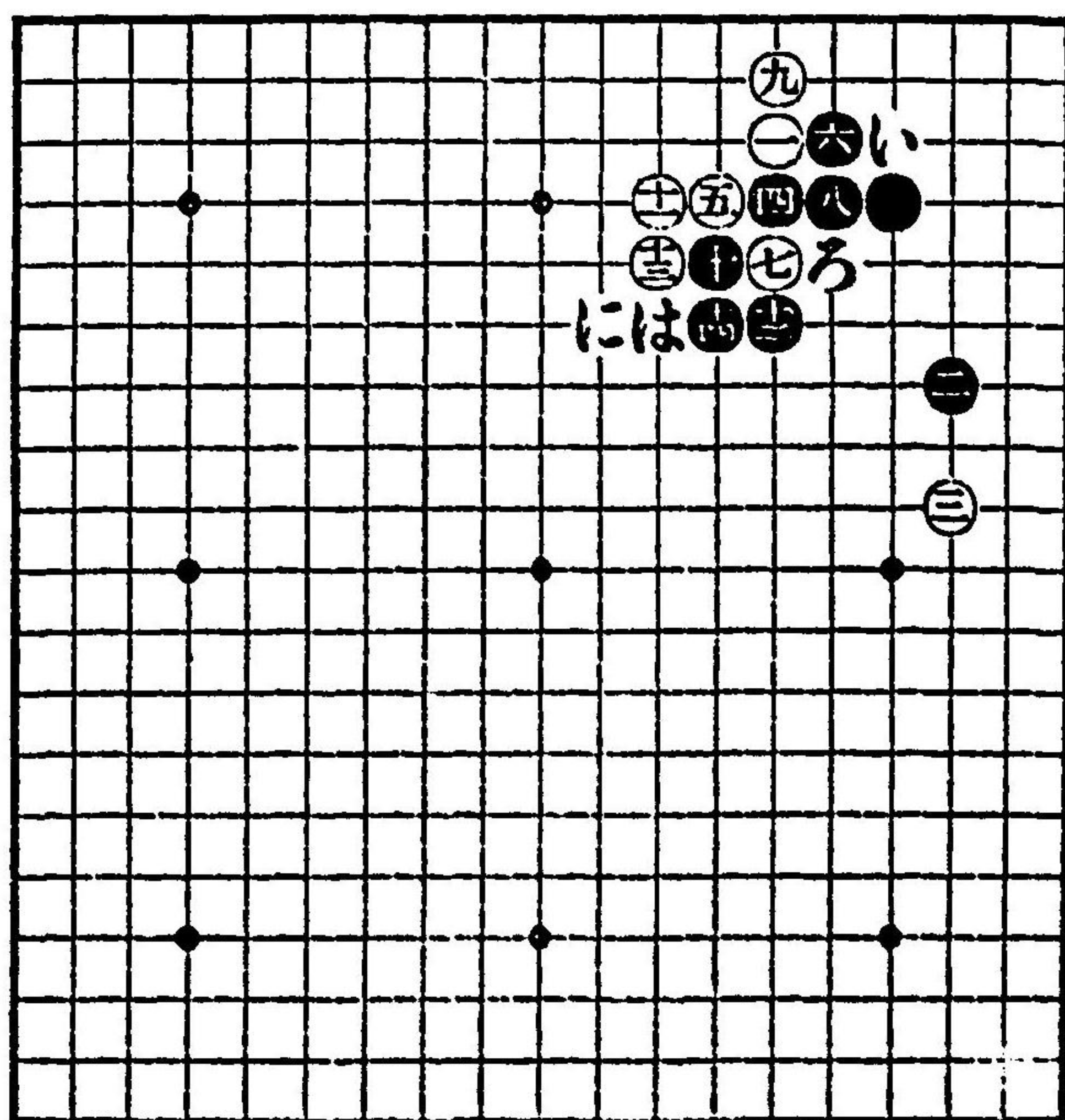
けさは早や今年のとしの明烏

舞ふ白鷺にうちましりつつ

(福羽美静)

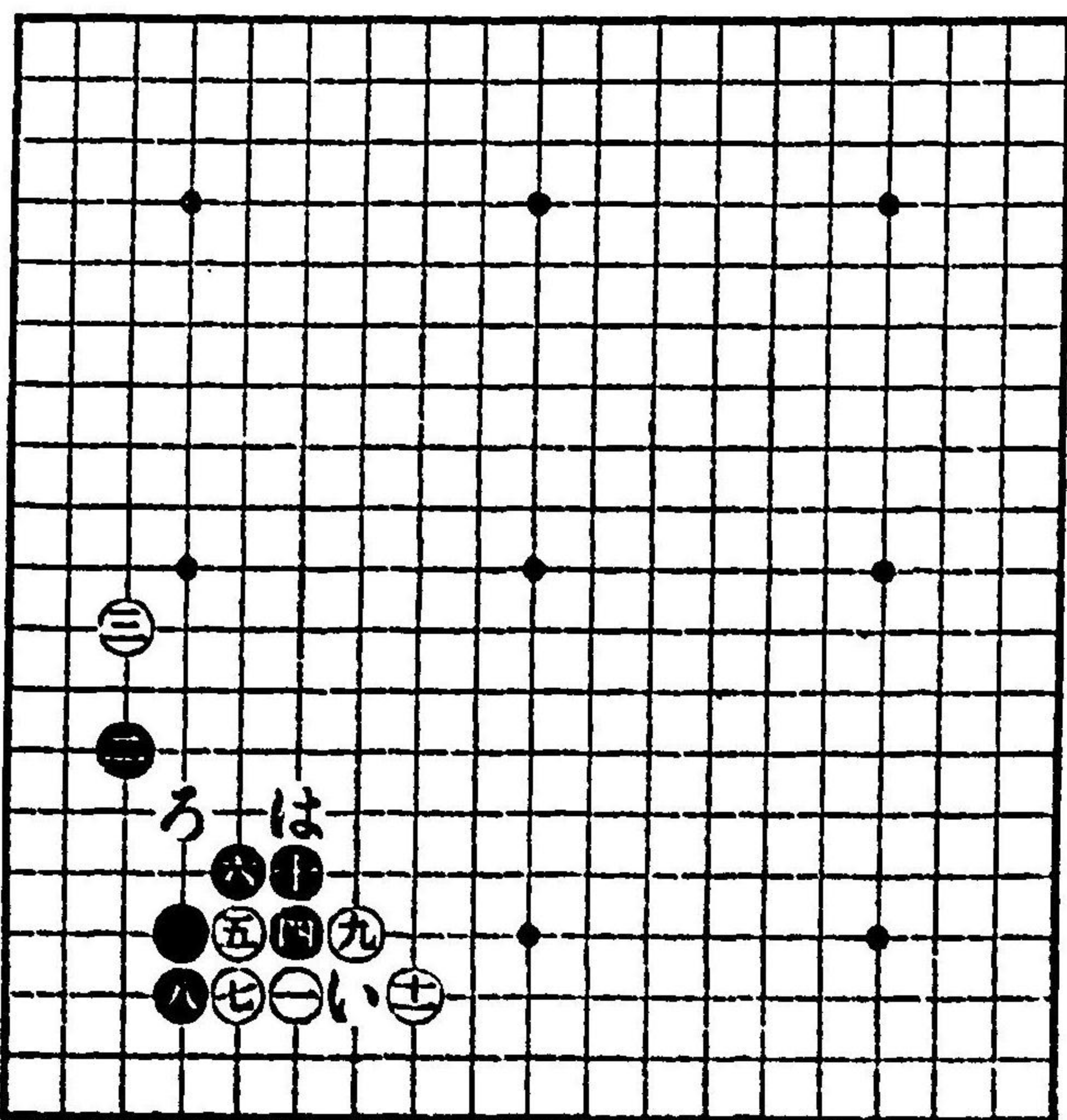
第九十九圖は、黒④の手よりの變化であるが、この④の手も、最初に打つ手ではない。則ち、②と大桂馬に打つ手と、④と附ける手とは、全然意味が違ふのである。若し黒がこの手で「い」に稀れば、白より直ぐに打込まれて、白にいろいろと趣向せられて面白くないから、早くこの隔を固めたいといふ場合に打つ手である。だから、この場合は⑥と抑へるのがよい手で、⑦に伸びては意味が違つて仕舞ふ。黒④も亦善い手で、普通は「ろ」に一手を抜取るのだけれども、この場合は、⑤の石があるから、繼ぐ方が利益である。即ち、後に黒が「は」に抑へるものとすれば、その時に大變工合が違つて来る。といふのは、若し④の手で「ろ」に取つてあると、黒が「は」に打つた時、白は「い」に跳ねて来るが、圖の如く④と繼いでであると、白は跳ねることが出来なくなるのである。

(第九十九圖)



第百圖は、前圖白④の手よりの變化であるが、この④の手は面白い手である。但し、黒が⑥の手で⑦に切れば⑥に伸び、黒が⑧に繼いだ時、⑨に掛けて④の石を四丁に取り得る場合でなければ、面白くないと覺えて置かねばならぬ。さて白が⑤と割込んだ時は、黒はよくよく四丁の關係を見て、果して④の石を四丁に取られる場合には、⑥と圖の如く抑へるのが宜しい。又若し白が④の手で⑤に飛んだならば、黒は⑥の手で⑦に出で、白に「い」に繼がせて「ろ」に掛繼ぐがよい。さすれば、右方が上方の何れかの白を攻める順序となる。

尤も前述の通り、白が④の手で⑤に飛び、黒が⑥の手で⑦に伸び、白に「い」に繼がせて「ろ」に掛繼いだ場合に、白が⑧の所に切るのはウツ手であるが、若し切つて來たとすれば、黒は「は」に跳ねて、二子を棄てるつもりで打たねばならぬ。



(第百圖)

第百一圖は、**四**の石を**四**丁に取れぬのに、白が間違へて**四**と割込んだ場合で、白は無論悪い譯であるが、黒の受方を示すために出したのである。そこで、**四**の如くなつた時、白が「**ハ**」に跳ねたならば、黒は「**ル**」に跳ね返し、白が「**ハ**」に伸びれば「**ハ**」に尖んで打つがよし、又白が「**ハ**」に跳ねずに、「**ハ**」に尖んだならば、黒は「**ハ**」に附けて打つがよし、又白が**四**の手で「**ト**」に並んだならば、黒は**四**の手で「**チ**」に尖み、白が「**リ**」に飛べば「**ぬ**」に掛り、「**ル**」の覗きを狙つて手強く打つがよい。さすれば、黒の方が大に宜しい。

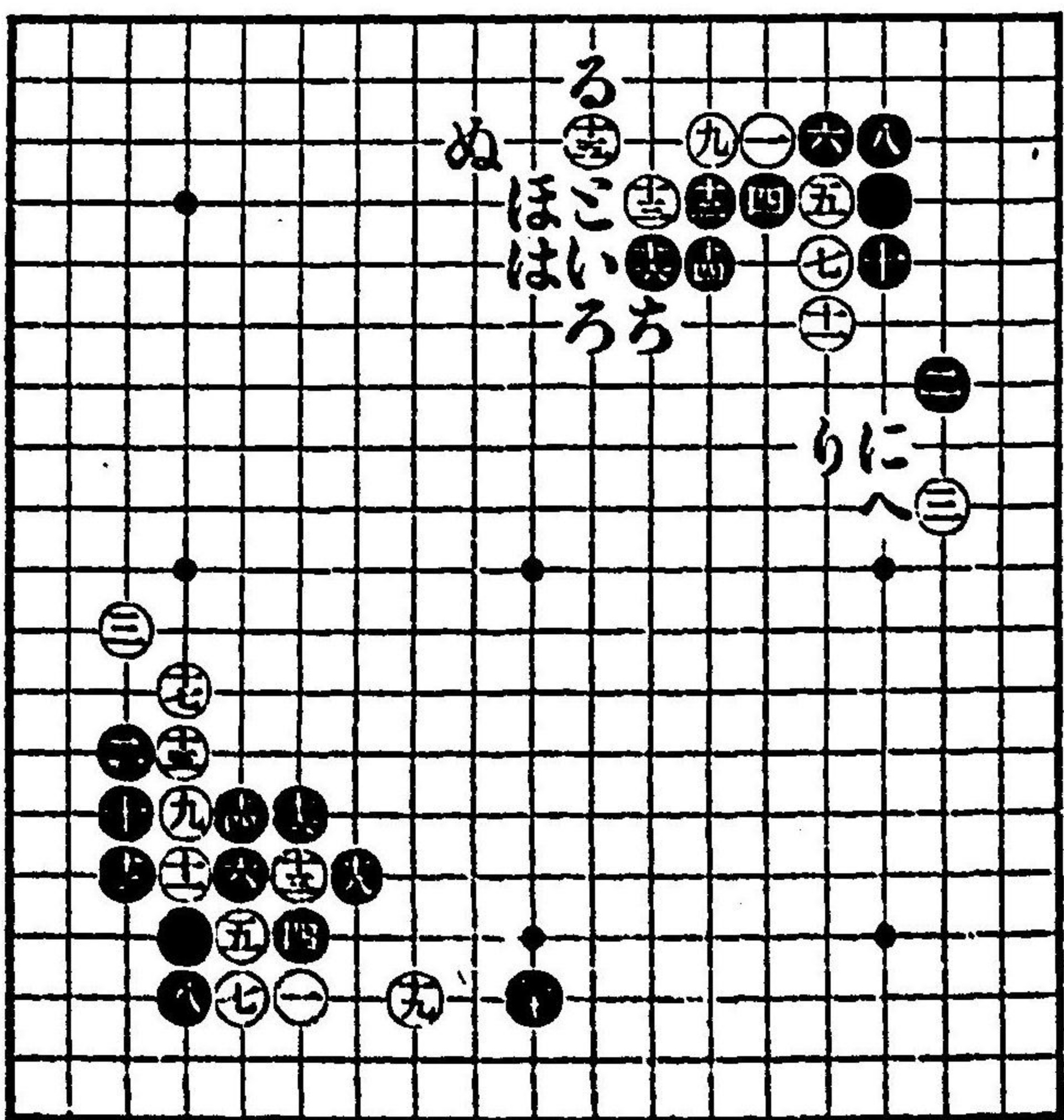
第百二圖は、白**五**の手よりの変化であるが、この手は早過ぎて無理である。圖の如くなれば黒は十分である。

碁の助言

いひたくなると

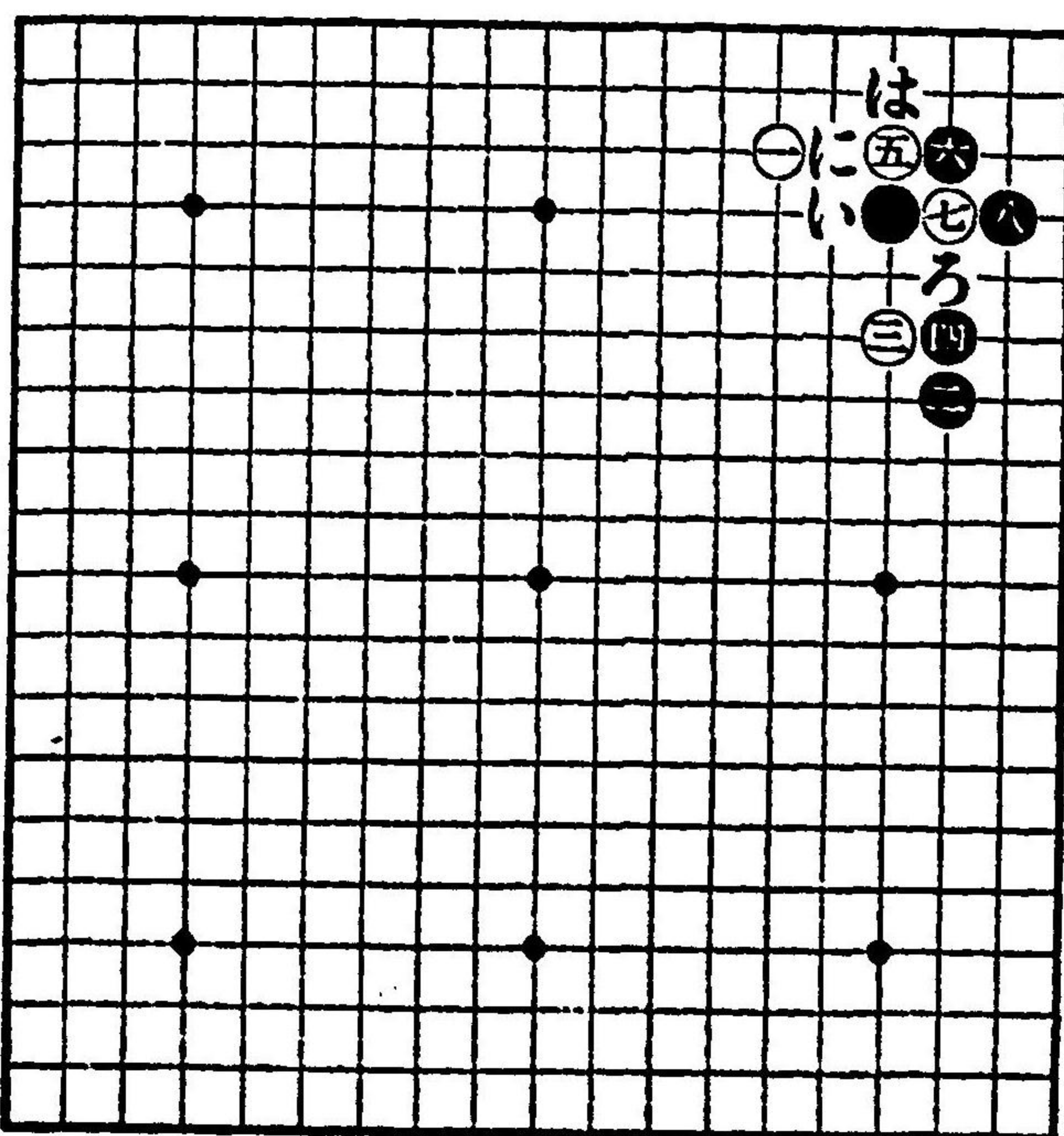
庭へ立ち

(第百一圖)



(第百二圖)

(第百三圖)



第百三圖における白**五**の趣向は、つまり、黒に**四**の所に捕られては**工**合が悪し、さりとて、**三**の手で**四**の所に入つても、**一**の白の**工**合が悪くなるといふ場合に試みる手で、圖の如く**七**と切つて**八**と應じさせ、先手を取つて他の方面に打たうといふのであるが、この白は極めて軽いから、場合によつては随分面白い。斯る場合には、黒は圖の如く受けるより仕方がないが、黒も亦決して損といふことはない。

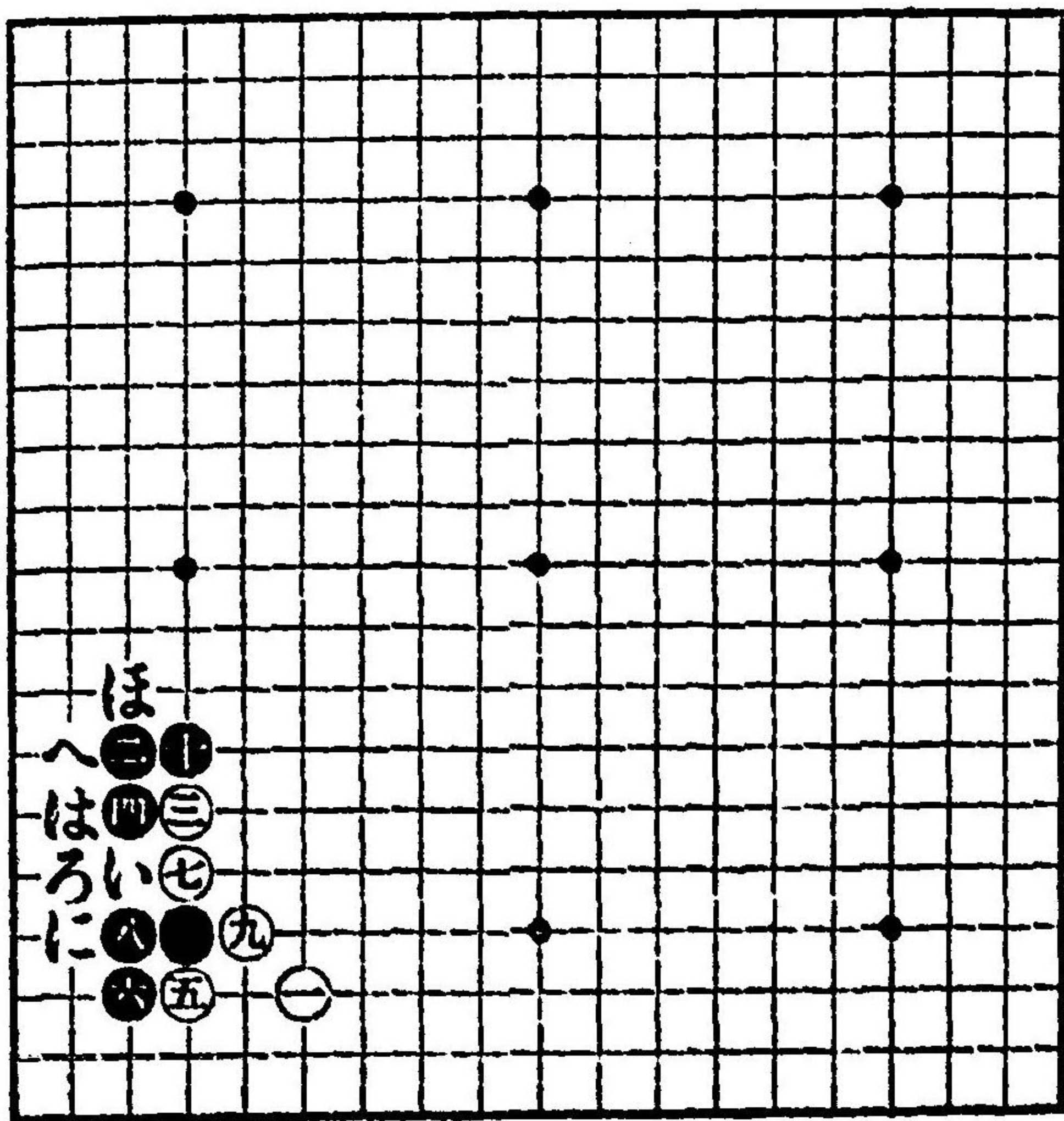
かくて白は、碁によつては普通「**ハ**」に跳ね、黒に「**ル**」に取らせて打つ場合もあるが、若し終局間際までこの儘になつてゐる場合には、「**ハ**」に跳ねずに、單に「**ハ**」に下る手もあるといふ譯で、かういふ意味で打つこともあるから、参考のために掲げるのである。又黒がこの白を攻めるには、先づ「**ハ**」に跳ね、白が「**ハ**」に繼いだ時、「**ル**」に一子を取つてゐるのが肝要で、かうした後でない時、白を攻める譯にはゆかないし、かく攻めるのが得の手で、又本手であるから、忘れてはならぬ。

第百四圖は、前圖白⑤の手よりの變化であるが、この時黒が①と繼ぐのは善い手である。初學の中は、とかく②の手で「い」に受け、白に先手で④と抑へられるが、餘程損であるから、圖の如く①と繼いで、先手を取るに限る。①と繼いで置きさへすれば、「い」に繼ぐ必要がなくなつて来る。黒②の曲りも亦大に善い手で、これを打つて置かねと、白に「い」に出られ、「ろ」に渡れば「は」に切られるから、黒は「は」に繼ぐより外に手が無い。さうすると、白に「ほ」に附けられて、⑥に打てば「へ」に渡られるし、「へ」に打てば⑦に抑へられて、たとひ他に一手くらゐ打つても、面白くないことになる。だから、斯る場合には、⑧と守るのが本手で、黒は十分である。

白石は

五百手程も

先きが見え



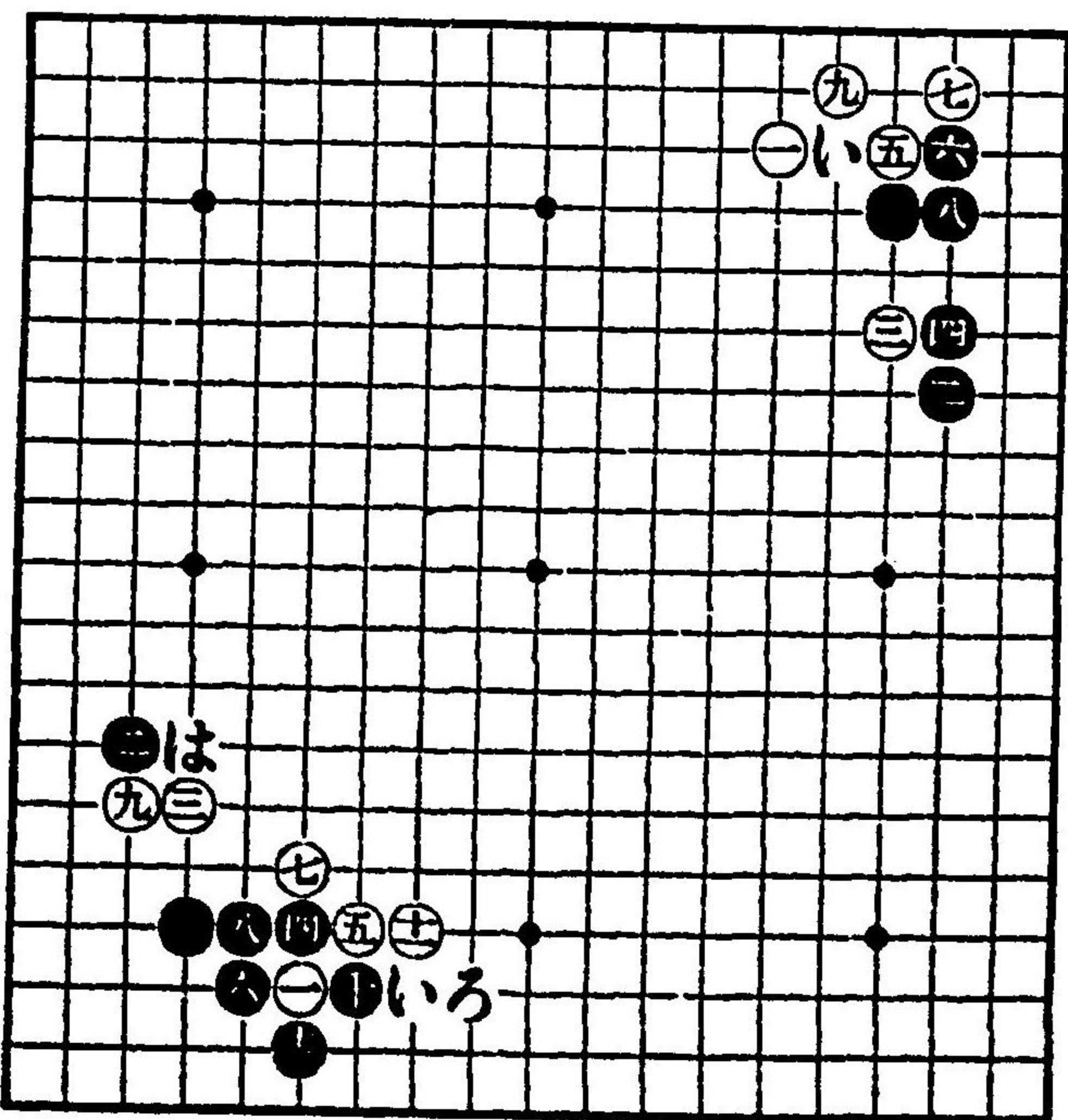
(第百四圖)

第百五圖は、前圖白⑤の手よりの變化であるが、この場合にも、矢張り①と繼ぐのが善い手である。初學の中は、とかくこの手で「い」に打ちたがるけれども、後に白の眼を取る場合に、大に相違があるから、單に①と繼いで先手を取るに越したことはない。

この振替りは、白が③と打ち、黒が④と受けてゐるだけ、黒の方が優つてゐる。

第百六圖は、前圖黒④の手よりの變化であるが、矢張り前圖のやうに、⑨の所に應じてゐる方が、置碁としては穩當である。しかし、對局者がいつも同じで、一度③と打たれて、これを受けるのが残念であるといふやうな場合には、白の膽を拉ぐために④と附けて變化を試みるのも亦面白い。白が⑨の手で⑩の所に打てば、黒は⑪の所に受けて、黒の註文通りになるから、白も亦變化して、⑫と入つたのである。

黒③と一子を抜取るのは善い手である。初學の中は、とかくこの手で「い」に押したがるけれども、白に「ろ」に抑へられて、つまり後手になるから、早く③と一子を抜取つて、後に「ろ」に飛ぶのがよい。それに、白が若し他に打てば、この隅は既に堅くなつてゐるから、「は」に押し、又②の石を助けてゆく手もあるが、その場合に、③と取つてゐる手が大に善い手になる。



かういふ變化は、前にも述べた通り、置碁としては好ましい手ではないが、碁の半過ぎに出來た場合などは、白(第百五圖)

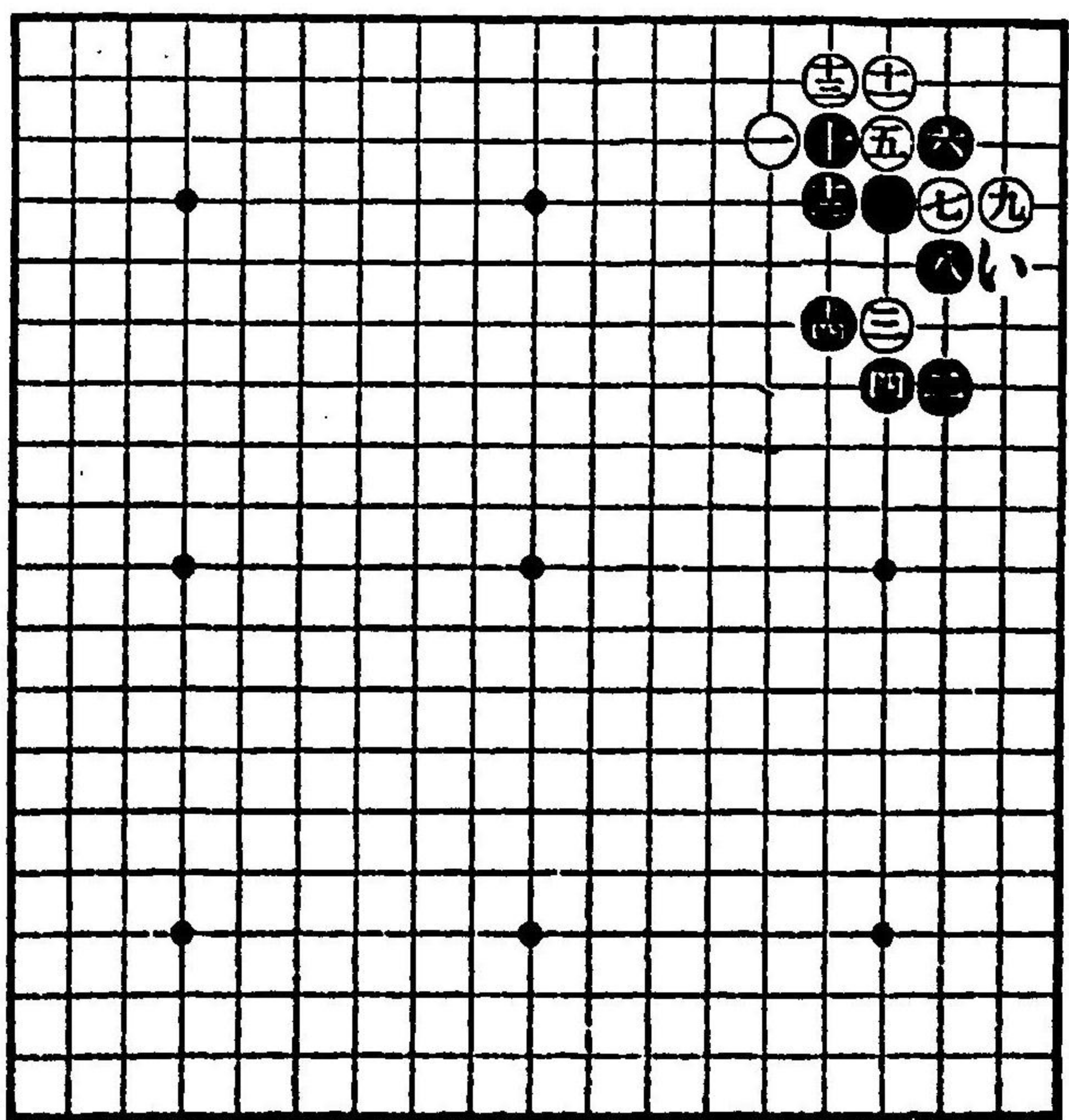
の度膽を抜いて面白い手であるから、一通り心得ておかねばならぬ。

(第百六圖)

第七七圖は、黒④の手よりの變化であるが、場合によつては、かく打つても宜しい。又黒は⑥の手で、單に⑦の所に下つてもよい。黒が⑤の所に下れば、白は⑧の所に抑へるくらゐのものであるが、さすれば、黒は③の所に打つのである。その時、白が⑩の所に繼げば先手になるし、又手を抜かれたところで、③と④と交換してあるのは、黒の利益であるから差支へはない。

さて又圖の如く②と打つて、白に⑦と切られた時は、②と打つて差支ない。②までの結果、黒は隅に損をして居るが、この損は頗る小事で、中が厚くなるから何んでもない。又黒は⑧の手で⑤の所に跳ね、白が⑨の所に繼いだ時⑨の所に跳ね、白が⑩の所に伸びた時、「⑤」に渡つてゐても打てる。いづれにしても、黒が五分以下の別れになることは滅多にない。

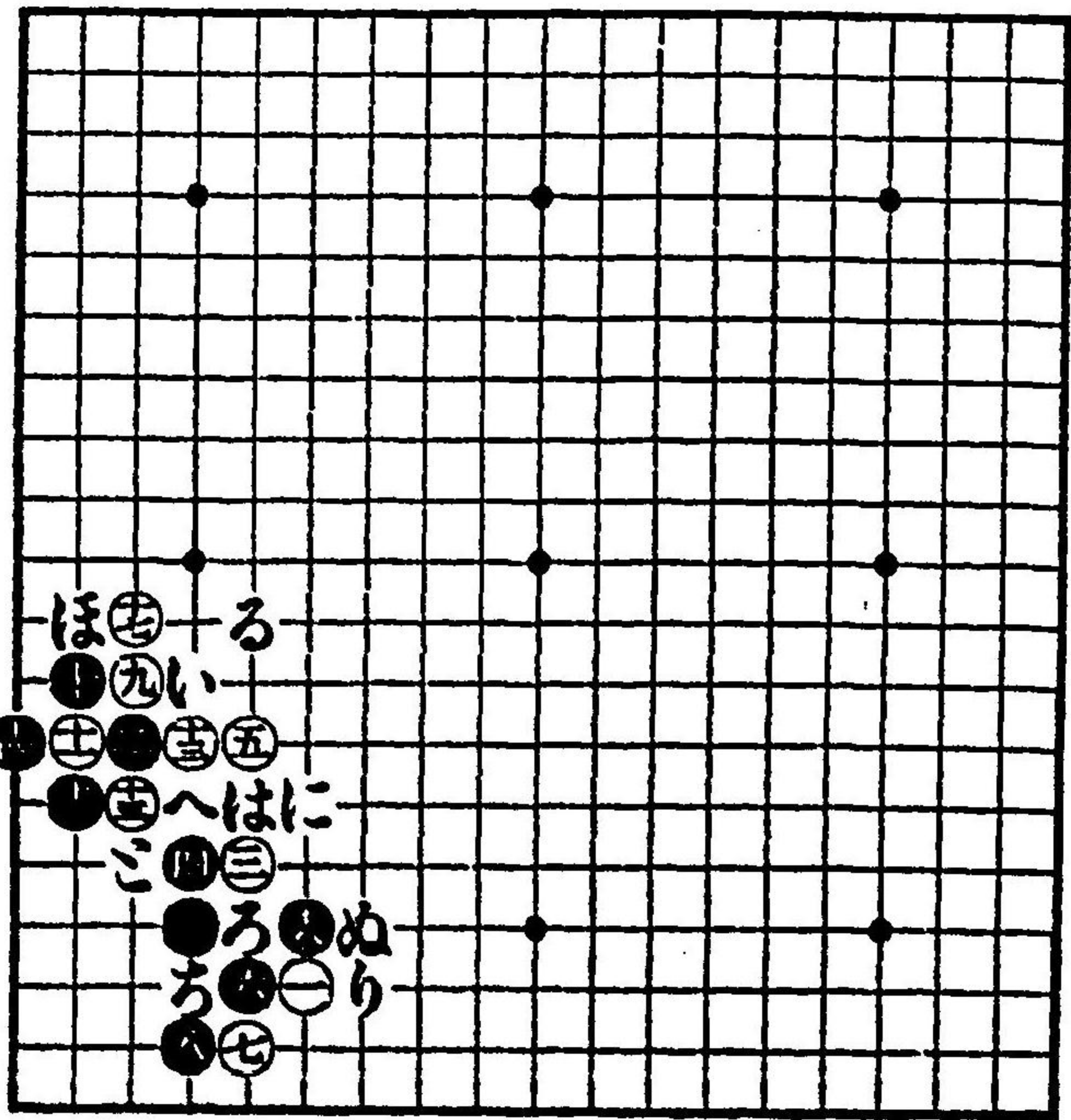
お呼出しまては
碁盤で境論



(第七七圖)

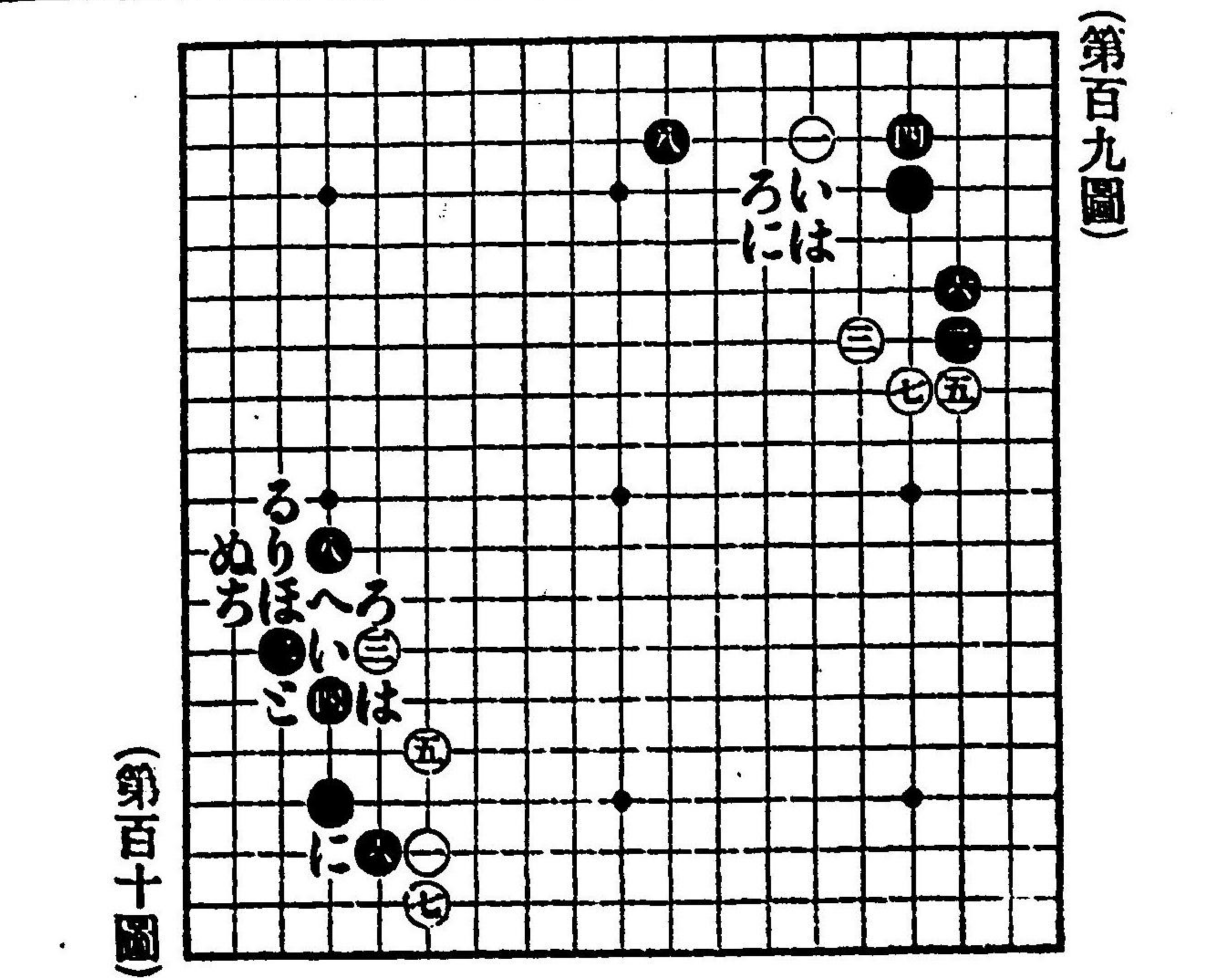
第八八圖において、白が③⑤と飛ぶのは、右方に大模様を作らうといふ意で、いづれ半頭で打つ手であるが、この時黒が④と尖附けるのは善い手である。尤も黒は、この手で「い」に突んでゐても差支へはないが、「ろ」に出て白が⑥の所に抑へた時「は」に跳込み、白に「ぬ」に抑へられるなどは、愚手の骨頂であることを忘れてはならぬ。なぜならば、白は黒のさう來るのを待つてゐるので、とうせこの劫は、黒に勝てぬ劫だからである。

黒④は善い手で、とかく初學の中は、⑤の所に繼ぎたがるが、先手に「ほ」に抑へられるから大に悪い。黒⑤の繼ぎも、亦善い手である。よく「へ」に切つて劫にするのを見受けるが、劫に勝つたところで一手損であるから、繼ぐのが本手である。黒⑥も亦善い手で、總て斯る場合には、かく跳出すのが本手である。その時白が若し「へ」に繼げば、黒は「と」に抑へ、白が「ろ」に切れば「ち」に繼いで、恰度⑦に切つた道理に當り、この⑧の切りは、この場合最も善い手になるのである。されば、この⑨の石は、飽迄逃げることを心得ねばならぬ。白が若し「り」に伸びれば「ぬ」に押しして戦ふのである。かくて後に、黒より「る」に覗くやうな碁になれば、黒の大勝利は疑ひない。



⑤ノ所ツグ
(第八八圖)

第九九圖は、白(三)の手の變化であるが、この手は一寸面
 白い手である。この時黒が餘りあわてて應答すれば、意
 外に凝り固まることになる。ゆゑに、置碁に對する白の
 手としては、餘程面白い手である。しかし黒は、(四)と締
 つて、知らぬ顔をしてゐるのが一番宜しい。なぜならば、
 (四)と締つてゐるのは、紛れもなく、變化も少ないからで
 ある。黒(五)も亦善い手で、これで隅は十分固まつて仕舞
 つたから、先手で何處に打つのも自由であるが、若し碁
 が最初の中ならば、(六)と打つのが宜しい。初學の中は、と
 かくの(六)の手で「ハ」に附け、白「ろ」の時「は」に伸びて打
 ちたがるが、白の(三)(四)(七)は非常に堅い石であるから、「ハ」
 は」と出掛けたところで、攻める譯にはゆかない。さり
 とて(一)及び「ろ」の白も、軽い石であるから、これ亦攻め
 るところではない。さすれば、黒はダメを歩いたことにな
 る。然るに、(六)と夾んでおけば、白は「は」若くは「ハ」
 に逃げるであらう。その時黒は先手を取つて、(六)の石の
 工合の善い所に打てば、今度は反對に、白が堅い石と堅
 い石と連絡した結果となつて、最初の白の趣向は、全然
 黒に破られた道理になる。して見ると、黒は十分の碁勢
 といはねばならぬ。



り、白が「ろ」に出れば(六)の所に飛び、又白が「ろ」に出ずに「は」の方に
 出れば、黒は「ハ」に下つても、「ろ」に跳ねて
 めてもよい。
 白(四)は已むを得ぬ手で、若しこの手で「は」に附ければ、黒は「ハ」に跳出し、
 白が「ろ」に切れば「と」に繼いでゐて宜し
 い。しかし、これは「ハ」に跳出した石を四丁に取られない時のことで、
 若し四丁に取られる場合には、白が「は」の
 時「ち」に跳ね、白が「リ」に伸びれば「ぬ」に泳ぎ、白が「ろ」に出た時「は」
 に押して打つことを忘れてはならぬ。又黒が
 「ち」に跳ねた時、白が「リ」に出ずに「ぬ」に抑ふれば、黒は「ハ」に跳出し、
 白が「リ」に繼いだ時「ち」に繼いで打つ
 のである。

取舍者碁之大計。轉戰之後孤碁隔絶。取舍不明患將及矣。蓋
 施行決勝謂之取。棄子取勢謂之舍。若内足以豫奇謀。外足以
 降形勢。縦之則莫禦。守之則莫攻。如是之碁雖少可取而保之。
 若内無所圖。外無所援。出之則愈窮。而徒益彼之勢。守之則愈
 困。而徒壯彼之威。如是之碁雖多可舍而委之。不以猶豫而害
 成功。不以小利而妨遠略。

(空玄碁師の一考)

第百十一圖は、前圖白(四)がの手よりの變化で、かく打つのが、白としては本手であるが、黒は大した差支へを感ずる譯ではない。即ち黒は先づ(七)と附け、(八)と先手を取つて、(九)に打つといふ手順を運べばよいのである。かくて黒は、後に「い」に切る手や、「ろ」に夾んで攻めるといふ手があるだけ、前圖に比べると優つてゐる譯で、黒は十分である。

いかにして

何れともなき

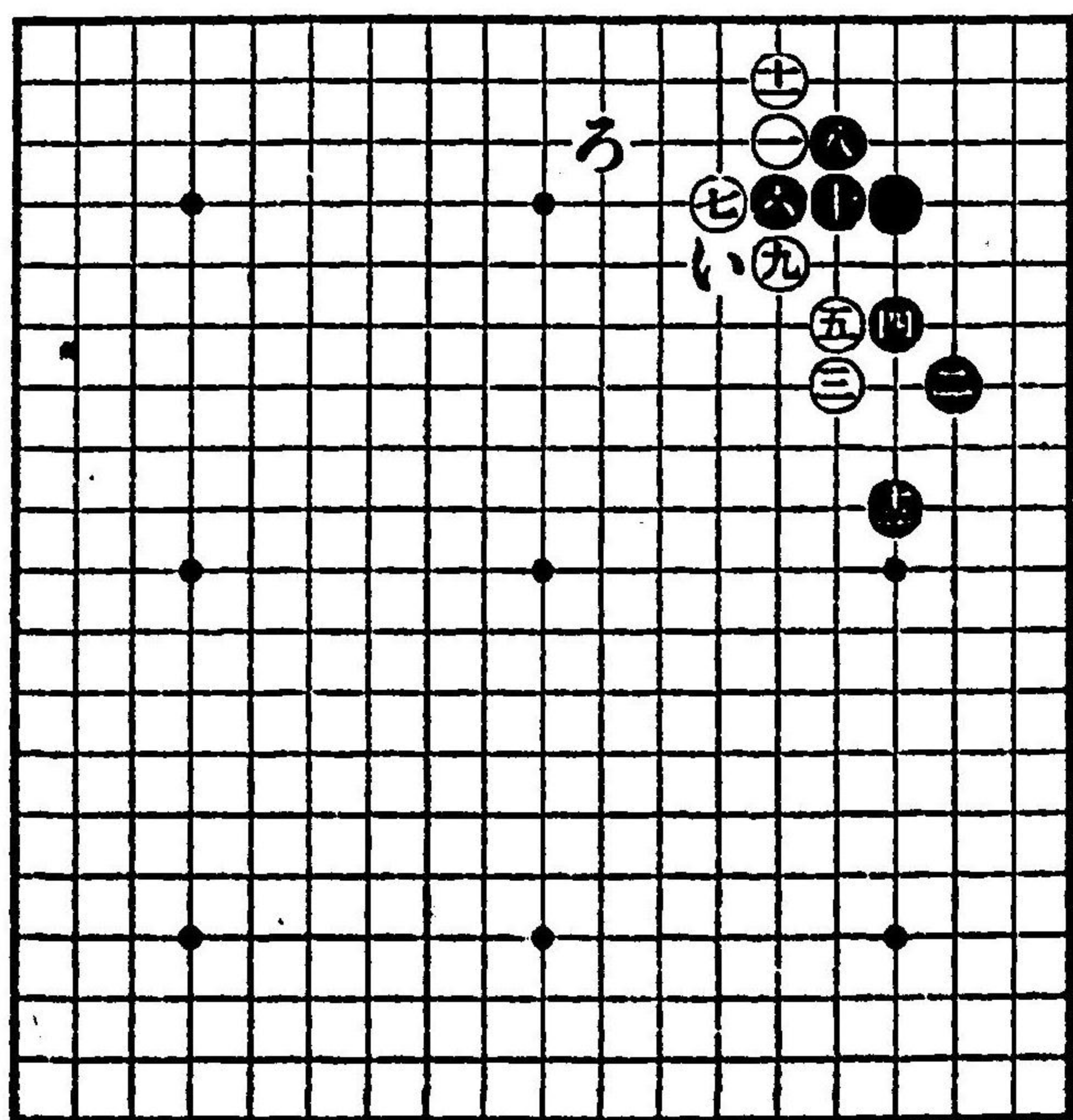
みだれいしを

思ひ乱いて

とりなほしけん

(頼屋一舟經)

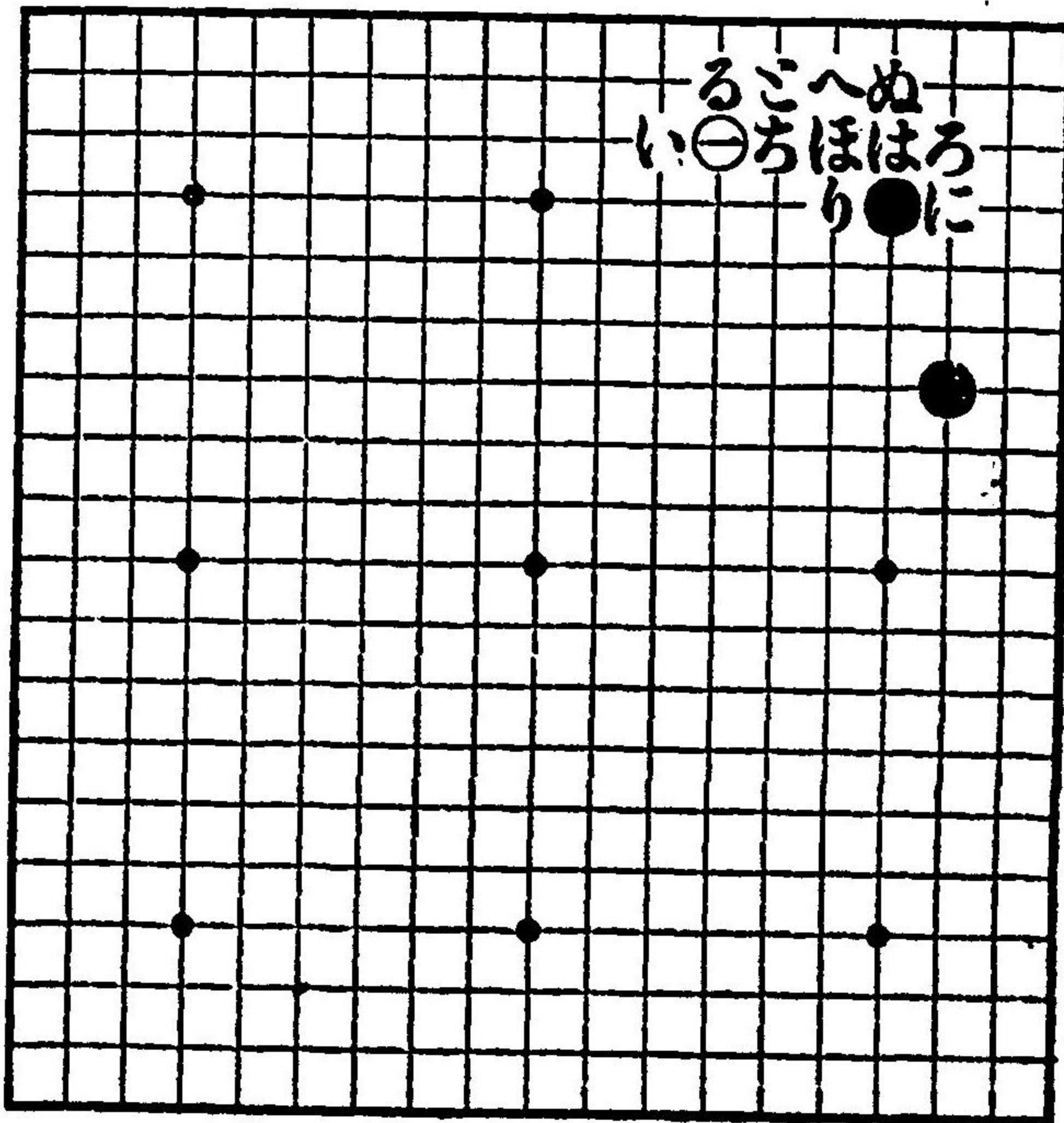
(第百十一圖)



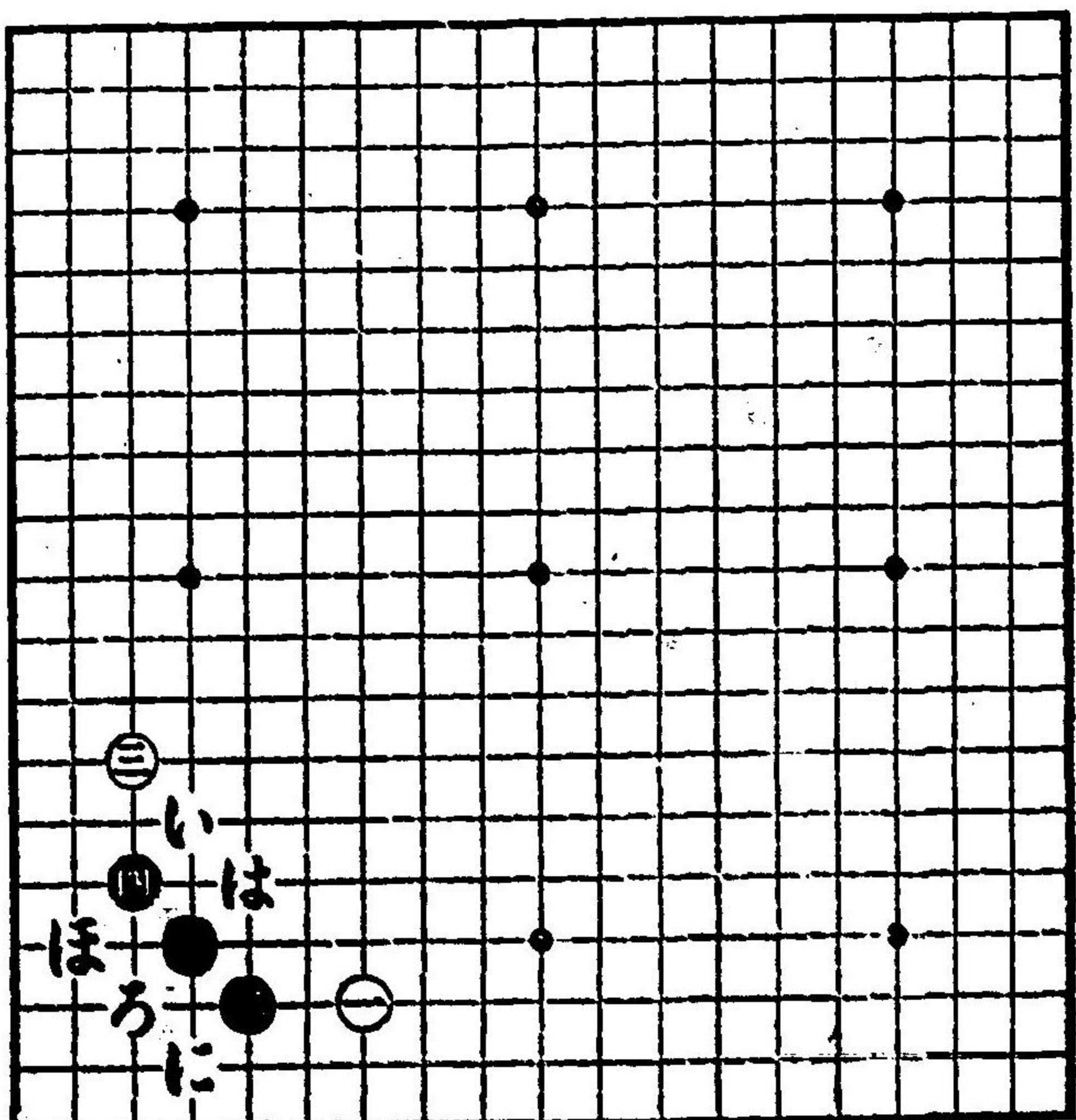
ば、黒は「ぬ」に切つて隅の二子を取ることが出来るからである。然るに、白が(一)と大桂馬に掛つて在るときは、(第百十二圖)

白の「小桂馬掛り」に對する、黒の「大桂馬受手」の變化は、以上で大方説き盡したから、これより順序として「大桂馬掛り」に移るが、白が大桂馬に掛るといふのは、全體「掛り」としては、餘り置石に響かぬ手である。それゆゑ、白は他の關係上、趣向で打つのは格別、常に打つべき手でないと共に、黒も亦、あながち受けるにも及ばない。則ち他の大場に打つたところで、置石を攻め立てられる氣遣ひはないが、置碁としては、第百十二圖のやうに、(一)と大桂馬に受けてゐても、毫も差支へのある譯ではない。又白は、時に(一)の手で「い」に大桂馬に打つこともあるが、然る場合には、黒は尙更手を抜いて差支へない。しかし、假りに圖の如く(二)と受けたとすれば、白が(三)の所に在るよりは、黒の方が工合がよくなる。ナゼならば、後に白が「ろ」に打込んだ時、白の(四)が圖の如く在る時は、「は」に抑へなければならぬけれども、(五)の手が「す」に在る時は、「は」に抑へるといふ手があるからである。則ちその時白が「は」に出れば「ほ」に跳ね、白「ん」の時「と」に二段跳ねに打ち、白「ち」に切れば「り」に繼いで、黒は「ぬ」に切る手と、(六)の所に跳込む手と、二つ善い手が出るからである。更に精しくいへば、白が「ぬ」に繼げば黒は(七)の所に跳込むし、白が「ぬ」に繼がずに「る」に打て

さうは打てぬから、この差違のあることだけは、よくよく記憶しておかねばならぬ。



第百十三圖は、前圖黒●の手よりの變化であるが、白が大桂馬に掛つた時は、かく受けて少しも差支へないのみか、前圖よりは優つてゐる。或は●の手で「い」に飛ぶやうなものも時時見受けるが、それは中で一番悪い。次に、白が③と掛つて来た時は、④と受けてゐて結構である。後に白が「ろ」に打込んで来たならば、「は」に受けて置くのがよろしい。白を隅に活かしたところで、随つて左右の白が弱くなるから、白にお活きなさいと澄ましていられる。昔のやうに「は」又は「ほ」に打つて、打込んだ白の「ろ」の石を取るのには面白くない。白が「ろ」に打込むのは、活きるために打つのではなく、棄てるつもりで入つたのであるから、しひてこれを取らうとすれば、白に「は」に打たれて、棄てられた時分に味が悪くなるのである。

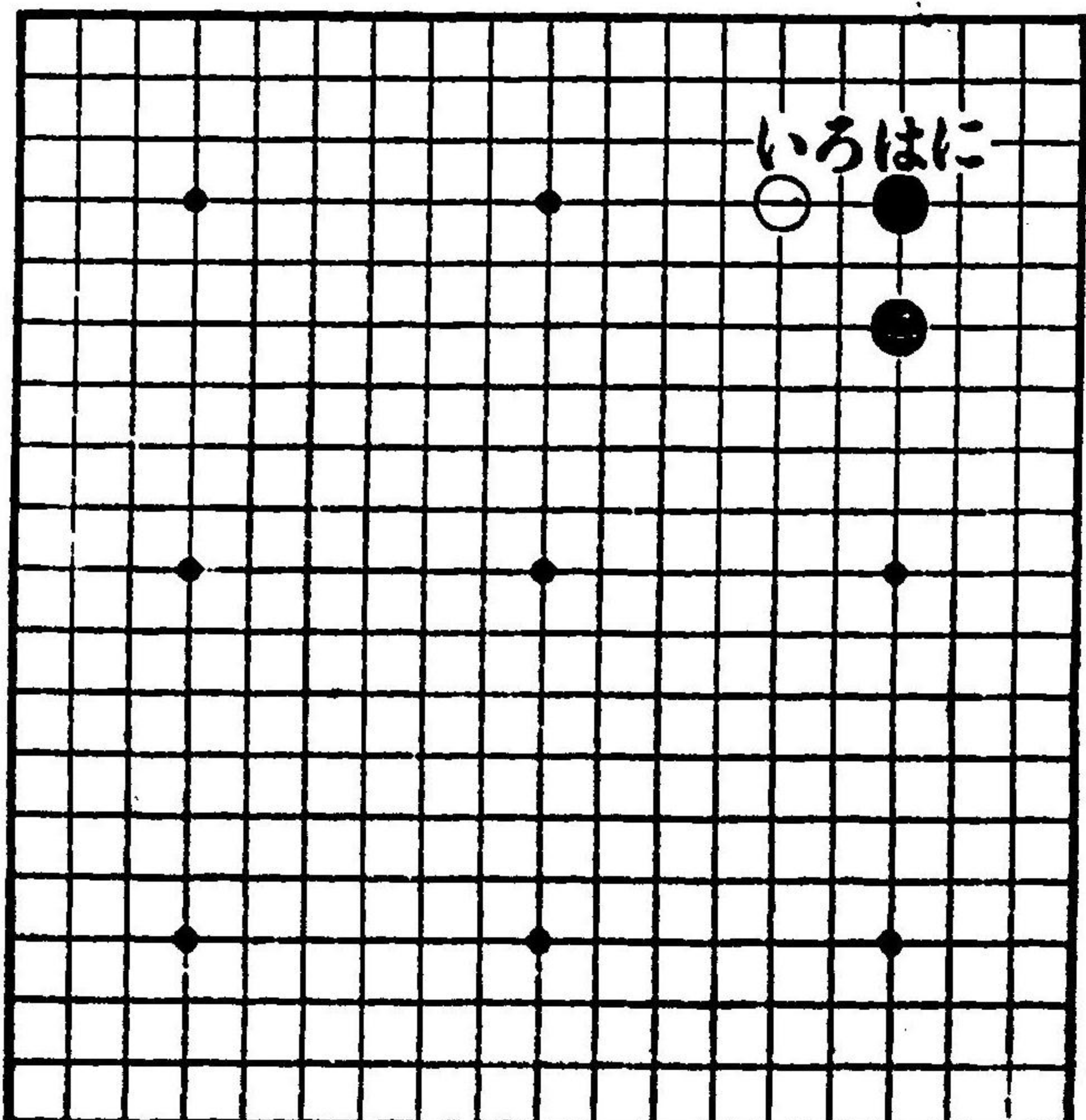


(第百十三圖)

「大桂馬掛り」、「大大桂馬掛り」は、手を抜いてもよいほどに、掛りとしては鈍い手であるから、随つて説明も以上止めて、今度は「一間高掛り」に移るが、この一間高掛りといふ手も、第百十四圖のやうに、黒に●と受けさせて、先手を取つて他に打たうといふ、趣向のある場合に打つ手であつて、白が最初に○と掛る手は、殆んどないといつてもよろしい。しかし、白が○と一間に高く掛つて来たとすれば、黒も亦一間に●と高く受けるのが一番宜しいので、黒は十分といはねばならぬ。或は●の手で「い」に附けたり、「ろ」に突んだりする人もあるが、それは悪い。なぜならば、白より「は」に附ける手もない手であり、又「は」に打込む手は、尙更ないからである。

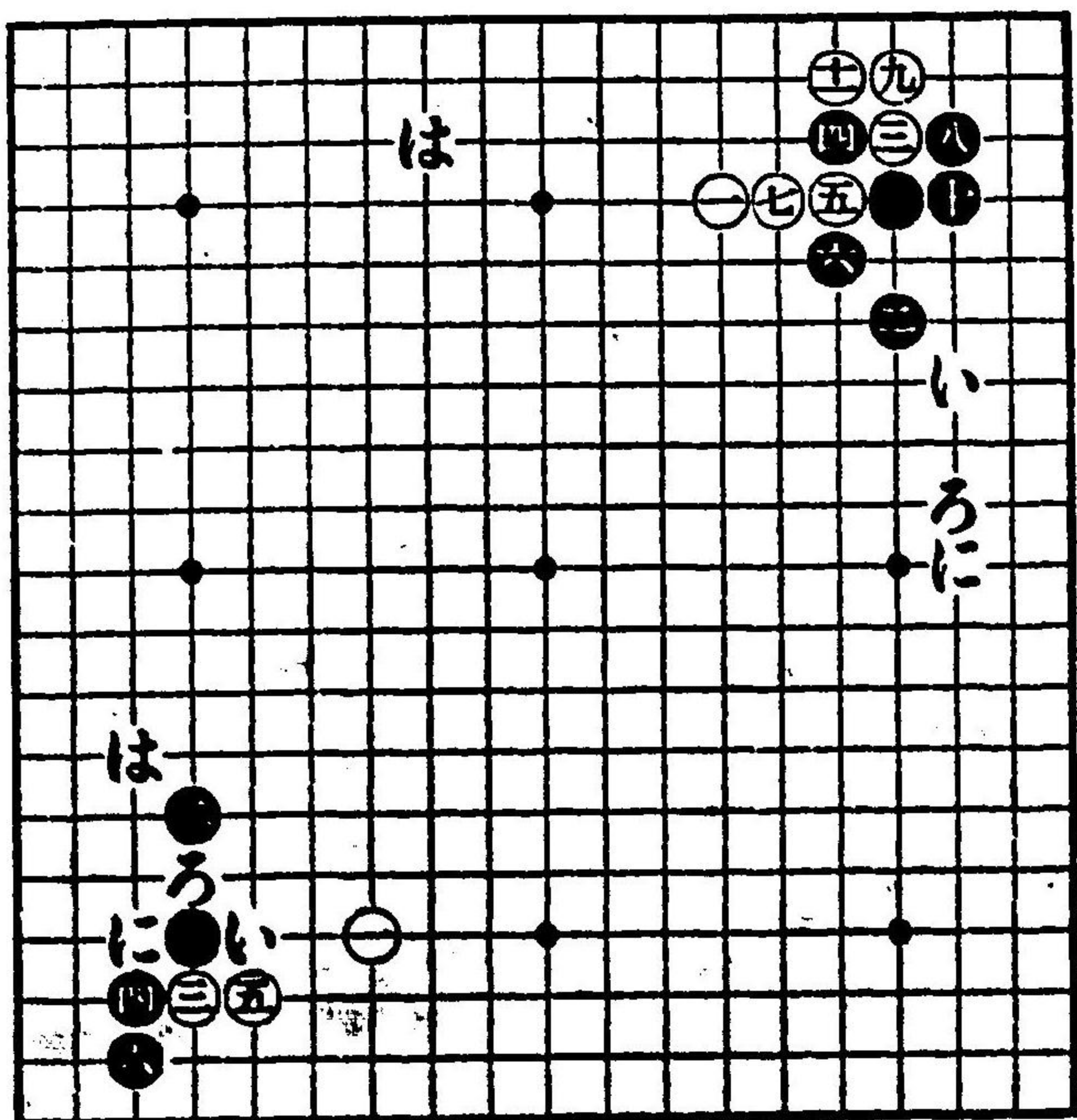
斯る次第で、元來一間高掛りといふ手は、布石則ち石立としてはあるが、定石としてはない手であるから、その説明は「布石通解」の方に譲つて、茲には略することにする。

(第百十四圖)



今度は「二間高掛り」であるが、この掛りは、白からいへば軽い手である。そこで、第百十五圖のやうに、白が①と掛つた時は、黒は②と一間に高く受けるのが一番よろしい。場合によつては、「い」に受けることもあり、又手を抜いて他の大場に打つても宜しい。白③の手は、定石として出さうと思ふから打つのであるが、實は直ぐに打つ手ではない。矢張り「ろ」に掛るとか、「は」に開くのが順序である。しかし、それでは布石になるから、直ぐに附けて黒の受方を示すのであるが、これに對して、黒は④と打つのが善い手で、斯る場合には、かく打つに限るのである。以下圖の如くなつて、黒が「に」に開くことになれば、黒は十分の形である。

第百十六圖は、前圖黒④の手よりの變化であるが、若し白が⑤と穩かに引かずに、「い」に跳ねたとすれば、黒は「ろ」に繼いでよし、⑤の所に切れば、前圖と同じになる。黒⑥は得の手であるが、若し⑦の石が「は」にあるときは、「に」に繼いでゐるのも善い手である。



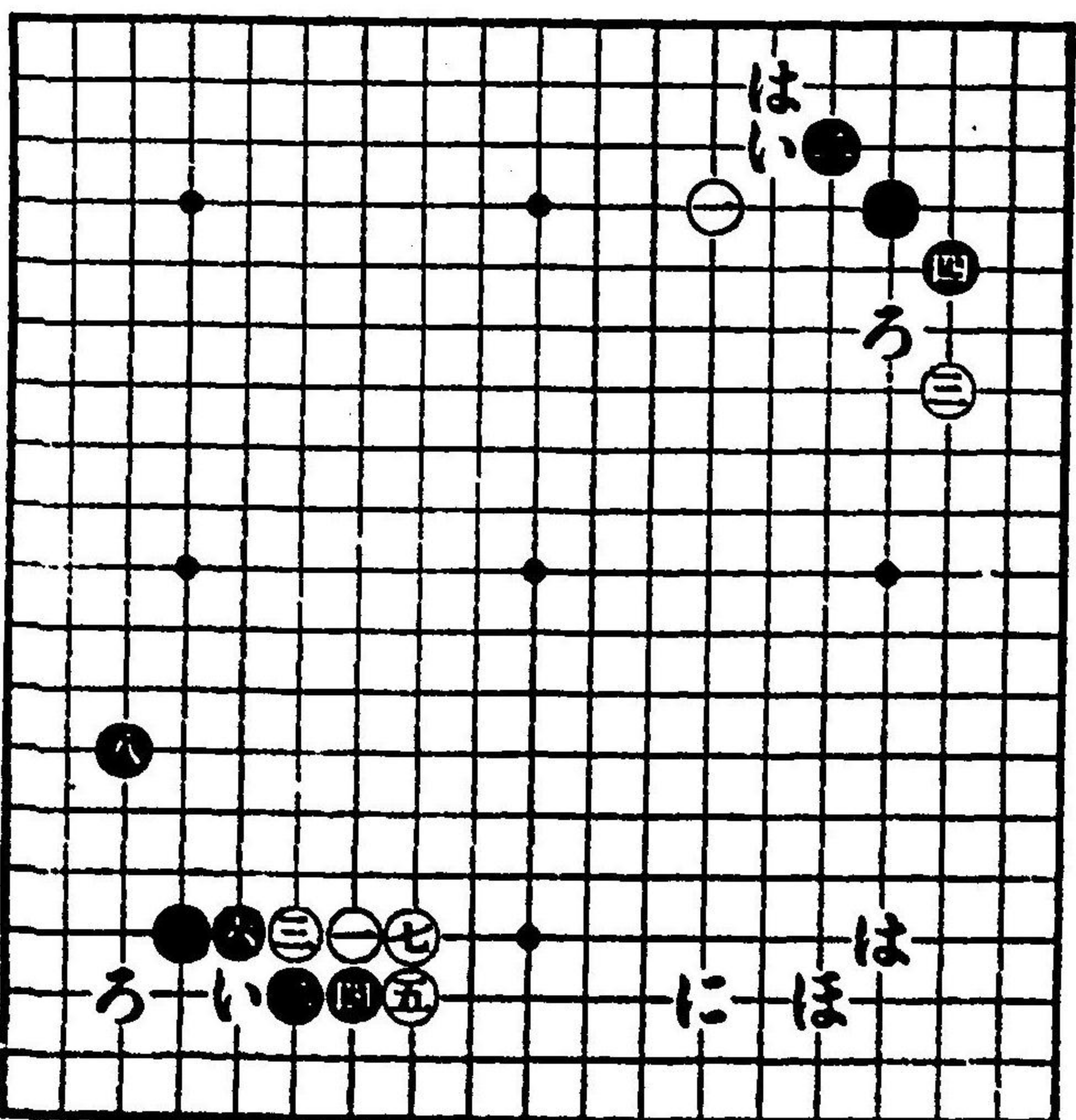
(第百十五圖)

(第百十六圖)

第百十七圖は、別に説明するほどのこともないが、若し白が③の手で「い」に尖み附けて來れば、黒は④の手で「ろ」に飛ぶのである。又圖の如く④と打つた後、白が「い」若くは「は」に打つて來たならば、黒は手を抜いて他に打つのがよろしい。

第百十八圖は、黒⑤の手よりの變化であるが、白⑥は形といふものである。黒⑦の手は、「い」に引く方が善いやうに思はれるが、さうすると、白⑧の所に抑へられた時、恰好が悪くなる。といふのは、後に白から「ろ」に打込むといふ筋が、いつまでも残つてゐるので、何となく味が悪いといふ譯である。それゆゑ、黒は圖の如く出て、⑨⑩となるのがよろしい。

尤も黒⑥の手は、若し右下隅「は」に黒の置石のある場合には、「に」に打つのも善し、又この隅に全然双方の石のない場合には、「ほ」に目外しに打つものと覚えておくがよい。



(第百十七圖)

(第百十八圖)

第百十九圖は、前圖白③の手よりの變化であつて、黒は好ましい手ではないが、さうとて、別段悪いといふ譯でもない。

第百二十圖は、黒①の手よりの變化であるが、若し白が③の手で④の所に跳ねれば、附手の定石になるから、改めて説明する必要はない。
黒②の手は、④の所に切る手もあるが、少しゴタついて来るから、置碁としては、圖の如く打つのが、紛れがなくてよい。

わたしこし

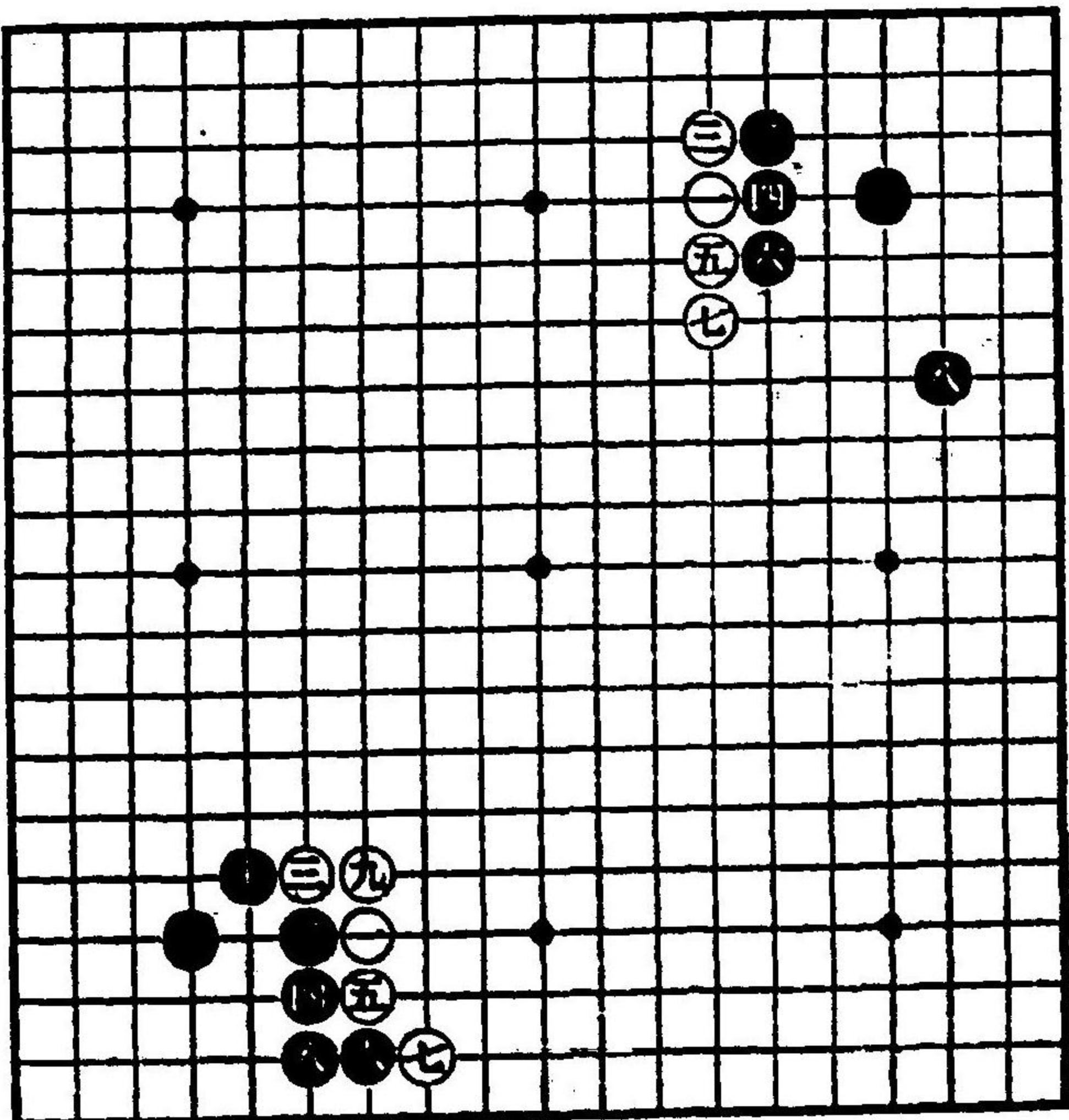
唐舟の浪の音も

また打ちたえす

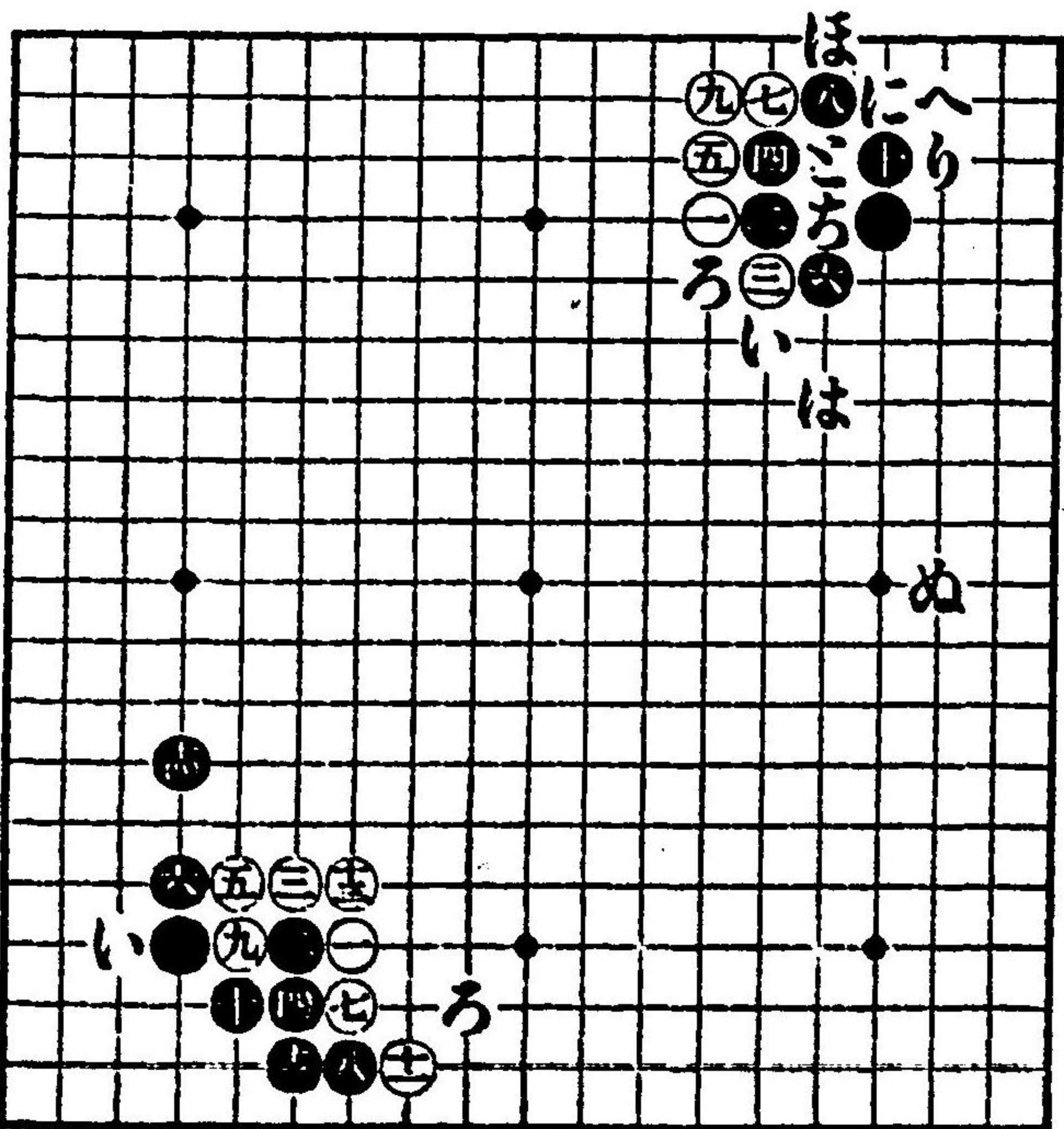
濱のまさこは

(明日香井上—覆經)

(第百十九圖)



(第百二十一圖)



(第百二十二圖)

第百二十一圖は、前圖黒②の手よりの變化であるが、黒は①の手で「い」に跳ねて白「ろ」に繼がせ、然る後「は」に掛繼いでゐてもよろしい。尤もさう打つ以上は、後に白が「い」に附けて来た時に、①の所に突張り、白が「ほ」に渡れば「へ」に抑へて、②の二子を棄てるつもりでなくてはならぬ。併し、置碁であるから、①と圖の如く繼いでゐても、黒は十分である。
又白が「に」に附けずに「と」に切つて来た時は、黒は「ぢ」に繼ぎ、白が③の所に跳ねれば「り」に跳ね、白が「に」に曲れば「へ」に抑へ、白が「ほ」に二子を取れば「ぬ」の邊に開いてゐて、黒は非常に善いことになる。だから白は「と」に切ることは出来ないものと覺えて置くがよい。
第百二十二圖は、前圖白⑤の手よりの變化であるが、これに對して、黒⑥と受けるのは善い手である。尤も黒は⑦の手で⑧の所に切つてもよし、又「い」に締つてゐるといふ手もあるが、とにかく圖の如くなつては、後に黒より「ろ」に覗くといふ手があるから、黒は十分である。これを要するに、白⑤の手は、唯變化を試みたといふだけで、餘り宜しくない手であるといはねばならぬ。

第百二十三圖は、前圖白が③の手より變化を試みたのであるが、これに對して黒も亦④と逆に打したのである。然るときは、白は⑤と伸びるより仕方なく、⑥は自然の手順であるが、この時黒が⑦と掛懸ぐのは、大に善い手である。若し⑧の手で⑨の所に下り、白に「い」に抑へられると、一時は先手であるが、後に白より「ろ」に覗かれた時、應手に苦むことになる。だから、斯る場合には、いつも⑦と掛懸ぐべきものと心得ておくがよい。

白⑩の手は損の手であるから、「い」に下りたいところだけれども、先手を取るために、かくは當てたのである。又「い」に下る考で打つ場合には、先づ「は」に覗いて黒に⑪と繼がせ、然る後「い」に下るべきものであるが、この場合は、白が「は」に覗けば、黒は⑫と繼がずに「に」に抑へる。その時白が「い」に下れば、黒は手を抜いて他を打つし、さればとて、⑬の所に切れば、先手ではあるが損であるから、つまり、圖の如く⑩と當てて先手を取り、他を打つくらゐより旨い手はないのである。

かくて、後に白が此處を打つ場合には、「い」に繼がずに「ほ」に掛懸ぐのが、いはゆる本手であるといふことをも、亦常に心得ておかねばならぬ。

定石通解 第二巻終

第一巻に對する全國新聞の批評

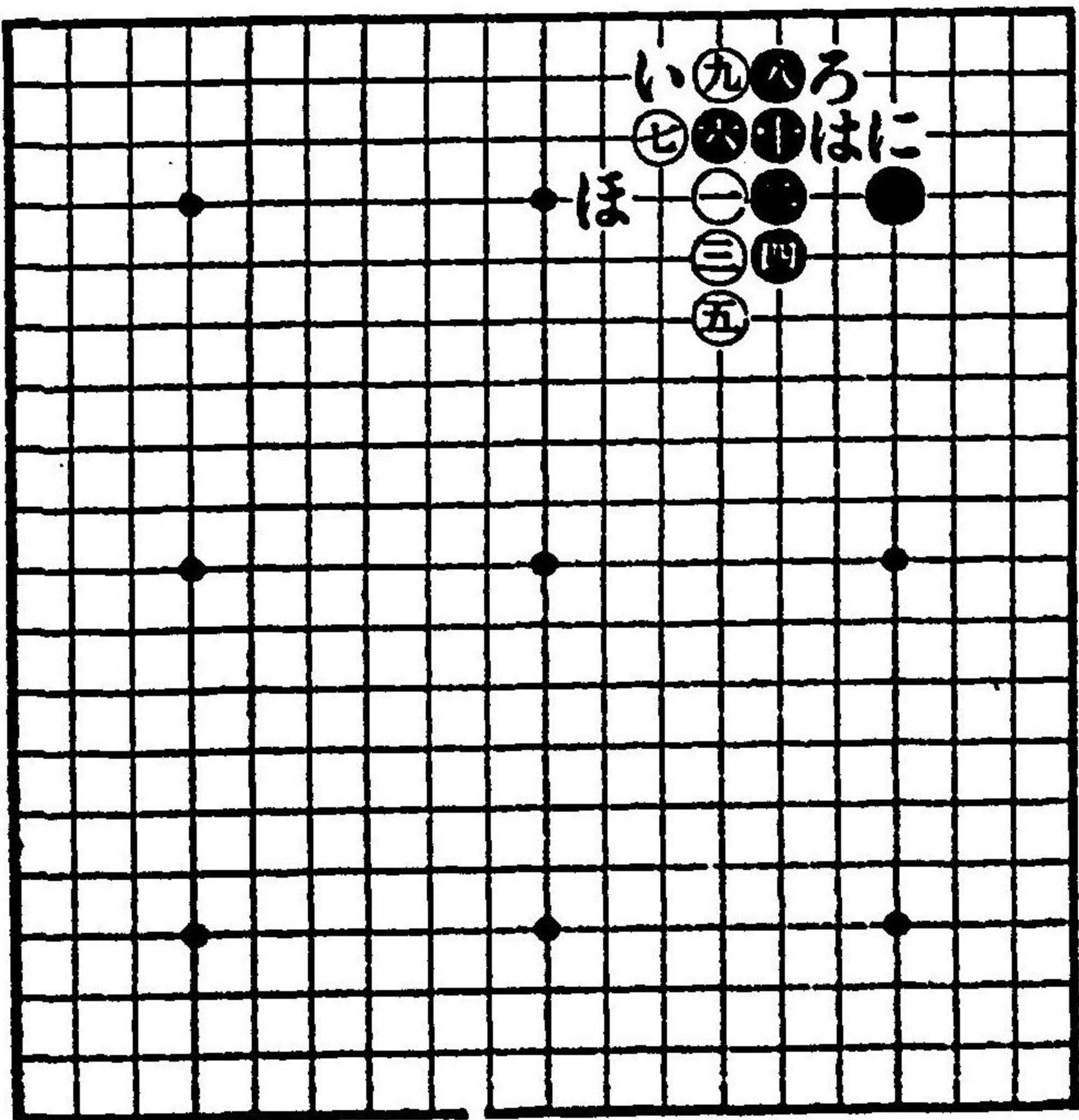
▲定石通解(第一巻) 五段岩佐銈氏の講述せるを胡桃正見氏が編輯したるものにして附手の定石一百四十五種に詳解を加へたり夫れ附手は最も堅固なる陣法として四目以上の置碁には好んで採用する所なりと雖も其の變化と原理とを知悉するに非ざれば或は白軍の爲に包圍せられ或は一隅に壓迫せられて僅かに數歩の餘地を保ち或は白軍の陣營を整備せしめて攻勢に轉ずる能はざる不利あり本巻は即ち附手の缺點と長所とを分別解説して餘蘊なく附手の定石に盡くとなすも過言に非ず初學者之に習熟せば庶幾くは堅實雄健の戦法を試むるに於て至便ならん(四十二年六月十日報知新聞)

▲定石通解(第一巻) 五段岩佐銈氏の講述に就きて日本新聞記者たりし胡桃正見氏の編輯したるものなり從來此の種書籍に通常とする意を以て通ぜず思つて遂に講者の情眼者に解せられざるの遺憾少し其の內容は置碁四目の定石中附手百四十五種を解得して定石通解の第一巻となしたるものなり新道の達人たる前文相牧野男爵の「茶局則一小世界」の題字を得て巻頭を飾り其の總論に於て置碁に於ける定石の歴史其の性質及對局上の心得を説き古今名流の新道研究の餘生したる格言を記し手割布石の四つて起りたる理由を説き附手なるものは全體より利益の着手では無いが四目以上の置碁に在ては紛れがなくて好手であるといふ場合に一圖に付き一の要石に及んで事毎に利害得失を叙し變化百端極りなき手筋を説くに順序を正し親切に解説たり(同六月二十五日東京二六新聞)

▲定石通解(第一巻) 業界新聞に掲載したる「附手の定石」を覽めて定石通解第一巻と命名したるものにて普通置碁を説明したるものと其の選を異にし詳々として人の附に落ちるやう極めて丁寧親切に順序正しく説明を爲したるものなれば素に趣味を有するものに取つては殆んど福音に接する思ひあるべし(同六月三日毎日電報)

▲定石通解(第一巻) 本書は方國社の岩佐銈氏(五段)の講述にて置碁の附手の定石に對し百四十五通りの圖解を以て説明したるものにて何の手吉若しくは悪との短評に止まるか或は此所口傳などにて透ける從來

(第百二十三圖)



の著者の意を説き丁寧な解説を試みたものにて初學者の好むものにして止らざるべし(同五月二十日國民新聞)

▲定石通解(第一巻) 定石に關する書籍は多いが説明が足りないもので初學者に取つては斯かる書籍は餘り價値の無いものだと考へて居たが業界新聞には昨年一月から五段岩佐銈氏の定石の講述を掲げたが非常の好評であつたので、附手の定石大けを編めて發行したのだが定石の書籍としては近來稀に見る所の好著で殊に執筆者が永く新聞記者をやつて居つた丈けに其の書き振りが頗る平易である(同六月二日日本)

▲定石通解(第一巻) 古來定石に關する書籍は數限りなくあれども多くは打方を圖に現したるものに短評を試みたものにて懇切なる説明を加へたるもの少し本書は此の缺を補はんが爲に胡桃正見氏が最も平易なる筆にて岩佐附手の講述附手の定石を説明したるもの尙之を基として進々巻数を進め以て本書の完成を期すと云ふ業界に於ては一度本書を讀むべし直接岩佐附手に就いて學ぶと開眼の好實績を得ん(同五月二十七日東京毎日新聞)

▲定石通解(第一巻) 東京業界新聞社の胡桃正見氏の編輯する五段岩佐銈氏の講述なり説明丁寧初學者の爲に好個の處有たらん(同六月二日東京毎日新聞)

▲定石通解(第一巻) 五段岩佐銈氏の講述せるものにて「たゞ」業界新聞に掲載したるを讀めたるものにて初學者の研究に資せるものなり(同五月二十六日時事新聞)

▲定石通解(第一巻) 岩佐五段が丁寧親切を旨として撰ばるる「附手の定石」の講述を胡桃正見氏が筆記編纂せるものなるが全くの初心者にても容易に新道に指を染め得るやう分り易く説明しあるが本書の特色なり(同六月十二日大阪毎日新聞)

▲定石通解(第一巻) 本書は五段の大家岩佐銈氏の講述、元富山日報主筆たりし胡桃正見氏の編輯にかゝるものにして巻頭には講者と筆者と

の小照を掲げ「素局則一小世界」と題したる牧野前文相の書を載せ附手の定石百四十五圖を集めて一巻をなしたるものなり其の解説は最も町専親切な極め文章また平易明瞭なれば何人も本書によりて圍碁の門に入るを得べく殊に順序整然として一糸紊れざるが如き從來世に有難たる定石本と其の選を異にするものあれば初學者は申すまでもなく素の趣味を解するものは是非とも一本を座右に備ふる必要あるべし編者は其のしがきの末尾に「若し本書を讀んで碁が上らぬと云ふ者は其の云ふ人があるならば其の人は全く碁の才の皆無の人で普通の人ならば誰れでも必らず上達するを確く保証する」と明言せしに因て見るも本書が如何に苦心の作たるかを知るに足るべく巻中圍碁に關する詩歌俳句金言及び圍碁を擧げて興味を添へたるが如き圍碁入門としては他に類なき珍本と云ふも過言にあらざるべし(同六月十一日北國新聞)

▲定石通解(第一卷) 本書は岩佐五段の講述を胡桃正見氏の編輯に成りたるものなり就いてこれを見るに昨年一月より方圍新聞即ち今の素局新聞初號以來開講して幾萬同好者の大歡迎を得たる「附手の定石」だけを蒐めて其の一巻となしたるものにて定石の歴史・性質及び對局上の心得を説くに極めて精細自分等の如き速中と雖も又能く其の眞實な了解し得て利益する所少なからざるを覺ゆ古來定石に關する書籍甚だ多し只だ何の手吉とかの形黒大吉とかいふ短評を加へたるに過ぎずし一手一に就いて其の手の意味を説明せざるもの殆んど稀なり本書は此の點に十分の注意を拂ひ順序正しく町専親切なる解説を加へられたるものにて新道に關する近來の好著述として同好諸君の坐右に之れを推奨せざるべからず而も其の上等の日本紙を以て最も風雅に製本せられたる樂石君例の凝り性を發揮して一段の妙味を感ず野村前文相の巻頭に「素局則一小世界」と題せられたる此の巻の内容を説明して又遺憾なしと云ふべし(同五月三十日高田新聞(り生))

▲定石通解(第一卷) 素を圍む者は先づ定石の何物たる乎を了解し置かざるべからず定石の得了は尙ほ社會に立つ者の道徳法則に通せざるべからざると同断也此の巻は在來の定石解を補うて餘りあるのみならず解説頗る易き様に編し而かも素客の爲めに遠慮を遠慮なく披瀝したる當代得難き真書といふべく誠に六相三略虎の巻とは此の巻の謂予者若し五段岩佐銈氏編輯は樂石胡桃正見氏にして香冊の體裁は日本式級位美を極む

の、在來此の種の番冊世に顧れたるもの甚だ多けれど打方に就いては早に何の手吉とか此の形黒大吉とかいふ如き短評を附するに止り一手一に向つて何故に其の手の吉なるか悪なるかを詳説せざるもの殆んど鮮し稀れにこれ有るも猶ほ初學者をして隔靴搔痒の感みあらしむるは此の種専門家の文章に拙くして講説の意を顯し得ざるに因る、今此の巻は専門大家の講述に係り文章に熟練なる土の編輯によるものなれば初學者のためには好伴侶たるべく又其の裝釘の淨雅なる机上一隅の塵を覆ふに足るべし(同五月二十二日函館毎日新聞)

▲定石通解(第一卷) 五段岩佐銈氏の講述にして所謂難易の中庸を得て初學者と雖之に依りて悟る處多きを信す好著と云ふ可し(同六月十一日小樽新聞)

▲定石通解(第一卷) 本書は置素定石百四十五圖條につき圖解と説明とを與へ町専に變化の理を教へたるものにて初歩のものとして雖もよくその理を了解し得べし(五月二十二日信濃毎日新聞)

▲定石通解(第一卷) 五段岩佐銈氏の講述を胡桃正見氏が編輯したるものにして方圍新聞素局新聞等に連掲したる圍碁定石講義を蒐集し附手定石百四十五圖一々明瞭に利害得失を論究説明したるもの也愛素家に取っては唯一の友たるを失はず殊に本書の特長は香冊に依るのみにて師と對局すると殆ど擲ぶなし文運の進歩は克く口授口述の代用として一冊子の其の秘奥を萬人に指示するに至るものと謂ふべし(同五月二十四日上毛新聞)

▲定石通解(第一卷) 講述者は五段岩佐銈氏にしてはしがきに「本書の如く順序正しく、町専親切の解説をなし且つ誤謬のない香は古往近來断じてあるまい」と言つて居る、斯の道研究者には持つて來いの手引である(同五月二十五日東洋日の出新聞)

▲定石通解(第一卷) 五段岩佐銈氏の講述を胡桃正見氏が編輯せざるものにて素局新聞に連載せしを今回美裝して發刊せるものなり新界に遊ぶものは一本を座右に備へざる可らず(同五月二十六日河北新聞)

▲定石通解(第一卷) 講述者は五段の岩佐銈氏にて胡桃正見氏が編輯したるもの、樂石氏は現に素局新聞の發行者で同誌に載せたる「附手の定石」だけを今回蒐めて出版したる也同氏序に云つて曰く「定石の香冊

(同五月二十一日土曜新聞)

▲定石通解(第一卷) 五段岩佐銈氏の講述せしを胡桃正見氏の編輯せしものにて解説は極めて親切丁寧なり(同五月二十六日北海タイムス)

▲定石通解(第一卷) 本書は五段岩佐銈氏の講述したるものを胡桃正見氏の編輯したるものなるが古來定石に關する書籍は多し其の多くは打方を圖にて現はし之に「何の手吉」とか「此の形黒大吉」といふ短評を加へたるに過ぎず本書は一手一に其の手の意味を説明したれば初學者に取りては眞に新道の寶典なりと謂ふべし(同五月二十一日九州日日新聞)

▲定石通解(第一卷) 本書は樂石胡桃正見氏が五段岩佐銈氏の講述を編輯したものである。編者も言ふが如く古來此の定石に關する多くの著書はあるが、簡單なる説明に止め爾來の所になると、此所口傳といふやうなことで逃げて了つて詳密なる解説を加へたるものは殆んどない。故に初學者にあつては其の理を究むる用を爲すに於ては定石の香冊が座右にあると云ふに過ぎぬ然るに本書は「附手の定石」だけを蒐めて定石通解として發刊したものであるが、定石百四十五圖を収め、一手一に就いて手の意味を説明し香冊利害を順序正しく町専親切に論評を加へた新道研究者のためには得難き真書である、今後此の素客が素局の爲めに買取するに決して宜くないと信する(同五月二十八日近江新聞)

▲定石通解(第一卷) 本書は五段岩佐銈氏の講述に係り圖に「たび素局新聞に連載せるものを今回美裝して香冊と爲せり解説は順序正しく町専親切にして本書には附手の定石を載す方圍界の好著考なるべし(同五月二十三日岐阜日日新聞)

▲定石通解(第一卷) 五段岩佐銈氏の講述に於ける巻頭を飾るに講述者及編輯者の肖像を以てし其の内容は百頁に亘り懇切に定石を解く新道攻究者必讀の書なり(同五月二十四日上野日日新聞)

▲定石通解(第一卷) 本書は素客岩佐銈氏の講述を編輯したる者にして定石の沿革性質及び對局上の心得より定石の實際置素中の附手に就き町専親切の解説をなし同好者の師友たらんとするに在り(同五月二十四日福島民報)

▲定石通解(第一卷) 本書は五段の岩佐銈氏の講述せるを胡桃正見氏が編輯せるもの巻頭口傳には胡氏を寫眞版にて鮮明に紹介し牧野男の原字を掲げたり勢頭素道論より或は置素の定石及其の變化を百數十の圖解を以て順序的に町専親切に解説したる和本なり同好諸君の大歡迎を受けるは謂ふまでもなかるべし(同六月八日岩手日報)



碁界新報

每月一回五日發行
 一年分稅共九十八錢
 半年分同一圓九十錢

論說あり史傳あり、定石、布石の解説あり、手筋の説明あり、碁界における珍談奇聞あり、名手の對局あり、讀者の對局あり、碁界消息あり、苟くも事の碁界に關するものは、收めて漏すところなし。眞に國碁雜誌界の霸王にして、滿天下の好評噴々たり。

發行所

東京小石川久堅町十一

碁界新報社

(振替貯金口座東京壹八二三番)

明治四十三年四月十七日印
 明治四十三年四月二十日



定價六十錢
 送料金四錢



著作者
 兼發行者

岩佐 銈

見

印刷者

渡邊 八太郎

印刷所

日清印刷株式會社
 東京市牛込區板町七番地

東京市小石川區久堅町十一番地

發行所

碁界新報社

大賣所

- | | | | |
|-----------|------|------------|-----|
| 東京神田表神保町 | 東京堂 | 同 京橋區元數寄屋町 | 北陸館 |
| 同 京橋區尾張町 | 東海堂 | 同 日本橋區本石町 | 至誠堂 |
| 同 神田區裏神保町 | 上田屋 | 同 京橋區西紺屋町 | 良明堂 |
| 臺灣臺北 | 杉田書店 | | |

246
 1112

